

○忍んだりやな、忍ばれたりやな、裏の細道小敷から

○おもふ儘なるのや今宵かな、月は朧につまはきて、もみち葉を見よこいは散る

②葛の葉

○さてもやさしの、いよ葛の葉や、何を便りにはひ掛る、いよえいはひかよる

○君を松島をしまの海人の、袂干がたき我涙、いよえいわが涙

○深山清水はそこから澄むが、君の心も底からか

○山で小柴をしむるが如く、今宵其様としめあかす

○浅き契にあひ馴れ染めて、ふかき思はあよさて涙川、君に逢瀬を待つばかり、あよさて待つばかり

○こんどござらばもて来てたもれ、ぎふのお山の檜の木の枝の、浮世がかりのおもひ葉を

③比良や小松

○比良や小松の朝がよひ、袂が濡れ候磯打つ浪に

○鹽津海津にあるときは、上りたいよの坂本へ

○門に立ちたは八もじさまか、夜風身の毒内ござれ

○いつの何時そなたを見初め、我が身はたど磯邊の千鳥、鳴かぬ間もなや君ゆゑに

○こゝは三條か、やれ釜の座か、一夜泊りてしけりまるらしよ、われが殿は名古屋に

ござる、扱もお留守は物憂いものぢや、えい／＼さら／＼のう石をひく、えい／＼や

つというて曳くには、夢だんべいの、えいというて曳けばお靡きやるかのう、いよや

つというてえいとへ、えいさらえい

④長崎

○みやいちがよれたく、しよぢよがなさけ

○長崎の鶏は時知らぬとりで、眞夜中にうたうてく、君を戻す

○くれなるの三尺手拭、形見に見よとて置いて行く

比良、小松、鹽津、海津、坂本、皆近江にあり

釜の座—京都の地名

咲くと一咲くと
もの意

Santa Maria
さんたまりや

○紅は薄くなるとも、そもじと我とは一期契るべいぞよもさ、白髪に小枝の咲くと契るべいぞよもさ

○昔より今に渡りくる黒船、縁がつくれば鱧の餌となる、さんたまりや

○思はぬ君にお情は無益、うき身やついて歎く我等に落ちさせられぬ

○名所さまふく多けれど、吹上の濱は和歌の浦、さあ天神玉津島、布引の松山いく千代千代と、和歌山の松、お詣りあれの紀三井寺

⑤しもさほそり

○この程は戀ひつ戀ひられつ、今宵は忍の初でござり申すよの、さあいよへいよへ、打解けてゆらくとお寝れのうさ、まだ夜は夜中よ、しけれとんと君さま、さあいよへ

○まことやら鹿島の湊に、彌勒の御船がついてござり申すよの、さあいよへく、帆柱は黄金の帆ばしら、帆には法華經のごのやまん巻物、さあいよへく

○甲斐の國なる信立さまのな、一度もござらぬ、二度もござらぬ、おちよほ忍ぶに六つ

の苦が候、まづ一番に雨に霰に夜露に柴垣、のうさて犬のあだ吠え、それ月はなほ月は、のうさて月はえせ者

○忍ぶ細道に松と胡桃は植ゑまい、待つ夜に其身がくるみでもなし、なよさてまことにくる身でもなし

○去年の竹とよ今年の竹とよ、しどろでもどろで、のうさて節がそろはぬ、なよさてまことに節が揃はぬ

○誰でござり申す、壁越のまた鼠鳴、今宵は殿御の後に寝て聞く、寝ても聞けとよ、おきても聞けとよ、今宵の夜がさて明日の夜になるとも、逢はずば戻るまいよの、なよさてまことに戻るまいよの

○扱もつれなのきんぎんさまや、きんぎござらざ、ぬめりてくらそ、それを誰ぞと尋ねて聞けば、六條下の町の和歌山さまの内の山の神が聞いたならば、たけくたけりやろ

きんぎ—金銀か
たけりやろ—猛
りあらう

ものを

⑥京鹿子

○是は京鹿子色もよや、目結手際もよや清や、あら都戀しやのう、都のしてたち戀しやのう

○これは京小袖色もよや、紋から手際もよやきよや、あら都戀しやのう、都の染殿戀しやのう

○しんの闇にも迷はぬ我を、あと扱そさまの迷はする

○吹けよ松風、あがれよ簾、今の小歌のぬし見たや

○花とならばなよ、たんだおん身は紅葉の色よ、のうさて日數にそひて色まさる

○梅の香を櫻ばなに宿らせて、青葉のまよに眺めばや

○尺八の一節ぎりこそ音もよけれ、君と一夜は寝も足らぬ、あら心なの君さまや

○そちと此方とは松に藤のさがり枝のごとく、誰彼時にかよる、かよるな情が身に纏は

たんだ一尺

るる

⑦はで片撥

○笛による鹿は妻故に死する、我等もさまに、やれ命すてうすよの

○ありがたの利生や、お有りがたの利生や、佛まるりの利生で妻に行逢うたのう

○朝間とく起きて手水瓶をみれば、我がおかぬ花のあるも不思議やな

○不破の關の板間に月の洩るこそやさしけれ

裏組

⑧賤

○賤の身なれば色には出さぬ、あ只心のうちに焦るよ

○立寄りてむすぶ山の井の、あかれず飽かぬ中はな、松の二葉よ、千とせ経るまで

○筆でかくとも繪にうつすとも、さらに盡きせじ松島の、波にうつらふ月の影、鳥の數

あかれず一閑伽
にかく

しん知らぬ
 ○たんだ人には馴れまいものよ、馴れての後は、るゝんるゝ身が大事なるもの、離るるが憂いほどに

○かづいた水がゆりくたぶつき滾るゝけなものを、現なや殿はみやこに

②にしき木

○神のおまへの御注連繩、そよ吹く風にも靡けばなびく、つらき心を打捨てよ、ものぐねにななめされそそ、ふふりわるや、打解けよ、くすみても詮なや

○山がらが籠のうちでの恨み言、籠が小籠でもんどり打たれぬ

○七里小瀆のな、砂の数ほど思へども、縁がうすいやら添ひもせぬ

○をつとは錦木とり持ちて、鎖いたる門をたよけども、内にこたふる蟲の音の、思ひきろやれ戀の道、きりはたりちやうく

○忍べども思ふ君には逢はずして、村さんめははらくほろと降るほどに、思ひきろや

きりはたり云々
 一虫の聲なり

村さんめ一雨

れ戀の道、きりはたりちやうく

○とてもお捨ちやるものゆゑに、去りがたいとて抱かりようか、浮世の中のさんだんにさ、言ひつる事よの、言はりよよりもなまなか一夜はまるるまいよ、いやくいやなら始に否とはおしやらで、今さら何とならうぞのう、思はざなきそ増花ぐるひせうずもの、わざくれ

③青柳

○さても其方の立姿、春の青柳絲ざくら、心がたよくと

○文もやりたし便宜もしたや、佛に立つそのおもかけを、忘れもせで身に添ひ、そぞろに浮れきてうきやうこつや、正體なしや憂きや戀のとまらぬ、只兎に角に恨めしや

○枕に掛るみだれ髪、いとど心の亂れくゝてやるせなや、よしや其身が何とならうぞの縁なき思に身はほれて、朝顔の花の露よりもろき身もちて、さのみ心な盡くさせそ

うきやうこつや
 一うきやうこつや
 やの衍か

ねいろ―根入、
寝入
とぎ―磨、伽
あかた―奥方
うたい―打たう

○十七八は砂山の躑躅、ねいろとすれば揺り起さるよ
○曇り鏡か我が身は、思ひまはせばとぎほしやく
○明日は殿ごの砧打、おかた姫ごも出てうたい、きぬた踊はおもしろや、砧をどりはひと踊

④はや舟

○祝ひめでたのう、嬉しめでたのうよう若枝も榮ゆる、のう葉もしける
○ながの長崎の長のるすんの留守すれば、思ひ出すことは宵と夜中とのう 曉と、なごややまちよのう、肥後ぢや八代熊本ぢや、鳥も得かよはぬ山なれど、住めば都よ我里と
○四角柱ののう、四角柱のまたのんえいそれ角、角の無いこそ添ひよけれ
○花は咲いてもものう、梅は開いても花さいて、無益のあだ花よ
○これがいとまな、ふみ手には取らいでなま中に

宮―安藝の宮島
はつかぢ―いち―
二十日市
げんざ―源三と
いふ人名なるべし
こひ―鯉、戀
めがきみも云々
―目がさめて君
も寝ず我も寝ず
との意か

○山ぢや谷間の深谷おろしの木の葉埋れのう、柴の庵もまたのんえいそれなつ、都なれ
どもものう旅は憂や
○沖の引く汐に竹に油を塗るやうに、とろりくと唄うて名乗りて、漕ぐや船方はえい
上様の御座船か、またのんえいそれ、船ではやらいで唄でやる
○おちよほちよほ様の態は椋鳥ぢや、聲は鶯ぢや、しゆくしやかむくしやか、さんは
かしんはか、しんからきうたかすんばいほ、眉目が能ござれば聲も詞ものうしなやかな
○宮へは三里へのうえい、三里も近さんり、はつかぢいちのけんざが塗物は、漆では塗
らいで、梶子ばかりでさつと一刷、えいそれはつたらずんでんどう、そのやうな塗物
は、たどはくるととも、おらはいやく、いやで候、やがて剥ぐるに
○猿澤の池の水ではない、こひがすみ候、身の池に
○篠竹の小篠竹の窓の嵐に、めがきみもお寝らず、われも寝ず
○櫻木に鶯がとまりて、琴の響に花がちる

○さきの月の廿五日に定めたるには似ぬ、照るも曇るも冬の日も

○山は雪ぢや、麓は霰、里は雨、うらへまはるも其様のる

○沖を漕いで通るは、明石の浦のけんざが本船か、さて船ではやらいで唄でやる

○一の枝ひけば二のえだ靡く、なびけや小松、一のえだつりりんりく

⑤八はた

○月は八幡のまだ空にも、往のくとは思へども、後に心がとどまりて、後髪が引るよ、

なんほ戀には身が細ろ、二重の帯が三重まはる

○たつるお茶には泡たよで、我が浮名はむらくくに立つ、むらくくに立たば立て、まこ

しよぐわん一賞
玩

との心解けずばしよぐわんぢや

○あの山陰をすぐに来るだに遅いになよ、眞實恨言さしおいて、まづ抱ておよれのう、

なよしんじつ

○思ふ門には竹をうゑて、雪の降りたる曙を、つれなき人に見せばや、靡く笹の葉

○ひとの嫁ごと竹にさく花、よやおもへばやへ曲もない、さまぢや詮ないしやもしや

もちちくなにしよ、そうてなにしよ、それしよしやなしよ、若衆をどりをのう、若

衆踊を一をどり

⑥みす組

○御簾の 倣もの越に見そめ聞きそめ、うかくと戀をして、瘦するは人の知らずして、

夏瘦をすると、やれ推めさるよ

○露に亂るゝ絲薄、そよくと吹來る風にも靡きそろ、現なや正だいなしや、とは思へ

ども、そもじと我とはよろづ世までも千代までも

○風にまかする浮雲も、吹く方へゆく、目でしめばひくと思はれ、つれなの君の心根や

○かづいた水が揺りこぼるゝも浮世の習、さてもつれなや、しやうだいなしや、憂きや

憂や、ならぬは破れた尺八かのう

○竹がな十七八本ほしやな、浮名や洩さじの中戸に組も

○破れた尺八手なかけそ、とてもなるまいもの故に、われた尺八手がござる、じいじとしむればなるものを、取りて吹きて見たれば、ふしがちやうとした、れつろれつろりよれつのがつれつろ

○なよし／＼は梨のあだ花、なよしなりはしもせで、なると名の立つなよし

○彫小竹にあらねども、さらにさら／＼さらに知らぬもの、ともすれば何ぞよ其方のものぐねり、何となりとお好みや、鐘を打とかのう

○しんきはりよやれ、濱へ出て沖のしま／＼を見てなりと、あれに見ゆるは志賀の浦

こがら崎一松、田舎くだりの道すがらく

○田舎くだりの旅の殿、名所の月がながめしやんとこのう、しやんとながめたりよさ、そぞろいとして遺瀬なや

本手端手裏組終

しんきはりよ
辛氣を晴ちさう

祕曲相傳之次第

初傳 揺上

二傳 亂後夜

此二曲を新曲の祕曲といふ也、誓盟をもつて相傳の時師へ一禮の法式あり、亂後夜以前に後夜敦賀ごやといふ二曲あり、此曲に手を加へて三曲一にして亂後夜となし傳授する、後に晴嵐といふ一曲淺利檢校手をくはへて弾く也 口傳

三傳 七つ子 此曲は浮世組をさきへ弾きその跡にて弾く也 四傳 松むし

五傳 淺黄 六傳 茶碗

此三曲を新組といふ、七つ子相すむうへ次に傳授するなり

七傳 堺 八傳 中島

此二曲を本曲の祕曲といふ、極最上の傳授誓詞神文ありて、一卷の書を附屬するなり、師へ一禮の法式あり 口傳

右相傳法式之次第者柳川檢校より淺利檢校相承し、淺利より今都の早崎勾當にうけつぎぬ、こころざしあらん人は早崎より口受あるべき也

其三曲は... 其四曲は... 其五曲は... 其六曲は... 其七曲は... 其八曲は... 其九曲は... 其十曲は... 其十一曲は... 其十二曲は... 其十三曲は... 其十四曲は... 其十五曲は... 其十六曲は... 其十七曲は... 其十八曲は... 其十九曲は... 其二十曲は...

松の葉 第二卷

長歌目録

一	若みどり	佐山檢校作	二	まさみち	同人作
三	不二まうで	同人作	四	源五しう	同人作
五	三谷をどり	同人作	六	雲井ちうさい	同人作
七	木やり	同人作	八	戀ごろも	同人作
九	小夜ごろも	同人作	十	もしほ草	同人作
十一	櫻づくし	同人作	十二	冬草	同人作
十三	四季	市川檢校作	十四	やへ梅	同人作
十五	春日野	同人作	十六	はるごま	同人作
十七	手まくら	同人作	十八	鎌倉八景	同人作

十九	わか草	同人作	二十	春風 <small>はるかぜ</small>	同人作
廿一	狭 <small>さ</small> ごろも	同人作	廿二	らつひ	同人作
廿三	戀 <small>こひ</small> づくし	朝妻 <small>あさつま</small> 檢校作	廿四	笠寺 <small>かさでら</small>	同人作
廿五	山 <small>やま</small> づくし	同人作	廿六	夕 <small>ゆふ</small> され	同人作
廿七	川 <small>かは</small> 竹 <small>たけ</small>	同人作	廿八	花 <small>はな</small> の宴 <small>えん</small>	同人作
廿九	幾 <small>いくほろ</small> 春 <small>はる</small>	同人作	三十	浪 <small>なみ</small> まくら	同人作
卅一	七 <small>なな</small> 夕 <small>はた</small>	同人作	卅二	引 <small>ひき</small> 車 <small>くるま</small>	同人作
卅三	東 <small>ひがし</small> 山 <small>やま</small> 八 <small>はち</small> 景 <small>けい</small>	同人作	卅四	夏 <small>なつ</small> 草 <small>くさ</small>	同人作
卅五	うきね	同人作	卅六	小 <small>こ</small> むらさき	同人作
卅七	香 <small>かう</small> づくし	同人作	卅九	月 <small>つき</small> 見 <small>み</small>	同人作
卅八	時 <small>とき</small> 雨 <small>あめ</small>	小野川 <small>おのの川</small> 檢校作	四十一	花 <small>はな</small> 見 <small>み</small>	同人作
四十	あだ枕 <small>あだまくら</small>	同人作			

四十二	玉 <small>たま</small> くしけ	同人作	四十三	色 <small>いろ</small> 香 <small>か</small>	同人作
四十四	梅 <small>うめ</small> づくし	爲澤 <small>たのさへ</small> 檢校作	四十五	小 <small>せう</small> 笹 <small>ささ</small>	生田 <small>いくた</small> 檢校作
四十六	晒 <small>さらし</small>	北澤 <small>きたさへ</small> 勾 <small>こう</small> 當 <small>たう</small> 作	四十七	かぞへ歌 <small>うた</small>	野川 <small>のがは</small> 檢校作
四十八	秋 <small>あき</small> 草 <small>くさ</small>	松岡 <small>まつかわ</small> 檢校作	四十九	戀 <small>こひ</small> 草 <small>くさ</small>	松岡 <small>まつかわ</small> 檢校作
五十	しのよめ	武州 <small>むしゅう</small> 花 <small>はな</small> 都 <small>みやこ</small> 作			

初音、松がえ、瀬、
きてよ、吉野、藤
枝、八橋、小紫、泉
川、染川、源雲、夕
霧、たのも、八し
ほ、いづれも遊
女の名

① 若みどり

春は初音の松がえ引きて、君が千とせを八千代とおもふ、その常磐木の若緑アヒノテ梅の花がき薫るより、鶯きてふと囀りかはし、吉野の花も櫻木藤枝、色なつかしき黄昏に、山郭公音づれて、明け易き夜のならひには、夢の浮橋なか絶えて、文もかよはぬ戀の路、蜘蛛手にもを思ふこそ、かの八橋の杜若、若紫や濃むらさき、由縁ある身に頼みをかけて、縁にしを結ぶ泉川、いつ逢ひ馴れてあひ染川の、あだ浪かよるぬれ衣の、袂涼しく秋たちて、萩ふく風に亂ると露の、その玉葛かけしより、わする間もなき我が思ひ、空に浮るとあの薄雲に、夕霧かよるその月のころ、人まつ宵のものさびしさを、誰に語らんみ吉野の、たのもたよりも盡き果てよ、恨み涙に袖しほる、色は八しはに染めなし、おいて、もみぢ散りしく高雄の山の、嵐につると村時雨、幾度ぬると我袖アヒノテ拾はば消えん玉笹の、霞はつ雪ふらば降れ、我ふる妻はく實からいと

② まさみち

とるや小袖のつまゆゑに、歩行習はぬ芝道の、露に起伏ししをれつよ、軍みだれのことなれば、嵐ぞつらき花のまへ、ちりくくになる身の行方、まさみちの御手をと、たどろくとのんさて、まことに君ゆるなれば、遙かに後を見かへなば、ありし所に立つ煙、いたはしやな我つまの、何とかならせたまふごと、其方の空よとながむれば、涙の雨の玉島や、はや入相の金が崎、いたはしや老の身の、さぞやもの憂くおほすらん、我が思ひに亂髪、ゆひかひもなき身なれども、南無や宰府の御神、いにしへの憂を守らせたまへやと、深く祈誓をかけ帯の、結ぶちぎりの朽ちせずば、つまにはやがて逢ひに相あふ、松こそうれしかりけれと、語り慰み行く程に、蘆屋の關にぞつきたまふ

③ 富士詣

宿の首尾よく繕ひおきて、浮かれこがるよ二挺立に打乗りて、思ふ君をばはや三俣の上の茶屋よりわけよしが招く氣の毒に、いよのほんほわがえだもさんよへこの、いよこのへくはんもひちやさと、兩國橋までのりつけて、花火々々をめせさせ買はんせの、よい

道哲一日下堤に住みし道心者
さん茶 遊女の
下等なるもの
とよりん坊一遊
女に欺かれて金
を取らるる者を
とられん坊とい
ひ之に反して遊
女より金をまき
あげる者をと
りん坊といふ

よいそのやいそべに打波の、寄せくる遊山船がさわぎ集りて、しやぎりのおとのアヒノテ
おひやりこひやりひやりこくひやりひやりらんららりつるるるりやちやららる
ろ鉦が、又彼處を見てあれば、富士詣の行人たちが、懺悔々々六根罪障、さんぶりどん
ぶりずぶどぶひよひよんにひよ、瓢箪を腰に付けて水あそびもござんす、右は無縁寺いつ
もより、今朝打つかねの音のよさ、鉦を叩いて佛にならばさ、土手の道哲は氣の通つた佛
ぢや、好いた佛ぢや、あれを見よ、さん茶通ひの野暮すけが、駒を早めて乗たりや、とうり
ん坊あうたりやおそまささつて土手の際になれんばはらりと飛下りて、よい羽織被いて
顔打ちかくし、籬々をそろりと見れば、あれどれ振袖が袖がのう、袖がのほんのほんえ
④源五しう
花は櫻よ、薫は梅よ、はつ音床しき山ほとよぎす、月は高雄のもみぢを照らす、雪の肌
になれく馴るとは、班女が閨の戸くアヒノテ行きて三浦の籬の内に、花のいろくそ
の濃紫、きくに初音のうぐひす袖を、引手いくたび忘れもやらで、ちよの思をく、誰

に語らんけんごしうアヒノテいとしけんしうに逢ふ夜さは、さんさ雞も鳴くいそ夜も明け
そ、さんさ寺々ほろりんくのうよううらくくくく、小寺のしててんちんからこ
ろりよの、おとほつとりほとりのほとほんほとくく、しとよら太鼓もつん釣鐘も、の
うこのいよそれのう、扱撞くな鳴らすな、けんごしう

⑤さんや踊

今度はじめてお江戸に住めば、天が輝く光をくれて、きれよさかれよ振袖伊達を、だてを
駿河の富士白山ぞ、だてな若い者さんやへ重、忍ぶ畦路で蛇めがわれに當ておつた、
かつ憎けれど君が爲なりや、つらさもういこんだ、浮世忍ぶの深編笠の、姿かたちで若
きは見ゆる、篠の芒で末とけぬ、よしなの思ひぢやなアヒノテ誰も好いたるお江戸の風や、
生田昆陽野の敦盛さまが、熊谷笠にはちく杖、二つ紋のちん縮緬のべんべを著せて、せ
ん堰かしょ、憂身の寝みだれ髪を、いつに忘すりよぞ、扱も指いたる長刀、お氣の通つ
たお若衆さまの、いつくにくく血目玉が放され申さないアヒノテだても浮氣も命のうちよ

べんべー衣服
いつに、往くに

ひつひけー盃を
引きうけ飲むこ
と

⑥ 雲井ろうさい

山の端アヒノテいかな夜もよも人アヒノテこそ知らねアヒノテ 閨は涙の淵となるアヒノテよしや
歎かじ叶はぬとてもアヒノテ 定めなきこそ浮世なれ スガガキキ我ふりすてよ一聲ばかりいづく
へゆくぞ山郭公

⑦ 木やり

やれ浮立つは春の日の、霞のうちの梅の花、一重ばかりか櫻花 にはひ含みてさける梢
を折りたや、中の枝から見ごとに能う咲いた、やれかをる袖をへ、えいやく散らばかひ
あらし、やれ物憂きは秋の夜の、君に松蟲蟻、一よばかりか蟋蟀、二夜も三夜も君を
かうろぎ、おひかけ中の綱からみごとよそろうた、やれさきのつんなをえいやく引か
ば靡きやんれの、皆様もござんじぢやが、志賀の白玉花のに桂唐崎うす雲棚引く、あれ
からこれまでえいや八橋さんま、さらくさつと替間をたのんで、口説き濟いたりや、う

よそろうたーよ
く揃うた

志賀、白玉花の、
桂唐崎、うす雲、
八橋遊女の名

ろきちー浮き地
か
さんしう、坂田、
まんよ、小太夫、
まさき、櫻木、は
つ花ー遊女の名
とんてきーへう
きん者、とびあ
がり者

本づんなー本綱

きちの太夫さんま、情はさんしう坂田にまんよに小太夫、まさきに櫻木はつ花のやどや
ゆきには、ひねつてしなつて、笑つてあゆんで、癖は何もなにはちや、ないこそは道理
なれ、京のぶらと大阪のぶらとお江戸のぶらと、三千人のぶらどもが、寄合談合でつくり
つけたるおこたち、いかなとんてきどもも、有頂天の野暮すけなりとも、ふんふん深く
は逢はうか、あひますまいか、いや只深くはなり候まいと言つたら、口舌になりましよ、あ
いのやのぢは合點かよ、本づんなよへ、やんれ打てや打て、鼓太鼓鞆鼓手拍子に碁雙六に
おん百姓いよむしろばたに田畑よさがよねを搗杵、砧かるたに常せんが極印、しよろり
がむちは鹿の角、ちよこく打つはけいひき鍛冶屋擬子の衆、からりころりちんくか
らりの槌の音、打つたる狸の腹つづみ、正月は節分豆ぶりくにかきだま、七草なづ
なよ、なじよく搔きよせて、ほとくとたよいた、いとしけりやこそしとよ打て、に
くか打たりよか、やつこりやくく、手がそれた、おひかけしめかけ聲をかけ、本づ
んなよへ、されば僧正遍昭の、名にめでて折れるばかりぞ女郎花、我おちにきと人に語

はちさまーさは
さの誤か

るな、おひかけ中の綱から見事によ揃うた、やれ先の綱にへえいやく、屋敷出たとき
や浮れて出たが、今はカヘシ籬あたりを小歌ふし、おうはちさまくはちさまを見たか、今
は思ひの種となるアヒノテ

⑧戀ごろも

あだなりと名にこそ立てれ櫻木の、初花染の戀衣、若紫や濃紫、由縁もがなと夕霧の、
立迷ひにしうす雲や、上の空なる君たちを、何とて思ひそめ河や、身は浮橋のうきねに
も、せめて夢には打解けよアヒノテ 閨の月さへ枕にかよふ、獨りこがるよ夜はながとの、其
東雲のとり声、みだると露の玉葛、いつ逢坂と心はせきしう、とめて幾夜も薫るは初
音、瀧の白たま涙の淵に、沈む思ひは泉川、いつ見きとてか二上りこよしかるもの歌ひ
しは、ロウサイよしや歎かじ叶はぬとてもアヒノテ 定めなきこそ浮世のならひ、氣の毒にいよ
の、とは思へども捨しがたき、人をく泊瀬の山の井の、むすぶ契の利生のあらば、せ
いしせんじゆの其一座 三サガリ今やきてうと松がえ常磐 木ヲウシ千とせ八千代の物思ひ、情

浮橋、ながと、
東雲、玉葛、逢
坂、せきしう、
瀧、初音、白た
ま、泉川、こよ
し、かるも、泊
瀬、山の井、利
生、せいし、せ
んじゆ、さてう、
松枝、常磐、千
とせ、八千代、

八橋、雲井、西
を、はつ山、外
山、つしま、九
重、さかた、小
太夫、かしはぎ、
異國、からさき
やしほ、狭衣、
玉の井、小歌、
ふじえ、よしだ
一遊女の名

をかけ、八橋の、雲井の西をながむれば、はつ山外山の峯の紅葉は色深きより、四方
に浮名はく、高雄山々々々、思にぬると我袂、あれみつしまの花のころ、九重にこそ匂ふ
らめ、ならさかた小太夫かしはぎ二人とは、兎にも角にも頼まじものを、わけよきを知
らぬは異國者かなと、からくさきの笑ひ顔、目元にやしほがへ、目元のしほに馴衣、
かの狭衣の袖ぬれて、涙の玉の井うらむる小歌の、そのふぢえよしだのおもはくや、ど
うもならぬにの

⑨小夜ごろも

きぬく、に交す形見のさよ衣、妻こひかねし鹿の聲に、亂れ亂ると糸萩の、結ほれやす
き玉の緒の、寄手引手に物おもふ身を、せめてあはれと暫しなりともアヒノテ 忍ぶ山しの
び兼ねたる人目の關を、道しるべせよ忍ぶ草の、いつそ露とも消えなば消えよ、だいじ
かさ、あるに甲斐なき捨小舟アヒノテ 底こそ知れぬ袖の海、かわく間もなき枕の渚、立つ
仇浪はしけしとまよよ、其をたよりに逢ねばならぬ、明日までよもや 三下り 露の身はあ

常磐の山の古
今、十一、思ひ
いづる常磐の山
の岩つゞじいは
ねばこそあれ戀
しきものを

らじ、この夕暮をとほ訪へかし

⑩藻鹽草

千代は經るともかはらぬ色よ、常磐の山の岩躑躅、いはねば人の戀しきものと、思ひしよ
りも硯に向ひ、よしなし言を心に任せ、書きてぞおくる藻しほぐさ、胸にたく火の煙は
空に、なびく習ひにいよのアヒノテ 末は逢瀬の波枕、獨りこがるよ身は浮舟の、よるせ定
めぬこの憂さつらさ、知らせたやく、ゆめに見んとて片敷く袖に、鳴音淋しきアヒノテ
きりぐす、つれなき人を松蟲のアヒノテ 草の籬の夕べになれば、物こそしんぞ思への、
さりとは浮世、やつさいつさて御けんはとに角に

⑪さくら盡

あかでのみ花に心を盡す身の、思ひ餘りに手を折りて、數ふる花のしなぐくに、わきて
楊貴妃伊勢小町、たが小櫻や兒櫻、もよの媚ある姥櫻、我や戀ふらし佛の、花の姿を
さき立て、ゆくへ分越しみ吉野のニアガリ雲井に咲ける山櫻、霞の間よりほのかにも、見

霞の間より古
今、貫之、山
櫻霞の間よりは
のかにも見てし
人こそ戀しかり
けれ

馴れし東の一平
家物語十、侍従、
「いかにせん都
の春も惜しけれ
ど馴れし東の花
や散るち

能がへ、虎の尾、
桐が谷一櫻の名

玉ゆら一暫しの
間

初し色の初ざくらアヒノテ絶えぬながめは九重の、都がへりの花はあれども、馴れし東の
江戸ざくら、名におうしうの花には誰も、うき身をこがす鹽竈櫻、花のふり袖八重ひと
へアヒノテ下には無垢の緋櫻や、樺にあさ黄をこき交せて、わけよき縫の糸櫻、引手あま
たの身なりとも、せめて一夜の戯れに、酔を勧むるアヒノテ熊がへのアヒノテ猛きころは
虎の尾の、千里もかよふ戀の路アヒノテ忍ぶにつらき有明櫻、君の情のうす櫻アヒノテよし
や思ひを桐が谷アヒノテ浮世を捨てし墨染ざくら、昔を忍ぶいへ櫻、花の扉の寂しきに、
月の影さへ遅櫻 三下リ 闇はあやなし紅梅櫻、色こそ見えね折る袖も、匂ひざくらや菊櫻
アヒノテ 花のしら露春ごとに、打拂ふにも千代は經ぬべし

⑫冬草

厭はじな玉ゆら宿る人の盛りアヒノテ身を知る雨の初時雨、さだめなきかな浮雲の、月の
匂ひも影さむき、鴛鴦の浮寝の枕さへ、氷柱のたもと解けやらで 三下リ、とこの浦曲のし
き波の、濱風冴えて鳴く千鳥、思へば夢の世を知らで、やがて枯野の朝露と、本テウシ消え

まつと思はん
古歌「いかにし
てありと知られ
し高砂の松の思
はん事もはづか
し」

吉野、さくら大、
初音、狭衣、み
よし、そめ川、
高雄、野分、例
の遊女の名を取
り入れたリ

なんものを、誰か残りし菊の香の、八重紫にうつろひて、袖の昔もいつしかに、逢ひ見
しことを数ふればアヒノテむらく見ゆる冬草の、上に降敷くしら雪の、路踏みわけて誰
訪はん、まつと思はん羽束師の、森の木枯たえぐくに、涙々たばしる玉霰、あさ日まつ
間のうき身の命、ながれの末の我らさへ、もしもや誘ふ水しもあらば、戀の柵堰きと
めよ

四季

誰か始めし戀のみち、いかなる人も踏み迷ふ、ながの細手のゆき通ひ、四季をりくくの
絶えせぬは、春はよし野の花さくら木や、その一節も待ちがほなる、初音床しき鶯の、
梅が香をとめ青柳の、うき寝の寝みだれ髪は、いつに忘りよぞアヒノテ夏は涼しき狭衣を、
著てもみよしのおんかほよ花、あひそめ川の流こそ、清きながれを思ふにぞ、いとと思
はます鏡、曇らぬ空に秋は來にけりアヒノテいつの間に殊に色あるもみぢ葉の、その名は
四方に高雄山、野分も今はもみぢして、とても濡りよなら、牛中しぐれはいやよの、冬

あらましある
まじの意に用ふ

春日野云々伊
勢物語の歌

のながめは駿河の富士よアヒノテ雪になりたや此身は消えて、今の思ひをえいさんさ知ら
せたや、よしなやと思ひ續けて斯くばかり、戀せずば人は情のあらまじものを、憐みた
まへ賤かうき身を

八重梅

二上ッ梅が咲けがしいよやへ梅が、枝を枝を手折るふりして、必ずござせとさまを招く
アヒノテかならずござせと様をまねく、夢になりとも逢ひたや見たや、夢になりとも
アヒノテ浮世ぢやな、まれに逢ふ夜は現かゆめか、稀にあふ夜は語る間もなき、さんさ短
夜や、よしなの思ひアヒノテ浮世ぢやな

春日野

三下リ春日野のわか紫の摺衣、忍のみだれかぎり知られぬ我思アヒノテおく露のしづ心な
き秋風に、うつろふ人の濃むらさき、花紫の萩がえに、亂れみだるよ心のつらさ本テウシ
その繰言のまたの夜に、君ならでよんよん餘所にはさあへ、色にはうつさじさあへ、む

ねに―根に、寝

らさきの色に心はあらねども、深くぞ人をおもひ染め、かひも渚に我袖しほる、人目
人目忍ぶの其通路の、舟にうち乗りお敵達はこぬかの、うちのせよせつ、幾度思ふ宿の
首尾、とは思へども只ひと筋に、この譯知らぬ人ならば、たとひ萬にいみじきとても、
玉の盃手に觸れよアヒノテしやんとさせ、底はいよく知られぬか、君に逢ふ夜はまつ
乳山二上リ手にふれてアヒノテいつしかも見ぬ紫の、ねに通ひゆく轉寝のアヒノテ君のく
濡こそアヒノテじつとは見えね、しんぞ此身は神ぞ此身は涙脆って、憂いぞつらいぞ、枕
もうくばかりへアヒノテわけのく、背にはアヒノテいよ絆さるよへ、しんぞ此身はく、涙脆
うて、ういぞつらいぞ枕も浮くばかりへ

⊕はる駒

世も麗やかに園生の花の、春駒は夢に見てさへ心もよきに、況して舞うたら千秋樂よの、
いつもかはらぬ若水の、流の末の我等さへ、浮れ雀のひよつとうかれいでて、あの色里
に來てもおうしう、名は高橋のかへるさを見れば、まづ花咲に梅がかしほの、振もよし

住の江―墨の繪
にかく

三笠、もろこし、
幾上、千里、更科、
せん夜―妓名

こちのてう―此
方の町

笹の岩屋―日藏
上人この窟にこ
もりたりき

野のはなの 佛うつす住の江筆染川の、深き中をば誰が夕霧や、濡れた譯あるつれ歌を、
彼のおもはくの三味せんに、梅がえ薫るに、鶯の、初音はいとどしほらしや、どうもな
らぬにいよの、兎角君ゆる身は八橋の、花濃むらさき杜若、騒ぎ立てられてアヒノテぞく
ぞく逢ひとてなりませぬはと、籬ながらも西をきつと三笠の、月の桂の男だてかや、に
ほんもろこしきりよと廻して、花まつが枝の藤えかなほも藤波のえいり江に寄せつ、物
思へども浮橋の、中よかるもの泉川、幾よ千さとの月は更科、おひかけ仲の町で見ごとし
さ、誰ゆるころんだ、轉びやせぬもの手を突いたアヒノテお手とろ、君のなきみぢやない
もの面憎や、にくか打たりよか、せん夜もちよの、勢至千手は悉皆彌陀か菩薩か、たど
し吉田の神ならば、つなぐ利生もあれ柏木のいこくわかやま、こちのてうのよねたちは、
意氣も張りも強いはいの、金平だんべい、さかた櫻木さつても名譽の太夫しゆ、この君
たちの手に載せられては、いかな笹の岩屋のお聖さまも、三味にのせての一節は、末も
こながと春ごまは、千秋樂なる御代ぞ目出たき

⑦手 枕

照りもせず曇りもやらぬ、月は朧の春の夜の、ゆめばかりなる手枕に、君が浮名やかひなく立たん、とかく人目のしげくなれば、忍ぶ山みち忍びて通ふ、井手の玉川岸根の蛙、今や鳴くらん浮世の中に、我とひとしく物おもふ身の、あらばかたらん憂さつらさ、戀の山路をたどり行く三下り、こひくゝて戀しき人を待乳山、ほのかに見えし木の間より、名も懐しき郭公、いま一こゑの音信に、アヒノテ昔の人のしのばれて、袖に涙は夜の雨、草のゆふさき分けてこし、隅田川原の荒れたる宿に、水雞ならでは扉をたよく、人はあらしな待宵に、枕な投げそ、なげそ枕に咎もなや、武藏野になべての草は懐しや、わか紫のいろく、本テウシありし御けんにかせしことの、無下にかはらぬ心ぞならば、しんぞ嬉しさ何にかまさる、ものを数々思ふ身を、誰かあはれとおもひは遣らで、床しき身こそ松の緑よ、いつも心を添へたや、千とせをも又かけてへ、千歳を掛けて、やつさかはらぬ中とよ、のうさてな

ゆふさき一庭崎

⑧鎌倉八景

まだ夜を籠めて有明の、月も宿かる武藏野の、空も一つに契り來し、妹背の中をふり捨て、斯く立出づる我つまの、心のアヒノテ中こそ恨めしや、恨みながらも立出て、ふり上見ればほのくくと、霧にへだたる安房上總、出で入る船のかずくは、遠浦の歸帆これならん、汀の鳥もつがひく、羽を休め寄せ集りて、ふはと立つや雁鷗迷平沙の落雁おもしろや、あれに見えしは有難や、幾千代ぢよのかみ神樂、鈴の森アヒノテ嵐こがらしさつと吹けアヒノテ笠にや笠に木の葉かはらはらと、はりいよくはらくくと江天の暮雪まのあたり、遙かに高きおん山は、いつも鹿の子の富士の山、どれくそれ見てくからから見てから戀が増します、かずくのお言葉にはつとだまされた、それで寝もせで、ひゆく、おもふ願は神奈川の、沖に漂ふ海人小舟、苦もる雫もろともに、涙に明かす船の中、これやまことに瀟湘の、夜の雨ともいひつべし、雨も晴るれば網を曳く、ひくに靡かぬアヒノテつれなさよ、三下り君を思へばアヒノテかく忍べども、かひぞなき、つれなき

願は神奈川一叶
ふにかく

東路や千載集
顯輔、東路の野
島が崎の濱風に
わが紐ゆひし妹
の顔のみ面影に
みゆ

松に降る時雨、なさけに隔はなきものを、忘れまじ盡させまじ、おもひはつんつん釣の
絲、アヒノテ引てしやくるところは、ホテウシ釣つたところは面白や、漁村の夕照はうつすら
ん、實にも長閑けき海の面、一首はかうぞ詠じける、東路やアヒノテ野島が磯の濱風に、
我紐結ひし妹がかほのみと、詠じ捨てよぞ行く程に、山市の晴嵐おもしろやアヒノテ千兩と
るともまだく馬方いやよいやよ、腰に馬柄杓アヒノテ手にや又煙管、月の都をふらねば
ないよさ、どうした心底しほがないアヒノテ日もはや西に入相の、極樂寺の晚鐘と、聞き
しに優る八景や、由井が汀に寄する波、峯のアヒノテ嵐にもみ合せ、寄する雄波がどうく
と、どうと打つては颯と引き、日本無雙の名どころや、これぞわらはが住家とて、雪の
下にぞ著きたまふ

⑤ わか草

ね上げに見ゆる
伊勢物語「うら
若みね上げに見

世の中の人の心はいろくに、うつろふものは花の色、梅が香をとむ鶯の、谷よりい
でてまだ里馴れぬ、野邊の若草ねよけに見ゆる、佛の、人目つよめばいろには出さぬ、

ゆる若草を人の
結ばん事をしぞ
思ふ

袖には洩れて睦ましく、思ひそめたよわか紫の、筆にまかせて杜若アヒノテ夏は涼しき
池水に、住む川竹のすて小舟、こがれくて昔を忍ぶ、草のまがきに涙をそへて、泣く
や皐月のアヒノテ誰彼時に、誰を待乳のくやよや山まほとよぎすアヒノテ君はさみだれ思
はせぶりよ、我は螢火おもひに燃ゆる、この夕暮のものあはれさに、鳴音淋しき蟲のね
アヒノテ秋は來にけり、我訪ふものは萩が上葉に亂れみだれてかせ戦ぐ、餘所にも置くや
袖の露、月の移ろふ影見えて、残る松さへ嵐と共に、人目も草も枯々に、いつもながら
の冬は憂や、落葉も霜に埋もれて、木の下露にぬるよ夜は、いとど淋しき床の内、枕な
らでは白雪の、積るおもひに伏し沈む

⑥ はる風

咲いた櫻に吹く春風は、のほんへ花のあたりを除てふけく、こほれてかよる花の露
アヒノテ深山隠れの身は郭公、のほんへ人は知らねど啼きあかすく、よひくぬると我
袂アヒノテ歎く涙は妻戀ふ鹿よく、萩や芭にくおく露のく、くるれば色の袖しほる、

花のあたり古
今好風春風は
花のあたりをよ
きて吹け心づか
ちやうつらふと
みん

空に知られぬ
拾遺書之二櫻
木の下風は寒
からで空に知ら
れぬ雪ぞふりけ
る
えんじよ一遠所
か

ころろぎ一来う
にかく
弊虫一妓家の主
人をくつわとい
へば也

梢々は花かと見えてく雪の朝はのほんアヒノテのんほ、のういよ風厭ふくアヒノテ霜夜
に濡るよ我袂春の夕ぐれに山々を見てあれば、折しも春風に櫻の花が散りかよる、ちり
ちりはつと花のちりたるは、空に知られぬ雪かと思えておもしろや、夏はほとよぎす卵
の花に菖蒲草三下り牡丹芍薬あつちりなこつちりなアヒノテすぢりもぢりて、えりくりえ
んじよの奥山の陰、小鹿の鳴く音蟲のころく、秋はな名にある月に移ろふもみぢの色、
とりや集めてあはれさ勝るアヒノテ冬は時雨に雪か霜かと消えてたまられぬ

㊦ 狭ごろも

獨り思ひを枕に語り、せめてたのみの夢覺ます、麻の狭衣打ちさめて、いとど寝られぬ
秋の夜に、さりとほ月更けて、いつさてころろぎ、ねもせで松蟲、更くれば鈴蟲、すん
ど深ければ堰きやるは憂いよ轡蟲、厭はぬ心にてんと結うた髪を、望みなら根からふつ
つときりぎりす、鳴かぬ間はござんせんよ、すこしあはれみアヒノテ颯と妻戸の時雨は憂
やの、袖の涙は露の亂れがみ、結ふにいはれぬわが思ひ

㊦ 世らつひ

涙なそへそ一新
古今、倭成、昔
思ふ草の庵の夜
の雨に涙なそへ
そ山時鳥

上ねしう一妓女
りんぜつ菅搔一
糸竹初心集中巻
を見よ

我は都のらつひ洛外寅樂師、しかも我等は申子でな、浮れ者でござる、思ふ方には過
ぎしころより別れて、獨りいとど淋しき寢覺の床に、涙なそへそ時鳥、涙とともに無常
を觀じ、とかく浮世はかしこましと、思ひし比より山路に入りて、小柴しば垣引結び
世に在りがほに月を眺めて、更けて砧の音かと我は聞けば、月ぞ知らする我涙、思ひつ
づけて足曳の、小鹿の啼聲に夢さめて、われをば誰か訪ひ來んと、いとど寝られぬ秋の
夜にアヒノテものを思ひの眠りをさます、其いにしへはよねしうとあれば舞うつ唄うつあ
だくらべ、浮世の中を思ひ出れば心も亂れ、みだれたりよさスガガヤ、餘りゆかしさに琴の
てうしを調ふれば、折しも松風があなたの峯のかたよりも、こなたの琴に通ひ來て、彈
きてあはせたは何よりもつて面白い、扇雲井に須磨に桐壺、うす衣に雲の上、四季のみ
だれかあつちりな、すぢりもぢりて、えれくりだしたるりんぜつ菅搔おもしろや、花橘
の袖の香に、鳴くは何鳥郭公にうぐひす、水雞の鳥のたよき落し、音信るよ柴の扉のけ

しきを引きて、君達にやつこの見せて聞かせたや、よいくずんと濡なませうに

世戀づくし

思寝の心からなる夢ぞろか、または現かうつよなや、ちらとばかりの佛を、御簾の追風さら／＼に、忘れもやらぬ身ぞつらきアヒノテ戀はさま／＼多けれど、逢戀待戀忍戀、恨みの戀に別れの戀こそ物憂けれ、我は本國草深き東あたりの者なるが、今度はじめて都へ上り、雪のふり袖ちらとまた見初め、しづ心なくこひにして、文玉章をかき口説やれば、お情の返しに必ず今宵逢瀬とありしをいと嬉しくて、八重葎しけれる軒に宿りきな、連理の契あさからず、深く語れど、かねて別れの思はれて、さりとては馴れぬ昔がましぢやものアヒノテ交す枕は数重なれど、我も忘れじ君もまた、思出せよ今宵のちぎり、離れ／＼の村雲見れば、明日の別れもあのごとく、あただしんきや、もんきや、さりとては戀には果なや、いかがせん

世笠

寺

江戸一徹土にか

きてこそ見たれ
一來、著の雨意

しんま陰一島陰

釣するよしの
釣するよしの誤
か

いかにせん、兎すれば恨み、斯くすれば在がひ知らぬ世の中に、江戸をば厭ひ、いづれともこれをまことに大磯や、旅で憂いものは入相の鐘よさ、山路を行けば鹿の聲、富士のお山を後に興津、前には蒼海漫々とはても無く、嵐につるよ夕浪の、打のけ寄せつ立つ波に、末をいづくと遠江、濱名の橋を打渡り、左手や右手のながめして、七瀬や八瀬や八十瀬川、ふかき思ひはみの尾張、きてこそ見たれかさ寺や、けにいにしへも我ごとき、もの憂き旅のくちずさみ、一首はかうぞ詠じける、實に今日ばかり曇れ近江の鏡山、旅のやつれの顔の見ゆるに、涙の雨の守山、露にしつほり／＼濡れてこそ行け草津の宿よ、連もなぎさの捨小舟、しんま陰より船の音が、からりころり、志賀のかん唐崎の松づるきづる、からころりと漕出して、釣するよしの、やつさ釣つたところがおもしろや、なにが／＼へそなたは瀬田の長橋、眞弓槻弓日を重ね、矢走の浦にぞ著きたまふ

世山づくし

戀の山路に入りそめしより、人目忍ぶの山とはつらや、稀に逢ふよは鶏さへも、時知

明くる侘しき一拾遺、
「岩橋の夜の契もたえぬべし明くるわびしき葛城の神」

ささく酒

らぬ山々は、名のみして明くる侘しき葛城山よ、夜の御けんに言葉残りて別れ、さらばくくのう歸る山、君が心の知らせはせねど、亂れて今朝は黒髪山に、つたふ涙の袖振れ山よ、袖をふるく振りやるはよいが、わけのある身の袖ふるな、ふる妻いとし

⑤夕され

嬉したまく袂にかゝる、さよは小藤の花の露、つゆに心のいつしかみだれ、秋にはあらぬ春ながら、いとど思はいや増り、亂るものは青柳の、絲はものは中々に、花におき伏し萎るよ此身、此夕されの一盛り、折らば今折れ散らぬ間に

⑥川たけ

其様のゑにぞみだれ髪、解きし下紐かす重りて、無理に實からいとしゆてならぬへ、ややともすれば閨のうちより、手を扣いては水くれよ、夜は何時ぞ、歸らにやならぬ、急かせ言葉のむいきの時は、神ぞつらいは勤のこの身、心を配りて氣をとりて、限りもあらぬ玉つさを、夜明けぬうちに認めて、こよや彼處とやり繰るつらさ、恨みられては恨み

むいき一同情や
察しのなきこと
をいふ

もしたり、あら恐ろしの誓の詞、この行末を何とせん、可愛がらんせ流れの身

⑦花の宴

よしや吉野の花より我は、其夕暮の折からに、垣間見えにし佛を、忘れもやらでうかうかと、移る心や紫の、色に出たよ恥しながら、花によそへてやる文を、見よかしく散らぬ間に、アヒノテいとど心のいよつくし船、やる方分かぬもの思ひ、文の返しもいつとなく、待ちしかひある今日の日も、はや入相の花の宴、逢うてぞ今宵新枕、心とけたよはやいつの間に、一夜ばかりか桐が谷、八重も千よも神ぞかはるな、かはらじ、我も花には嵐、よしや吹くともく契たえすな

⑧いく春

幾はるの眺はいつしかはらねど、わきてのどかに照る日影、契は竹の節々こめて、君と二葉の松もろ共に、枝も榮ゆる若緑、仰ぐにあかぬ時を得て、アヒノテされば怪しの賤のおめさまくくの造花、色を盡してさよけけり、まづ咲初むる梅の花、いとよわく香も深き花

節々一世々、夜々にかく
賤のおめ一賤の
女をのべて言ふ
にや

千よ一花の千よ
を千夜にかく

よる一寄る 夜
こひ一來い、戀

衣、八重一重さき亂れ、けに九重のたくひなき、色も殊なる櫻花、粧ひのよしく見えに
けり、扱その次の島臺に、松と竹とを植交せて、千代をさへづる雛鶴が、汀の方に巢を
くひて、谷の流に龜遊ぶなアヒノテ、賤の緒手巻くりかへし、よるこひくよる戀さまよ、
人の情はよるにこそあれ

卅波まくら

深見草一牡丹の
異名

皐月まつ花橘のかほよばな、見るに心の深見草、深き思の憂さつらさ、色に出さじと
忍ぶ草、しのぶかひなきいよ陸奥の、壺の碑、かくぞとも、岩根の山の岩躑躅、いはね
ど人の戀しき物と二上リ、恨みながらも月日をおくる、さても此身はあるものかアヒノテ神
ぞつれなきく命かな、さあくなにかへ、とは思へども情に隔つる袖あらば、賤か伏
屋に月は宿らじと、夕べにそよと籬の、露吹風のおとつれにアヒノテ傳へしかひや有磯海、
ちんくちりく磯打波に、とても濡りよなら諸共と、深き逢瀬の浪枕、交すばかりの
萩の上風、萩の下露

卅七 夕

千夜を一夜に
伊勢物語、秋の
夜の千夜を一夜
になせりとも言
葉残りて鳥や鳴
きなん

夏果つる扇と秋の白露は、いづれか先におきぬらんアヒノテ年毎に逢ふ夜待ち得したなば
たの、逢はで寝る夜は袖のみ濡れて、降るは涙か身を知る雨か、かけし情は鶺鴒の、波
せる橋におく霜の、實に面白や今宵しも、月は冴えゆく秋の夜の二上リ、千夜を一夜にな
せりとも、名残はつきじ今更に、ことば残りて鐘がなる、鶏も鳴き候、あたどしんきや
氣の毒や、とかく浮世はまよならぬ

卅ひき車

さらば引かんと夕露の、濡れたとり態さらりとやりて、引かばお靡きやれ、えいさらにな
さよよいえい、花とならば散りかよれ、おん身は紅葉の色よのう、日かけに添ひて色増
る、えいとなアヒノテさて世の中はな、世の中は定めなき身の萍の、引かば靡きやれ散
らぬ間に、やんれひくく、引くは只、濱で網ひく、山で引くは大石、胡弓三味線鳴子
の繩も、引く殿さまがきわすみ、やれ袖を引く、都の牛は車を引きやる、引きやるはよ

きわずみ一氣は
ずみの誤か

いが思うた振して袖引くな、語りつどけて行く程に、餘所の見る目も恥しや

東山八景

見渡せば東山の春の景色や、祇園ばやしに吹く嵐は、山市の晴嵐と疑はれ、河原おもての真砂の色は、江天の暮雪も斯くやらん、面白の花の都や、地主の櫻にしくはなし、鴨川の流の末に行く船は、遠浦の歸帆か、冴えわたる清水寺の鐘の聲アヒノテ遠寺の晩鐘のひどき、それ白河の洲崎に翅の散亂すは、平沙の落雁とも謂つべし、さて靈山の月影は洞庭の秋の野、これにはよも勝らじ、扱また漁村の夕照は釣垂れて總角にあそぶものを

夏草

夏は夕べの身の思、るに心は深見草、露は袂のいとまもなしに、羨しくもうき戀の、よは知られつしらぬ顔よ花、アヒノテ立ちも放れぬ君がおもかけ、あふさきるさの涙の河に、黑白も分かで泣きしづむ、底の玉藻のいはで茂るも、餘所目々々忍ぶの小車に、通ひかよはど關守も、一夜は許せ手枕の、塵を拂はぬ常夏の、韓紅の袖の香も、花橘に咎は

常夏床にかく

逢瀬負せにか

逢瀬の、とかく人こそつらけれど、うらみの葛の玉の緒の、絶えなばたえよアヒノテ扱も命はあるものかアヒノテ黄昏時の軒のつまに、餘りてかよる夕顔、花をしるべに尋ねんと、もの言ひよれば、手になれぬ蓮の浮葉よな、情に染まぬ露のなさけに

壁うきね

うき寢の床にこと訪ふは、枕にかよる涙なり、せめては夢になりともまどろめば、短夜に山郭公消息れて、はや夜が明けた神ぞつらいよの、こがると愛身の消えもせでアヒノテさても命は存へて、書は終日なき暮し、夜はアヒノテよどこにふし沈む、横の扉を打つ村雨や、梢に戦ぐ松風か、契り置かねど果敢なやな、君が訪ふかとおどろかされて、いとど涙に目がくれて、壁に背ける燈火の、影幽かなる曉の鐘の聲アヒノテつくぐくと聞く時は、とかく叶はぬ世の中に、ふつつと思ふまいとはおもへくども、又捨てがたき過ぎし別れに、逢瀬といひし言の葉をわすれまい、此世はさて置き後の世も、のうさてな、逢見ての後の心にくらぶれば、かほど物をば思はじものを、昔戀しやな、今の身や

君來ずは古今集の歌にて末句「霜はあくともし也、此頃も例の遊女の名寄なり

○小むらさき

君來ずは閨へも入らじ小むらさき、我元結に霜置くと、又のたのみを夕霧や 因幡の山の峯よりも、移しや植ゑし唐崎の、松の緑もこながとや アヒノテ身は浮舟の波の紋、巴の君やこがるらん、西を遙かに眺むれば、日影傾ぶく森見えて、金龍山とはあれとかや 譽れ名高き異國まで、楊貴妃虞氏君李夫人も、これにはいかで勝らんと、おもひ寄るべの波枕 君に逢瀬の波まくら、片しく袖の乾く間もなき沖の石 二より 難波入江の身は捨小舟、しづむ思ひは我ひとり、それはへ飽かぬ別に袖引きとめよ、宵のなさけに酔ひうかれ、河内通に生駒山、其名高雄ののう若楓、見んとばかりに契りつよ、焚残したる薄雲や、伽羅の煙の薫るは神ぞ思はく、薫るは神ぞおもはく アヒノテ 姿を見れば清原や、深やほなりしおてき達、浮世を忍ぶ目狭登、雨は降らいで戀がふる、身は八橋のさわやかに 三下り 著爲す裳をかいとりて、我ふる妻はいよなほいとし、やれなほいとし アヒノテ ことがれこがるゝ身は對鳥笛、戀の音取りのおのづから、君と我との中遠し、とかく人目

深やほ—深養父の地口

の繁ければ、籬ながらの御けんと言へど、咎められてはなりませぬ、ういことういこと、そりやさうさ、江戸やつさ浮いて来た

○香 盡

六十一種の名香は、法隆寺、東大寺、逍遙三吉野、紅塵、枯木、中川、法華經、花橘、八橋、園城寺、似たり不二の煙は、菖蒲、繁若、鷓鴣班、青梅、楊貴妃、飛梅、アヒノテ種ケ島、標浴、月、龍田、紅葉の賀、斜月、白梅、千鳥や、法華、老梅、八重垣、花の宴、花の雪、名月、賀蘭子、卓、橘、花散里、丹霞、花筐、上は薫り、須磨、明石、十五夜、隣家、夕時雨、手まくら、有明、雲井、くれなる、初瀬、寒梅、二葉、早梅、霜夜、七夕、寢覺、篠目、薄紅、薄雲、上り馬、とかく伽羅の煙と命の君は、とめても幾夜、いくよ留めてもとめあかぬ

○時 雨

なら松の葉の落ちそめて、夕影白き待乳山、時雨々々に鳴く鴨の、聲も氷るや干潟路 アヒノ

千歳、西尾、薄雲、きよはし、柏崎、かをる、こにし、やまと！遊女の名

テ衣紋坂こえて鐘の聲、いで其比は神無月、くるわくすまひは涙で暮す、野分つれなや、吹きや散したるあつたら小萩をすよき、花に酔ひまた紅葉には、醒めてたどりし土手風、春にかはりて袖寒むや、提灯暗く行き通ひ、見知り越なるかすり唄、諸人のなづむは色千歳山、雲は薄々西をの空に、いり日なほ照る虹のきよはしうい女郎、霜も霞もひつちこないて、嵐につよき柏崎、かをるくらべん東と京と、いづくはあれど陸奥の、千賀のぜんせいそれにはかはり、こにしやまとが藻鹽たれ、下り立つ田子のうらめしや、けかようおぢやろぞアヒノテ、足音荒くこゑ上かれ、大門いまださよすして、茶屋の半蔀たれの格子アヒノテ誰か羽織被いてよね口説く女郎くどく、受切胴切一つがひ、突止なるかならぬか戀の中の町

朧月 見

或はしらと吹上和歌の浦、住吉難波高砂の、尾上の月の曙を、ながめて歸る人もあり、我はそれにはひきかへて、昔語りとなに立ちし、色のむらたのちうじやうの、歩でやれ

尻よ！尻をの促聲
ざりー砂利
ひんこひ轉びー
ひきこるび

尻よはせ折り通ひし路の邊、ざりとりる池の水鏡、片枝枯れたる皂莢も、やれく戀に瘦せたか、そちや異な姿、稻荷の岡に馬はあれども、君を思へばのう手編笠、土手の松原誰ゆる、のほんほ通ふ、ひんこひ轉び、跛ひきくゆ程に、此面彼面の中の町、逢瀬逢瀬にかはらじな、知るも知らぬも秋の夜の、月待つ程の今宵しも、かよすいしやうして、檻の、よるべくの契かな、揚屋の燈數照りて、母屋にかさねし折鬚籠、芒に出す銀月も、ものすきふりてまたをかし、晝の御座にいぎたなく、酔臥すをとこ月しらす行水がへり待ち受けて、白波男龍田山、忍ぶ心の生憎や、曇れと月をかこつらん、のどやに運ぶ物しゆく、間遠にあめる提灯も、今宵はなくて過ぎよかし、くつわの暮のまり過ぎて、遣手の宿の念佛講、二丁目あたりに菅搔絶えてアヒノテ初音三井寺唄ふらんアヒノテ月の照るやら曇るやら、身揚り暗き女郎の、仇目にかよる夜這星、約束なしの浮れ人、友の浮れにうかれ来て、どれでもく振に聘はれし新造の、髪そこくに結ひなして、八聲に近き揚屋入、枕とる間に明けぬべし、欠伸勝なる聞もありアヒノテ隣座敷のふとく

吉三に物申がござる、何處からござつたいの、散茶町から参りたが、おうけぎりをと
 ましよ、其は何時のことかといの、師走の事ぢやいの、つがもないことゆつてくるよな、
 書立てよ来たれど、詮議ばかりで、のほほんくのんほのう、いよく埒がない、夜が
 明けた、無首尾じまひの歸るさ、つらや太鼓がどんで、あとさへ歌の音を打出てまた
 まるろ

②あだ枕

生憎の寡鴉に朝覺めて、誰を待乳のややや麓川、三つ船二つ船舟もよひ、波はしたな
 く過ぎがてに、また陸言の薄訛、枕の床の寝ざめ歌、耳に止まり物悲し、仇にはせまじ
 移り香の、あゝ形見なる、あだ馴衣旅衣、口數かさねて駿河なる、賤機山のをりに觸
 れ、次でをかしき安倍川や、來ぬ夜契らん彌勒町、又神風や神風の、伊勢の古市八十瀬
 川アヒノテ此處も戀草柴屋町、とまるや百舌の撞木町、鉦を叩いて佛にならば、なじよく
 木辻鳴川、ならずとなると阿波座新町越後町、一夜二夜の堺の津守、明くるわびしき

をり折織

ひやうごのふる
めー兵庫の風呂
屋女

袋町、おつとさしこめおふねひやうごのふるめ立別れ、室の泊にうき身を寄せて、鞆の
 浦よねそこくに、我から濡らす袖の海、安藝の宮島みやひして、難波くづしの三つの
 糸、しんきく篠竹な、かけて思ひをさしよよりも、内裡小島のさどれ魚、うきをま
 じりの櫻魚、さごしいとよりこちくと、呼べば汐の目をなぞ賣るアヒノテ波の枕や下の
 關、なほ行くさきは不知火の、心筑紫にこひわたる、唐土船のよるとなく、晝ともわか
 ぬ戯れ女のアヒノテ玉の襷の花をどり、柳の眉の眞圓ござれ、まんまるござれ、十五夜の
 月の輪のごとくアヒノテあゝ現なやあだよくら、遠くも來ぬるものかなと、過ぎこし方を
 都には、司位も夫々に、身狭大袖ゆき短か、引扱紙や二つ折、また二つ櫛しどもなく、
 雪の素足の花踏んで、おなじく惜む後朝や、三下り又朝ごみと入亂れアヒノテ其方の客衆と
 此方の客衆が來ると、やしち一丁の二丁の三丁の早駕あふむ取持、やんれさいづれあふ
 む憂さつらさ、誓紙誓文實を見しよに、しつとんくしつとんくしつとんくしつとんく、
 とうから内證吹込だ、本テウシ戀の嵐にはつと吹上大盡ぢや、さつてはそれからそれ次第、

花踏んで云々
朗詠、踏花同惜
少年春
朝ごみ朝廊の
門の開くを待ち
て入込み遊ぶこ
と

花の香に云々
新古今、貫之の
歌

うかりひよんなる寢覺かな
④はな見

花の香に衣は深くなりけり、木の下蔭の風のまに、八重の霞に彌たかき、恵みに
なにか上野山、花と戀とに憎まれて、ほんにくほに、名に負ふすが、鐘撞ほん様
見よや、濁世の野暮すらに示さん爲に御佛の、濡有がたき御姿、半ばは花に隠れ在す、
風に漂ふ幕の内、てりこそてりぬかてりましこ、鳴音かはゆき山雀の、己が祕曲の羽も
軽く、よいくくくくやさ、ひよくりひよ、親父が腰に瓢箪ひとつ付て、ひよくくひよつ
と浮かれた、花ゆゑにひよくりひよアヒノテ峯の嵐とな連立ち通ふ、ひこそ女房はだてこ
きくで、小袿搔取りしやらく行きて、これこちの人、おう見ゆるかの、ようぬけまう
す、小笹篠原根笹やかくい松の尖杭でな足突立てよ、うづきづきくうづきにうづき、
卯月八日の花よりだ、お名をばえ申すまいよの、しやんく、しやんと指いたる長刀、
花か蝶かと打群れて、櫻ちり積む菅笠やさし、ほんに床しお側に引きそふ伽比丘尼、紺

ぬるともい上花
の雨一拾遺、櫻
狩雨は降りきぬ
同じくはぬると
も花の陰にかく
れんし

に爵金に淺黄に鹿子、地紅や地紫、けんたい郡内蔦八丈アヒノテこれの小よねにとんとつ
とんと絆された、やすい事、其方でおうちやれ、ちよんくおけさおきのとなかに、とん
とんととどつこいいよすてく小舟の、すてくられては立ち申さぬアヒノテ扱てそれ
その幕の内、茶の湯松風染模様、難波に对るや葭蘆の、土佐を語らぬ幕もなし、都の
つての一ふしは、柳櫻をこき交せて、淺黄帷子黒小袖、おなじ岡邊の松にはあらで、
其里人の風俗も、名は懐しきやりしゆやり娘、姿は横太り、みどりたよりが髪結ひか
へて、野暮に身をなす抱帯、禿夫々髭が落ちたく、おとにも浮名の霞根ささ根引の
末たのむ、ういこのく身の行方、江戸やつさ、三下り見付箱崎そつちの客衆と、こつち
の客衆がくると、やしと艦かいを早めて、一丁の二丁の三丁の早き御舟、色の淡へやんれ
押せやれと、衣紋江戸やつさ、嵐待つ間の花よりも、しつとんくしつとんくしとん
しとんしとんくしとんくくく、時めく里の家、櫻本アヒノテ今日も暮れぬと告げわた
る告げわたる、恨み重なるあどふの鐘、人は散り行く群鳥、われはぬるともいよ花の雨

望月の云々―西
行、願はくは花
の下にて春死な
ん其如月の望月
の頃

系による云々―
貫之、系による
ものならなくに
別れ路の心細く
もおもはゆるか
な

その小櫻の望月の、いつそ消えたや花の下露

玉くしげ

玉櫛笥ふたつの色の誠うそ、わけ賣る里のよすがとて、あだし言葉の藻鹽草、煙幽かに
飛び亂る、螢の宮にあくがれし、その玉葛、假に今、いかなる筋の糸による、ものなら
なくに別れ逢ふ、戀慕のしらべほのかにも、三下リ、作り聲して呼子鳥、覺束なしや隠し君、
其數なりしもろ人も、名のみ残りて今はまた、昔を忍ぶ夕まぐれ、顔に扇のいやらしく、
目に入る色の風俗と、時の媒さそひ來る、流の誠汲みて知る、茶やのしなづまじつと
も知らで、花の光も潔く、みるめに濡れし鹽衣、海人の仕業もないものか、何ぞのや
うにさりとは、本テウシ宿も定めずはしたなく、宵の睦言餘所になり、氣は短夜の長枕、
しかけ言葉の口舌ども、餘所に下紐解けぬ心のあれかし、此身を捨て逢はうにたいこ
無首尾の假寝して、月を越しても憎からぬ、咎をば酒に逢瀬の末、空おほれせし後朝に、
八聲の鐘と鳥騒ぐ、五丁の天の曉に、歸るさ繁きたはれ男の二上リ、己が噂りさまぐくに、

小歌淨瑠璃だてらしく、實に數々の戯も、聲ちりぐくに別れゆく、我通ひきと吹く嵐
餘所には告げそ朝がらす

色香

定めなき色香に浮かれ國あまた、かたい枕も垢づく衣も、なりやつれたる身のゆくへ、
懺悔に語り申さん、抑江口神崎は名のみ残りて風俗なし、野上の里は草枕、朝妻舟は
楫枕、誰こがれけんあと知らず、アヒノテつかひ揚げたる島原を、都の西に人日影、移る心
に焚付の、柴屋町には火も立てず、化粧かはりしづし君を、はるるぐこよに三越路や、
鹽津海津にどれく、それ、あれく、針が浦、釣するあまのうけなれや、心一つを定めか
ね、敦賀小萬の吸付煙草、きつくなづめば目もあはぬく、目がまはる、女郎と契らぬ
旅人には、夜著も借さいで寺泊、お草臥なら寝まるべいとて、わさよの酒をしひざかい、
四の五のづしを出雲崎、おなじ流の酒田のひしやく、アヒノテ底眞實から、三下リ、解けてちん
ちんちぎりの、幾夜も結ばん常陸帶、掛巻くもへ水戸の藤柄枝川躑躅、明日のわかれに

ひしやく―遊女
の一種

戯女の―萬葉一
「たをやめ」の袖
吹返す飛鳥風都
を遠みいたづら
に吹く」

君ならで―信明
「君ならで誰に
か見せん梅の花
色をも香をも知
る人ぞ知る」

や散々に、おさらばへ、これちかのうちホテウシいとしけりやこそしと打て、憎か打
たりよか、何んでもこれはあいたく、潮來出島のこん小手招き、まねく袂に文や玉章
アヒノテ 實に楓橋の夜の市、泊々宿々の窓にうたふ群女は、客を留めて夫とす、別れあ
れば待つ暮あり、品こそれかれ戯女の、袖吹返す飛鳥風、昨日と過ぎて今日と暮れ、武
藏の國なる新吉原がとまりぢや

梅づくし

君ならで誰にか見せん此花の、色はさまざま、櫻梅、八入紅梅あさぎ梅、地は薄色に鹿の
子梅、きなす姿はまだいはけなき、小梅振よき信濃梅、品と拍子をとりに、數へか
ぞふる手まり梅、落ちてこほれてはらくくと、空に知られぬ霞梅、振仰見ればをちこち
の、野梅山梅咲きそめしより、初音床しき鶯の、羽風に靡く枝垂梅、雪かあらぬか白
梅の、初花衣八重梅や、誰が袖ふれし匂ひ梅、春や昔の思はく深き谷川梅よ、さりとして
は心筑紫の豊後梅 三下リテ ことがれく、てゆく舟の、泊定めぬ島梅や、海人の刈藻に住む蟲

の、われから梅の色懐かしく、思ひつゞけて書く玉章の、便求めてやり梅や、間を隔つ
るかきほ梅ホテウシながめ得ならぬ庭梅の、花の、佛霞の間より、ほのかに見ゆる朝日む
め、色をも香をも知る人ならば、よしやとがめん枝は折るとも

小笹

しなへやしなへ小笹も風に、そなた忍べば人が知る、あゝ餘所には咎もないものを、見
しよりもあこがるよ、及ばぬ戀にいとど思は彌増してアヒノテこほる涙の明暮に、乾く間
もなきく、我袂アヒノテ文玉章の數をつくせど、つれなき君に見せたきものは、風に靡け
るしほ屋の煙、萩萩芒までもござるよ、えいをみなへし、引くに靡かね草木もないに、
見せたや庭の柳の絲の、柳のいとのかい風に靡くをの、叶はね浮世雲に梯、及ばぬ戀に
思ひみだれて、えい何しよその、とかく浮世は氣まよがよいぞいの、勿論さうな、そり
やさうさ

咲晒

槇の島には晒す麻布、賤が仕業は宇治川の、波か雪かと白妙に、いざ立出て布さらそ
 アヒノテ 鵜の渡せる橋の霜よりも、晒せる布に白みあり候アヒノテのうく山が見え候、
 朝日山に霞たなびく景色は、たとへ駿河の富士はものかは、富士はものかはアヒノテ小島
 が崎に寄る波にくく、月の光をうつさばやく、アヒノテ見え渡るく、伏見竹田に淀鳥羽も、
 いづれ劣らぬ名所がなく、アヒノテ立つ波がく、瀬々の網代木さへられて、流るよ水をせ
 きとむるく、アヒノテ所がらとてく、布を手ごとに、槇の里人うち連れて、戻らうやれ賤
 がやれ

②かぞへ歌

ひとつ人の迷ふ戀といふ字は、むくつけだにも大宮人はいとまなき戀路、櫻鬘して木の
 下蔭の露に、濡れにぞぬれし我小夜衣、一二二葉の待乳山、松の嵐に其夜の夢を覺させ、
 別路の憂きやつらさを、三つみ吉野々々へござれ、いつもながらの山櫻のんやほアヒノテ四
 つ世の中の人の心は、品々にわかれてど、五つくは色といふ字に引かれては、消ゆる

大宮人は云や
 新古今赤人百
 敷の大宮人は
 とまれや櫻か
 ざして今日も
 ちしつ

命は勿論さ、六つ昔の袖薫る、花橋の夕暮に、山郭公鳴連れふるはな、ふるは過ぎにし
 さいこのは人懐しや床しやアヒノテ七つ生中馴れて悔しや、馴れまいものを、逢へば別れ
 の鶏が鳴く、夜は東雲か、八つ山伏姿に様をかへ、兜巾篠懸錫杖を腰に指いて、京洛
 中の花盛りアヒノテ一重二重や三重八重、九つ戀に來ましよか、小原しづはら八瀬の里、
 柴めさぬか露踏分けて、十でとうからちらめく星の数々、曉の明星が、西へちろり東へ
 ちろり、ちろりくとする時は、扇おつとり刀指いて、太刀の柄に手を打掛けて、往のよ
 なせ戻らうよというては袂に取りついた、いとしけりやこそしとと打て、憎か打たりよ
 か、手がそれて

③あき艸

秋は常さへもの淋しきに、思につれて亂ると心、露も涙も争ひかねて、戀の路の邊踏分
 けがたき、草の色にも染む身はつらいアヒノテちらと見初めしえいさんく、女郎花の蕊拙
 き心かのん、扱まことにはや思ひ草、身は朝顔の淺ましながら、せめて靡かんこともや

なせーはなせの
 誤脱か

ありと、紅葉重ねのその薄様に、書いてやおくらん文見草、人目忍ぶの我涙には、乾く
 間もなき尾花が袖も、引かば靡きやれ、さりとは葛のうらみの数つもり来て、いつか
 は君をまた宮城野の、秋の下葉の露にしつほと濡れて、何ともなう荻吹く風の便りを、
 聞くやと待ちし戀心、亂れみだるゝ難波の、芦の契はつらい浪のよるく、さんさみを
 づくし思ふはくださうな

（四九）こひ草

思ひそめたよ濃き紫の、色に出でじとつとむに餘る、袖に涙はのん、さてまことにこ
 ほれぞ掛る、戀慕れんれつれアヒノテ知らぬ昔は餘所なるものを、今は身に知る愛別離苦
 の、愛さを思へばのんさて、まことに情もつらや、戀慕れんれつれアヒノテ召せく草花、
 何々ぞ、妻待つ夕顔白菊の、花さき初めて美人草に戀草、すんど秋風の立たぬ間に、靡
 かさんせ女郎花、お差合はござんせぬかいの、ちよつと刈萱

（五〇）東雲

朝い朝癡
 ひとみ一都（シ
 トミ）の詠
 こまもすさめず
 古今、大荒木
 の森の下草老い
 ぬれば駒もすさ
 めず刈る人もな
 し

東雲々々いつ夜が明けた、朝い久しき仇枕、下し籠めたるひとみ戸の、中の御座に端居し
 て、文の腰張影暗く、外面にしけき市人と、共に賣來る芥子の花、江戸町はやき身拵
 地白に網のつれ模様、目に掛れとの風俗や、符牒ことばの揚屋入、藤や三浦の二むれ
 に、乗物忍ぶ内床し、問へど答へぬくちなしの、こは誰やらん花衣、しんてう遅き其中
 に、こまもすさめず刈る人も、絶えし年経るゆかまさへ、生先床し新太夫、その外みや
 び由ある女郎の、時雨あだしの名寄草、人の結びし捨言葉、書きもらさなん藻鹽草、い
 への比より右手はうすく、ひだり勝なる色人の、樂みきはめ東屋に、兵庫津の國花松屋
 夕べ轟きまへ渡り、氣をとり上す二アヒノテすが搔や住なす床の一構、しかの投入違ひ柵
 梨子地の硯玉櫛笥、ふたり寢よとのやや文枕、皆くれなるの三つ蒲團、雲を疊んで堆
 く、いち爐にたざる松の風、本テウシ殊に色ある三味線や、人立返る床の内、折り數くござ
 のかたぐに、語り残せし短夜の、とても寢られぬうき枕、蚊帳のひとへの薄月洩るよ
 洩るよ、もれて淋しや終夜ともになかるよ郭公

松の葉第三卷

端歌目録

- 一 飛鳥川
- 二 たかせ舟
- 三 有あけ
- 四 芦分舟
- 五 みやま路
- 六 玉の緒
- 七 加賀ぶし
- 八 わきて節
- 九 伊香保節
- 十 長崎ぶし
- 十一 のんやほ節
- 十二 くひな
- 十三 はな笠
- 十四 船ばし
- 十五 朝妻舟
- 十六 うかれ女
- 十七 しがらみ
- 十八 ふじから
- 十九 しほや
- 二十 梅がえ
- 廿一 戀かぜ
- 廿二 まがき
- 廿三 たつ田
- 廿四 くしだ
- 廿五 もろこし
- 廿六 有馬
- 廿七 白ぎく
- 廿八 よさく
- 廿九 捨小舟
- 卅 涙がは
- 卅一 しがまつち
- 卅二 手まり
- 卅三 一つの夕べ
- 卅四 さかづき
- 卅五 くどき

二あがり

- 一 和歌の浦
- 二 さつま節
- 三 ひよどり
- 四 ちんくぶし
- 五 さいこのぶし
- 六 さんさぶし
- 七 かごしま
- 八 みどり
- 九 白ゆき
- 十 むらさめ
- 十一 亂かみ
- 十二 吾妻踊
- 十三 野中
- 十四 こまち
- 十五 うたよね
- 十六 いしきり
- 二さがり
- 一 こんくわい
- 二 かづま
- 三 門ばしら
- 四 いけだ
- さわぎ
- 一 一夜かどみ
- 二 三谷がへり
- 三 ふなうた
- 四 はつね
- 五 がき舞
- 六 あみすき
- 七 ぬり笠
- 八 さいもん
- 九 しつねん
- 十 悪所八景
- 十一 つしま祭
- 十二 せうし
- 十三 唐人歌
- 十四 永代ばし
- 十五 槍をどり
- 十六 馬かた

十七 ころく 十八 高尾
 十九 高尾 二十 高尾
 二十一 高尾 二十二 高尾
 二十三 高尾 二十四 高尾
 二十五 高尾 二十六 高尾
 二十七 高尾 二十八 高尾
 二十九 高尾 三十 高尾
 三十一 高尾 三十二 高尾
 三十三 高尾 三十四 高尾
 三十五 高尾 三十六 高尾
 三十七 高尾 三十八 高尾
 三十九 高尾 四十 高尾
 四十一 高尾 四十二 高尾
 四十三 高尾 四十四 高尾
 四十五 高尾 四十六 高尾
 四十七 高尾 四十八 高尾
 四十九 高尾 五十 高尾
 五十一 高尾 五十二 高尾
 五十三 高尾 五十四 高尾
 五十五 高尾 五十六 高尾
 五十七 高尾 五十八 高尾
 五十九 高尾 六十 高尾
 六十一 高尾 六十二 高尾
 六十三 高尾 六十四 高尾
 六十五 高尾 六十六 高尾
 六十七 高尾 六十八 高尾
 六十九 高尾 七十 高尾
 七十一 高尾 七十二 高尾
 七十三 高尾 七十四 高尾
 七十五 高尾 七十六 高尾
 七十七 高尾 七十八 高尾
 七十九 高尾 八十 高尾
 八十一 高尾 八十二 高尾
 八十三 高尾 八十四 高尾
 八十五 高尾 八十六 高尾
 八十七 高尾 八十八 高尾
 八十九 高尾 九十 高尾
 九十一 高尾 九十二 高尾
 九十三 高尾 九十四 高尾
 九十五 高尾 九十六 高尾
 九十七 高尾 九十八 高尾
 九十九 高尾 一百 高尾

飛鳥川

狐にはめなぞ
 伊勢物語、夜も
 あけば狐にはめ
 なぞくたかけの
 まだきに鳴きて
 せなをやりつ
 る

戀といふ字はむくつげだにも大宮人は、いとまなき戀路、櫻かざして木下蔭の、露に濡
 れにぞぬれし我小夜衣、夕べくは飛鳥川の淵瀬、底に浅いぞ濃いむらさきよ、よしやこ
 がる、澤邊の花に、煙くらべん来いよく螢、薰をしたふ芝蘭のもとに、狐にはめな
 で、其鷄のみだると比は、早きぬくの別になれば、花も雪も紅葉のあはれ、冬野の
 契りまでかはらぬ色をえ
 おなじく
 風も懐かし夕べの空に、袖の薰りもまださめやらぬ、深き縁しのかたさまなれど、あだ
 し此身もまよにはならぬ、月日程へて昔の譯を、問ふは嬉しや、さりとは命、いつそ露
 とも消えなば消えよ、心までくる涙の川に、流果敢なきうき世の勤め、染むもそまぬも
 枕の夢よ、覺めて朝のつらさを知らば、たとひ丹波のしなないた鬼も、さうしたことの寄
 るせはなくと、せめて便を松の葉の變らぬ色をえ

① 高瀬ぶね

由縁もとめて若紫の、草の籬を今来て見れば、花か紅葉か其佛の、見えつ隠れつ木の間の月の、浮氣ならねど身は高瀬舟、こがれこがれて、焼くや藻鹽の夕煙、此身をこがすえ

おなじく

君が心を引かるゝ程は、引き見んとは思へども、定めなの世や飛鳥川の淵瀬、深き思を色の一葉に載せて、浮きぬ沈みぬおもはく、馬はあれども君を思へばかちぢ、さはいひながら戀の重荷を何に載せてやらうぞ、こゝを木幡の里になしてほしやの、心身にも餘つた

③ ありあけ

世の中のく嬉しきうちに、勝りてつらき逢夜の床よ、我も妹背は有明つぐる、鶏の鳴音に後朝の、袖の白玉何ぞと問はど、露とこたへて消えぬ命をさ、おもひは沈む

馬はあれど一拾遺、山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞく君を思へば

袖の白玉一伊勢物語、白玉か何

④ 芦分舟

難波の浦によしや思はじ芦分ぶねの、こがれく逢夜もつらや、せめて別れの鐘ばかりかや、未だ名残も盡きせぬ夜半に、鶏もつらいは告げ渡る、ういこのく愛きわかれ、後の朝の文枕、暫しな傳へん荻の葉の、そよとばかりの便もないか、恨みなけけど、つれなや餘所に移る色香と微塵も知らで、只變らじと祈る心は、いつまで草の何時も苦しき身を憂き床に、夜日とねもせで迷うたえ

ぞ人の思ひし時露と答へて消なましものを

夜日と一夜も日も

⑤ 深山路

馴るとみやまぢ名も吉野川、ふかく絶えせぬ思の憂さを、いはで重ぬる八重山吹の、夏は卯の花咲き初めしより、軒の橘薫るも床し、初音高間の山ほとよぎす、浮名高橋戀ひわたる、身は其東路の常陸帯、結ぶ契の縁にしはながと、秋は来てしも宮城野の風、落つるに脆き花桐の、戀の道芝猶わけがたき、露路の夕霧立迷ひつよ、冬野に強き柏木も、獨りこがるよ色をへ

⑥玉の緒

なんほ仰しやつても、逢はぬつらさを見て給れ、ほんに添ふ身ならば斯うした勤はせま
いに、最早玉の緒たゆるばかりの憂枕、いや待久し一夜さへ、餘所にゐられぬわが思ひ
おなじく

なんほおしやつても譯のわるいが氣のどく、ほんに添ふ身ならば斯うしたことをしてく
れそ 最早勤もまよな上から、己しだい、いや待て暫し我心、思ひ待ちくまち明かす
おなじく

⑦加賀ぶし

勤めもの憂きひと筋ならば、疾くも消えなん露の身の、日蔭しのぶのよるく人に、逢
ふをつとめの命かな
おなじく

いづしづれの日に立ち初めて、いなさ細江のみをつくし、朽ちも果てなば浮名もとも
に、同じ濱名の橋柱

いなさ細江一干
載、清輔「逢ふこ
とはいなさ細江
のみをつくし深
きしるしもなき
世なりけり」

おなじく

よしやわざくれ身は朝顔の、日影待つ間の花の色、恨みられしも恨みし人も、共に消え
ゆく野邊の露

おなじく

あだし此身を煙となさば、とても淺茅の里近く、小夜のころもに香はとどまりて、せめ
て見ぬ世の形見とも

おなじく

分きてつれなき人ゆゑ我は、暮す日影の朝顔か、露は袂におき餘れども、かひも涙の身
ぞつらき

おなじく

獨りとどめて恨みしかひも、元の水なき隅田川、さても流に身はくれくれて、今は藻屑
の捨小舟

⑧ わきて節

花と雪とはどれが吉野のながめやら、
どいうやらかうやらわきて色分ちなく、
どれが吉野のながめやら、
花やら雪やら分きて

おなじく

萩と萩とはどれが露やら嵐やら、
どいうやらかうやらわきて待つ夜の袖は、
どれが露やら涙やら、
どいうやらかうやらわきて

おなじく

須磨と明石はどれが月やら名所やら、
どいうやら斯うやら分きて色わかちなく、
どれが月やら名所やら、
どいうやらかうやら分きて

おなじく

あだし情はいづれ果敢なき思ひ川、
どいうやら斯うやらわきて逢瀬もあらで、
何れ果敢なき思ひ川、
どいうやら斯うやら分きて

おなじく

恨み寝る夜は夢もつきなく又恨み、
どいうやらかうやら明けて見し佛の、
いづれ夢やら現やら、
どいうやらかうやら明けて

⑨ 伊香保節

花になりたや、ほんほとんどつこいしよ、
よし〜〜〜吉野の花にいよしも、
ほんほとえ、
咲いて亂れてほんほとんどつこいしよ、
露々櫻の下露、
落ちていよしも、
ほんほとえ

おなじく

夏は垣根の、ほんほの〜あやなしや、
卯の花白々明けても、
いかに訪ひ來ぬほとよぎす、
かたひ夕だつあとすどしき小村雨、
梢に 蝸蟬のね、
いづれ夕べはたどならぬ

おなじく

忍ぶ涙の洩れてはあやにくや、
いつ〜〜〜何時しか浮名立田の夕時雨、
濡れて小

かたひ一片日の意か

鹿の妻あはれや、妻戀ひてよるく、さりとは終夜獨りいよしもなき明かす

おなじく

月になれく果敢なし、幾度か袂の露々乾かでものや思ふと、暫しさへ須磨のうき寝をとへ、こととへ友千鳥、うらくくくく定めぬ鳴音あはれや、夜もすがら

⑩長崎節

しんきなしめそ木綿車、かけて廻り逢ふよるくは、そりや逢ふよるくは、掛てめぐり逢ふよるばかり、そりやあふ

おなじく

こがれくて唐土船の、袖に湊のよるくは、そりや逢ふよるくは、袖に湊のよるばかり、そりやあふ

おなじく

桐の一葉のなほそれよりも、脆き涙の露々よ、そりや逢ふ露々よ、脆き涙のつゆばか

り、そりやあふ

⑪のんやほぶし

晩にござらば肥後鉈さいてござれく、晩にや梅の木枝おろそ、のんやほくく、肥後鉈さいてござれ、晩にや梅の木枝おろそ、のんやほ

おなじく

戀は覺きもの、のんやほ、待宵きぬくつらや、つらい逢ふ夜ながらも我涙、のんやほのんやほく、待宵きぬくつらいく、逢ふ夜ながらも我涙、のんやほ

おなじく

春はござらば、のんやほ、三吉野よしのへござれく、いつもながらの山櫻、のんやほのんやほのんやほ、みよし野吉野へござれく、何時もながらの山ざくら、のんやほ

おなじく

思ひ掛けては、のんやほ、雲井の鳥の一聲々々、閨の伽羅の香睦言に、のんやほのんや

ほのんやほ、雲井の鳥の一聲、閨のきやらの香陸言よ、のんやほ

おなじく

いつの有明、のんやほ、袖ふり分れしつらさにく、最早淺茅も背に過ぎた、のんやほ
のんやほく、袖振りわかれしつらさにく、最早淺茅も背に過ぎた、のんやほ

おなじく

戀は生憎五月雨、降來る涙なみだく、せめて訪へかし郭公、憂身を五月雨さみだれ、
降來る涙なみだ、せめて訪へかしほとよぎす、憂身を

おなじく

夕べくはつねさへ物わびしきに、わびしくく千々のあはれは妻戀ふ鹿の音、黄昏たそ
がれ物わびしきに、わびしくく千々のあはれは妻こふ鹿の音

⑤ 水 雞

水雞の鳥のよすがら敲きあけて置いてさ、はや五月雨雨に色増す菖蒲のことはいのく、

山郭公またの東雲もない物か何ぞのやうに待宵く

おなじく

おほろの月をたのみに夜もすがらながめた、はや春風薫り持來る軒端の梅はいのく、
あだ名や立たん交す手枕も、ないものか何ぞのやうに轉寢く

おなじく

海人の刈藻に住む蟲の、われからと歎いたはや初時雨、尾花穂に出で餘りの色はいの
く、散残せかし露の名残も、ない物か何ぞのやうに秋風く

おなじく

寢覺習ひし横の屋にとほそをおくにさ、はや木枯落葉降りしく枯野の色はいのく、訪
へかし人の雪の朝も、ないものか何ぞのやうに冬枯く

おなじく

忍びかねたる人目の關守を歎いた、はや憂涙袖や朽ちなん獨寢の夢はいの、丸寢の夢は

いの、絶えなば絶えよとても逢ふ夜の、有るものか何ぞのやうに玉の緒く

ちらし

單へ重ねの契りは薄し、千代も長かれ糸櫻、そりやさうさ、結ぶえにしの糸櫻、そりやさうさ、江戸やつさ、ういて来た

花笠

梅の薫の花笠嬉し、ほんに床し、月影残りて、さりとは曙、遠山けしきの雪も少しは白妙に霞の間より、此處はうぐひす一聲を

おなじく

吾妻からより花都嬉し、神ぞうれし連三味合唄、さりとは庄五郎も一つたのむぞ、半太土佐節浄瑠璃を、萬々段も聞かまほし、扱も揃うた連唄

おなじく

今朝の別れの鶏の音つらや、ほんにつらや、亂るよくさりとは亂るよ、ねんく亂る

る、みだれみだると黒髪の、結びがひなしや、またの逢瀬を何時の夜

おなじく

秋の雲間の月影床し、神ぞゆかし籬の蟲の音、枕に争ふ曉東雲、果は明けゆく閨のひま、飽かでも別ると、さすが形見の面はゆ

舟橋

佐野のいよこの舟ばし、さのの舟橋かけてなほ、思ひいよこの渡るを知らせたや

おなじく

春の色香の名残も、藤のたそがれ物わびし、夏は卯の花五月雨、せめて訪へかしほとよぎす

おなじく

志賀の唐崎つれなく餘所にのみきく小夜時雨、思ひかけては常磐の松も許さぬ葛紅葉

おなじく

秋の色よき錦を、秋の錦を誰が織りて、染めも色よくそめたよ、染めもそめたよ小夜時

おなじく

時雨々々にぬれく、濡れて妻戀ふ鹿の聲、色の道とて優しや、しかも浮名の龍田山

おなじく

よしや浮世の中にも人の上にも掛けてだに、何かいよしも心のまよの、真間の織橋まよならぬ

おなじく

人のいよこの上にも掛けてみよ、人の上にもかけて見よ、真間のいよこのつぎはし、まの織橋まよならぬ

⑤ 朝妻舟

仇しあだ波よせてはかへる浪、朝妻舟の淺ましや、あまたの日は誰に契りを交して色

を、かはして色を、枕耽し偽りがちなる我床の山、よしそれとても世の中

おなじく

うき寝つらさの待乳の山の風、夕越え暮れてさよ小舟あよ定めなや、床の浦波ともなき千鳥く、絶えぬ思ひに月日を送るもあだ人心、よし逢ふまでの移り香

おなじく

あだしあだなる身は憂き枕、習はぬ程の床の露、あよ幾度か袖に餘れる涙の色を、あよ袂の色を、峯の紅葉ば獨りこがれて枕の涙、あはれと人の訪へかし

おなじく

憂を語らん友さへなくて、慰めかねつ我心、あよ現なや、過ぎしつたへの其水莖の、黒みし跡を見るにつらさの、いや増す涙は誰故ぬるよ、あはれと袖もとへかし

⑥ 浮れ女

花は吉野よ紅葉は高雄、松は唐崎霞は外山、いつも常磐の振はさんさしほらしや、兎に

にしをさんしう
―西尾、三州、

角おもはるよ

おなじく

八千代ふるともかはらぬ色よ、松に藤枝の其俤を、見るに一入にしをさんしうしはらしや、兎に角思はるよ

⑤しがらみ

絶えて逢はずと文をば通へ、文は妹背のく中となる、橋となる、よひく濡るよ我袂

おなじく

あひはちかうて逢はせはせいで、千賀の鹽竈く身をこがすく、よひく濡るよ我袂

おなじく

假のねまきに薰物すれば、よしやわざくれく色となる、戀となる、きぬく濡るよ我袂

袂

おなじく

絶えぬ思と人には告げよ、今は難波のくみをつくし、身を盡す、よひくぬるよ我袂

おなじく

朽ちてかひなし名にのみ立ちて、浮身長柄のはし柱く、よひくぬるよ我袂

⑥ふじから

あれて優しき伏見の里の、雪にゆき降る吳竹の、折れさうな雪に、雪に雪降る吳竹の、をれさうな

おなじく

刈らば疾くかれ淀野の眞菰、刈れば月影が下にすむ、底にすむ、刈ればく月影が下に

すむ、底にすむ

⑦しほや

今日と暮してあすかの川に、のうさ幾夜なんくなじみも、かはればかはる世の定めなや

おなじく

龍田山みちたどりて見れば、のうき鹿のなんく、鳴く音は可愛や、妻ゆゑに身をやつす

廿 梅がえ

庭の梅が枝命の君に、何が惜かろぞ花一重、咲いたの、さいたくく、何がをしかろぞ花一重さいたの

おなじく

五月五月雨涙の雨の、降るにつけてもなほ床し、獨り寢交す枕手枕、降るにつけてもな

ほ床し獨寢

卅 戀風

戀草の類ならば、葛は恨みの思ひ草、秋の夜なればなほ短夜と、逢ふ夜の空を歎いた、何故に、身を戀風と尾花そよく、袖の香

卅 まがき

秋の籬に咲いたは小萩、露の浅茅生露白露ぬれたく、牡鹿妻戀ふ鳴く音はさ、あとなくねはさ、あとなくねはさいとど身にしむ、獨寢々々々、悲しさまさる、袖は乾かぬ此身のつらさへ

卅 龍田

秋のたつ田に流るよもみちが、染めてあるく、有明の月もろともに照るや、散るや濃き紅の川波、さだめてくく、色より色に移るならば、戀ひ渡るたよりともの、さりとは

おなじく

後の朝に名残の袂は、濡れてあるく、いかなれば身をうき里に行くや來るや、いつまで草の何時まで、定めてくく、きん氣のどくなる障りもあらば、果敢なき我が通路、さりとは

卅 くしだ

霜にさまよひ時雨に通ふ、袖の落葉も涙に濡るよ、野路の棚橋こひ渡る身は、何につけても物憂きわざよ、宵は首尾なし、更けては障り、四つをかぎりの夜の關

おなじく

幾夜かはせし情の末も、いかに逢瀬のなか中川に、ほんに洩らさぬ心の底を、くめの岩橋絶えても人に、戀ひやわたらん思ひをかけて、何時をかぎりに身を投げん

おなじく

よしや頼まじあだ人心、一重ばかりか八重山吹の、たんと馴染のちかひもあるに、移りやすさの花色衣、問へど答へぬ梶子はらや、我は木幡のからはだし

おなじく

草の中にも物思草、誰に恨みは眞葛が原や、とんと此身を捨草にして、朽ちも果てなばそれかれそれよ、縁は朝顔淺くとまよよ、せめて逢瀬の深見草

⑤もろこし

花に戯れまた時鳥、月に愛でぬる時しもあるに、年の名残と降る白雪と、いづれあはれ、さりとはえ、移るも浮世え、長きためしの松さへも朽つとの、扱は千歳も一夜のゆめかえ、果敢なの此身え

おなじく

憂ぞつらいぞ此里なれて、染むもそまぬも逢はねばならぬ、いつか思ひの八重霧はれて、せめて夢になりともえ、譯あるかたへ、まよにならぬは誰が身にもありとの、それを便りに憂身をおくるえ、此年月をえ

⑥有馬

露になりたや袂の露に、消えぬ憂身のかこち草、何を種とか我思ひ

おなじく

星になりたや七夜の星に、橋は紅葉の色ふかく、掛けて願の絲の縁

⑦しら菊

難波津のみじかい芦の節の間を、濡らさるゝ身の朽果てず、扱も現に移ひくれて、夢も
見ようや見まいやら、半ば咲いたか白ぎくの、比になれく、尾花も亂れ、今日はふり行
く時雨の雲よ、神ぞ八幡わすられぬ、袖は別れの露涙

其よさく

獨こがるゝ心の色々がよひ、いはで信夫の山山吹がよひ、露の玉垣卵の花重、はれぬ思
ひを五月雨に、颯と薫れあや菖蒲、さりとは假寝の床の夢、短夜の夏の夜に、東雲こと
とふ山郭公、浮名に立ちし、せめて知らせん此つらさ、猶しも乾かぬ我袖に、颯と降れ
むら村雨

其捨小舟

まがきながらの御けんはつらや、人目忍べばおもはくばかり、袖は涙の淵瀬となりて、
憂は流の身は捨小舟、せめてしばしはとまれかし
おなじく

逢ふは別れと豫ては知れど、今朝の後朝いつよりつらや、袖は千入の涙となりて、恨み
こがるゝ身は戀衣、せめて一夜はきても見よ

其なみだ川

涙ならでは憂をばとはぬ、乾く間もなき我袖の色

おなじく

花は折りたし梢は高し、心づくしの身はいかにせん

おなじく

立田川には紅葉を流す、我は君ゆる浮名を流す君故ながす

おなじく

浮名立田の山路ゆけば、顔にもみぢがいよ散りかゝる、もみぢが散りかゝる

其しがまつち

恨みつわびつ、おもひを志賀の床の淋しさよ、つれなき人に見せたや庭の、柳の糸の風

に靡きしを

ちらし

扱も優しき螢の蟲や、忍ぶ繩手の闇路を照らす、人の心も情あれ

⑤て まり

つるくと出る月を、松の枝でかくした、いざさらば切りても捨ちよやれ、松の枝の下
えだ

ちらし

とんと突きあけきりよと廻り、廻り見てし人こそ床しけれ

⑥いつの夕べ

何時の夕べからやら、つい彼の人になづんで、只管に深き縁しも、かはる枕の起臥、此
里のならひかや、徒ら草の秋風、さそふ色とて移ろふ人の心やというたら、憂さを忘り
ようか、えいはいなくというても性はなほらうか、跡をいふ程氣のどく

⑦さかづき

玉の盃底なきとても、とても契らば二世と結ばん、二世と結ばん常陸帯、さてよい中

おなじく

たとへ御けんは任かせぬとても、有りて馴染染の、有りて馴染染の末はたがひの逢瀬川、さ
てよい中

おなじく

後の朝に通はす文の、よべの手枕今朝はなかく、今朝はなかく、亂髪、結ふかひも

⑧くどき

二丁はけしき夏の夕べに著く船も、人目堤の神ぞ螢も我思ひ、こひと憂身を沖の鷗にか
こちて氣の毒、うそも捨てられず

おなじく

夕べ淋しき秋も半の通路、戀に朽ちなん袖の湊の捨小舟、月はもとより隅田川に、流し

ていざこととはん都鳥

おなじく

見しや玉簾、内ぞ床しき思妻、ひくな唐猫、綱に任せて追風薫る、こころを誰にかこちて夕暮、あだには聞かぬ浮名を

おなじく

人のつらさに懲りぬ心の、いつまで憂きは玉の緒、絶えぬばかりに吳竹、いくよ伏見の夢も流れてなみだ川、柵かけて堰かうよ

おなじく

戀の初風身にしむ程ぞ懐し、月は文月誰が通はしの、文月なよの夕べを、星も幾瀬の思川、鵲橋を掛けうよ

おなじく

袖に降りくる時雨立田の思川、ぬれて紅葉の色も流れの果てしなや、何をうらみに絶え

て契りの薄氷、なか／＼戀は渡らじ

おなじく

交はす手枕絶えぬ逢夜の中川、さはり浮橋かよるつらさは誰ゆるゑ、よしや流に朽ちははつとも、一筋をあだにはせまじ我心

おなじく

閨にとどまり過ぎし其夜の睦言、おもひ亂れて獨り寝る身の憂さつらさ、つらき今宵は夢もなく／＼泣き明す、添寝の枕なつかし

おなじく

なんほ惜みし昨日の花も、徒らに今日はいつしかかはる習ひの戀衣、最早垣根も雪かと思ゆる卵の花、猶懐しきほとよぎす

二 上り

① 和歌の浦

和歌の浦には名所がござる、一に権現、二に玉津島、三に鹽釜、四に妹背山、かたをなみこそ名所なれ、しやうがへ、いよわけよういうたな、のほんくのほんえ、かうした譯よ、片男波こそ名所なれ

おなじく

人は常とや移ろひやすき、露の託言をまことと思ひ、尋ね入らばや心の奥の、見えぬ色こそ床しけれ、氣の毒いよ譯よういうたな、見えぬ色こそ床しけれ

おなじく

吉野川には櫻を流す、龍田川には紅葉を流す、橋の上より文取落し、水に二人の名を流す、しやうがへ、いよ譯よういうたな、のほんくよほいほ、かうしたことの水に二人

の名を流す、しやうがへ

② 薩摩ぶし

親は他國に子は島原に、櫻花かやちりぐくに

おなじく

空に鳴く音は皆うそどりよ、閨の内こそほとよぎす

おなじく

お江戸出てから戸塚は泊り、駒を早めて藤澤へ

おなじく

美濃に妻もち尾張に住めば、雨は降らねどみのこひし

③ ひよどり

ひよくと鳴くは鴨、小池に住むは鴛鴦、をしどりのしかも寡におふやのるすもり、さらばえいやとな、えいさらえいくくえいくくくく、しかも月の夜か闇の夜に、

ほととぎすは
んとうにかく

みの美濃、寝

かよや未詳

えいさらえい
 おなじく
 数々の宵の睦言、うらみに更くる東雲、しのよめの涙ながらにもはや歸るさ、さらばえ
 いやとな、えいさらえいくくえいくくえいくく、しかも月の夜か闇の夜に、えいさ
 らえい

④ちんくぶし

幾夜かさねて降り積む雪の、佐野の渡りに駒引きとめて、拂ひかねたる吹雪の、雲交りに
 降り来るを、かちひともし、それは戀の夕暮、色にこどえて死のとも、せめて思を語り
 ならば、はてそれまで

おなじく

ならぬ戀ならやめたもましょ、沖のちんく千鳥が、羽打ちちがへの戀衣、さてよい中、
 それがちやうよ、沖のちんく千鳥がはねうち違への戀衣、さてよい中

かちひと一徒歩人

ぢやう一定

おなじく

最早 曙 わかれのつらさ、関にこととふ蟲の音、絶えなばたえよ玉の緒我涙え、それは
 憂人の関にこととふ蟲の音、絶えなばたえよ玉の緒我涙え

おなじく

舟に召せく、色有る里へ、波のよるく、誰まつち山、追手嵐の來ました、みつげ箱崎わ
 けの里、舟めさぬか、それは仇し仇波落ちて沈んで死のとも、引きはかへさじ二丁立、
 名は流さじ

おなじく

待つに程なく今宵となりて、年に一夜の逢瀬も絶えて、たのむかさよぎく、戀の湊の
 渡しもり、幾秋もそれはまたのおりひめ、飽かぬ別の名残にいとど、袂は星合の空きの
 どく

⑤さいこのぶし

二丁立一舟に船を二丁立つるを

佐渡とな、佐渡と越後はさいこのさいよ筋向ひ、それはえ橋をな、はしをかきよやれ、
さいこのさく、いよ船橋をそれはえ

おなじく

春は吉野に咲いたとき、咲いたとき、初花櫻それはえ

おなじく

夏は雲井に鳴いたとき、鳴いたとき、山郭公それはえ

おなじく

秋は高雄に染めたとき、染むるとな、置く露時雨それはえ

おなじく

冬は霜夜の冴えたとき、さゆるとさ、鳴く友千鳥それはえ

⑥さんさぶし

宵は月にも紛れてすむが、更くる鐘にはさんさ袖しほる、よしなの思ひ

⑦鹿兒しま

こよにはやらぬ鹿兒しまにはやるになさ、三十振袖四十島田なほいさく

おなじく

志賀のさど波立つともまよよ、霞がくれの船床し

おなじく

文はあまたに書くともまよよ、思ひそめしはたどひとり

⑧みどり

ながめいみじき吉野の山や、花の八重雲棚引つれて、峯の白雪ふもとの吹雪、野邊の緑
と色こき交せて、ともに散りしくうす花筵、馴れし其夜の袂に匂ふ、春の移り香よそに
のみ洩すな、えいこのさんさ袖の移り香、よそにのみもらすな

⑨しら雪

うそのかたまり眞の情、此眞中にかきくれて、降る白雪の人心く、積る思ひとつめた

いと、わきていはれぬ世の中

⑩ 村雨

村雨々々ばれ間をしのご、人目づつみの草葉の螢、胸にたく火のたぐへてもゆる、我は消えなんく、我は、我は消えなん何時かえ

獨寝々々夜さむのころも、まこと裏なき心の月も、曇れくと降來るなみだ、我は朽ちなん、くちなん袖は、袂くちなん浮名も

⑪ みだれ髪

君と我とは七つ八つ、十で殿ごを見初めて染めて、人こそ知らねアヒノテ振分髪を其方ならでは誰にか見せん、この黒髪をアヒノテ今は仇なる亂れ髪、亂心やあよく、アヒノテ逢ひた見たさに來たぞかしアヒノテつらやくとアヒノテ思ひはすれどまた捨てられぬ、憎さ餘りていとしまさる、扱も命はつれないものよ、君つらや、生きて思ひは愛別離苦の、

死んでまた來て、そのくくく、アヒノテ其先の世も思ひ知らせん、思ひしれアヒノテ袖の湊の戀の淵、渡りくらべん涙川、アヒノテ色に沈みて死のとも、引きはかへさじ早小舟、名は渡さじ

⑫ 東をどり

朝の六つからずんど出掛けた、ずんずと踏出す八文字、鬢附とろりと人柄で、伊勢町舟町のだて姿、酒屋の娘店のひまよりちらと見た、見初めた晩に逢うぞや語るぞや、差足そろくくどりをちつくらくら、くらちつくらばつたり、くらくくがりちつくらばつたり、くら暗がりくらくくがりの暗くとも、開けてお待ちやれ遅くと、遅くと月の出るまで

おなじく

よひく、夜なく、通ふ妻もつおなは、髪の時時鐵槩つけ比は、月は三日月いづる比、のうやれく、さてももの、誰を待つやら黄昏どきに、門にくく立つとのう錦木かいの、よる立ちやる

あなは―未詳

野中

あのや野中におし伏せられて、後荆で刺れはすれど、前は結構なく、お正月ちやく、
まへは結構なお結構なお正月ちやく

小

思ひ深草色には誰も、迷ふ道芝露ふみ分けて、百夜通へと偽る文を誠と思ひ、彼の少將
は月の夜もゆく、闇の夜も通ふ、思ひ餘りて涙に濡ると雨の夜も、風の夜も拂へどく
袖に散り来るは、雪か霰か木の葉か露か、軒の玉水とくくと、ゆきては返り返りては、
又せん方なみの夜の路、こよを通ひて來にけらし、車の榻に通はんと、こよにたよすみ
彼處に立てば、扱もかなはぬ浮世かな

轉

心の間へば隠れない戀路、知る人なみの寄るさへ夢さへ現さへ、由なの猫の身をそほ濡
れて、なれよにようとは又うそばかり、それはじやうなら浮世にかよる、露のあだもの暫

によう一寝よう
を猫の鳴聲にか

しもえ

いしきり

思ひ初めてはいとま無きつらさ、涙萎れて妻戀ふ千鳥、どこの浦かけて鳴き明かす

おなじく

君と二人は雙の岡の、染めて小松のよい中なれど、恨みかねては降る時雨

三下り

こんくわい

痛はしやな母うへは花の姿を引きかへて、萎ると露の床の内、智恵の鏡もかき曇る、アヒノテ
ほうしに見えたまひつよ、母を招けば後見返りて、さらばといはぬアヒノテばかりにて、泣
くより外のこととはなしアヒノテ野越え山こえ里峯こえて、來るは誰ゆるそさまゆる、アヒノテ
君は歸るか恨めしやアヒノテいのうやれアヒノテ我が住む森に歸らん、勇みにいさみて歸ら

ん、我思ふく心の内は白菊、岩隠く篠の細道かき分け行けば、蟲のこゑく面白や
 アヒノテ 降りそむるやれ降りそむる、ふりそむる今朝だにもくアヒノテ 處は跡もなかりけり
 アヒノテ 西は田の畔あふないさアヒノテ 谷峯しどろにこえゆく、あの山越えて此山越えて、
 こがれこがると憂身かな

㊦ かづま

恨みは人をも世をも、人をも世をもおもひ思はじ、只身一つの報の罪や数々の、浮名に立
 ちし懺悔のありさま、岩洩る水の思となり、名をあだし野の露涙、つよめど餘る世の習ひ
 アヒノテ 昨日の花は今日の夢、アヒノテ おどろかぬこそ果敢なけれアヒノテ 身の憂きにアヒノテ
 人のつらさの猶添ひてアヒノテ 忘れもやらぬ我思アヒノテ せめて暫しはアヒノテ とまれかし、
 梓の弓に立つそらの、是まで現れ來たるぞや、あゝ懐しや今とても、忍車の我姿アヒノテ
 我すがたアヒノテ 物に狂ひし有様を、あはれとも又果敢なけれアヒノテ 世の中は廣いやうで
 狭いよの アヒノテにあひのつまくいとど太鼓の音どんくもよしどんくくアヒノテ

しみやるしめ
なざる

どんくくアヒノテ つくつくつくどんがらが、太鼓の音もよしやつとしよアヒノテ
 にあひのつまくいとど太鼓の音どんくもよしどんくくアヒノテ どんくくどんくく
 アヒノテ つくつくつくどんがらが、太鼓の音もよしやつとしよ、物に狂ひし我す
 がた

㊧ 門ばしら

晝はたんこくな、桶の輪をさしみやるさのほんへ、夜さりやせんまじよの腰しみやる、
 しゃうがへ

おなじく

たんだ振れく六尺袖をさのほんえ、てうせんじ門柱をふりかくす、しゃうがへ

㊨ いけだ

池田伊丹の六尺達は、晝は繩おび繩襷、夜は綸子の八重まはり

六尺達一こくに
ては酒造男をい
ふなるべし

さ わ ぎ

① 一夜かどみ

不道化—おどけにもならぬ事
梵天國—つかひはたすことをいふ
ちうさい—歌曲の名

更けゆく空の犬の聲、揚屋々々も打すみて、恨みらうさい、別れ酒、斟みだれの聞もあり、しどけ態振の單帶、もすそ小高く脛白く、おくり届くる仲の町、己がさまぐ待乳山の、松の嵐はその夜の夢を覺させ寝ぬばかり、あよばかりへ、明けぬ先にと葛城の、あ降たる雪かな、雪を丸めて一つかみ、投付けたまへば操の前、誰ちやいの、こんな悪いことはせぬものよ、金を集めて一つかみ、なけつけ給へばみそかの前、誰ちやいの、こんな結構な事するものよ、納豆集めて一つかみ、投げつけたまへばつほねの前、誰ちやいの、おかさんせ、こんな不道化な事はせぬものよ、實にさまぐの戯れにつれて、連れてくるわの、のんやほよくはんやしたふてんとさ、さあしたふてんとさ、勝つて兜の緒じめの巾著、きんぐのはアヒノタたとひ此身は梵天國になるとも、假令ひ此身はほ

ひんは—貧乏か

んでん國になるとも、物日々々は無にせまいく、さらばへおつとせ頼むによ、ならぬにさうそつきめ傾城奴、ひんほめへへへへ、歸る姿は野暮人の、笠も足駄も踏散らかいて、雪の其夜はばかりし、やうくたどり行くほどに、道哲の鉦の聲、千手陀羅尼をよむ時は、早明方になりなんと、千々に心を碎けども、行きて歸りてぬめる身か

② さんやがへり

こくに—至極の意か
さんちや—散茶
ぜによない—錢がない

世にこくにあはれらしきはさんちやがへりのふと吉三、宵の酒宴に思はれて、あなたの方へさらばへ、此方のかたへのきははんや、馬にも舟にも得乗らいで、手編笠をさしかざし、土手の窪みでけつまづいて、膝頭をすりむいた、何とした、あたたのたアヒノタ跛ひきひき金龍山の、米饅頭はおらないか、ぜによないないくの、ない、兎角戀には身がふとる

おなじく

世にこくにわびた茶の湯は、朱雀通ひの浮れ人、宵の騒に聲かれて、あなたの方で投節

二枚肩一駕籠を
いふ
焼印編笠一焼印
あしたる貨編笠

此方のかたでそも辨慶、二枚肩にも得乗らいで、焼印編笠打かざし、丹波口にてけつま
づいて、裾つぎまで踏裂いた、何とした、氣根がない、襦袢を下けく、松原通りの蒲焼
を召すまいか、家來せにとくないくのない、兎角食はねば身が細る

③舟うた

あさの御前のまんほが瀬戸を、小女郎戀しとな唄うて名乗りてお漕ぎやる、こじやくし
こん娘こさいかこせんかこかいかこぐるまつのこよねかくつがはがくくのんえい
よほ、船ではやらいで唄でやる、君を思はで通はりよかく、何處で見た、ぞつと致し
たとよ、えい、君は春咲く梅の花、あちやとよえい、薫る床しきとりなりは、ありや
りやこりやりやえい、さつさえいさつさ、萬歳ちやく、千秋樂々々ちやく、ちよぎや
くちよぎりやちりく、ちりくくとも、渚に友呼ぶはんまちんく、千鳥が寄來る
く、こんくくく小波に揺られて揉れて、たんどりちんどり、しどろもんどりはねられ
た、ほよたんくくつるやらこの、したたんくくたどちがよんきよよ、こんこよこのこん

このえ

④はつ音

初音つらにく障りがちにござる、せつくはいてるよ、よざどの譯は氣の毒、濡らすく、
濡らすく、洩れて亂れてはつとさ、だんく、物憂い正月、アヒノテ、御慶々々と明けゆく春
の、二丁目あたりに鶯鳴いて氣のどくの山、すたりし昔かねのかずく、今更惜しと譯
を友禪、左の腕もよにすけさまいのちとほりて、りうしのてんとむつ言も皆偽りよ、あ
まのろくさも徒らごとよ、月に廿日はあふたいていも悪所すてほのさんせきゆるに、今
は便りの文ばかり

⑤がきまよひ

あら闇浮戀しや、安きひまなき身の苦みを、のんさて誠に倒れ伏してぞ泣くばかり、辨
慶聞いておと道理々々骸骨たち、さりながら忽ちそこを立ち去らずば、片つ端しよりか
つひしやがんとぞ申しける、骸骨此よし聞くよりも、武藏さまく、辨州さま、其は餘り

闇浮一此世のこ
とをらよ

曲もじもござんせんはいの、こればかりの盛切飯を二ばいばかり、踏んぞろばいても蹴
轉ばいても、ちつともぞつとも大事もないが、火燄となつて燃え上るく、アヒノテ火燄か
たをばおごろじやつてア、悲しア、なくくばかりひもじ

⑥あみすき

網すき又兵衛どのは後世者でござる、跣裸の代まゐり、祈る験の利生も有らば、町々
門々店の端にも引掛けて置いてから、子供衆々々最些とそちらへ寄らんせの、およも
ちつとそちらへよらんせの、わくるはくくわくるくくすきわくるく、網を五
色にすいてかきよとの宿願かけて、因幡薬師くはんなたこすだこ残らずかけた山葵
アヒノテ信濃の國には戸帳に掛けた、其が虚言なら善光寺の佛所に問うてまた見さんせの、
愛宕様へは月まゐり、祇園やれく清水丹波の子安の鐘の緒、かけた願なりやすかね
ばならぬアヒノテこの町は子供で喧し、上の町ですきましよ、上の町下の町、店の端にも
引つかけて置いてから、子供衆々々最些とそちらへ寄らんせの、およもちつとそちらへ

すだこ一醉飽

よらんせの、わくるはくくわくるくくすきわくる、網を五しきにすきわくる、
まんまん又兵衛が網すき、まんく又兵衛はあみすき、又兵衛がすいたかねの緒、兎角
又兵衛どのはしやぐわん後世ねがひ

⑦ぬり笠

御方塗笠七年早い、菅笠にかへて御召しやれさ、近江の笠はいよこの、さいたさなりは
ようて、びやくらい著ようてさ

⑧さいもん

もとより眞の行者にもあらざれば、ぶしたる祭文知らばこそと、出放題にぞ、抑祓ひ
済めたてまつるアヒノテ御裳濯川の影さよく、外宮は四十末社、内宮が八十末社、合せてや
しやくのなぎたおふ膝車に搔込うで、其處さん此處さんアヒノテ上方の社には稻荷祇園賀
茂春日、松の尾の大明神、北野は天満天神なり、あの仰やんすことはいの、あのおしや
んすことはいの、鹿島浦には寶船が著くとの、千本舟岡朱雀いろ里やあそれの、アヒノテ訪は

びやくらい一白
猫にて誓詞

煙管の雁首鳩の
目一正當の通貨
にあらざる私製
の錢

ばとへかしいよ伊豫に松山、讃岐に金毘羅、同じく志度寺の觀世音、津の國に至つては、天
王寺は聖德太子の御願所、鹽屋松本二芝居、アヒノテえい〜〜今年や殿御の草刈年よ、
鎌もよく刈れ千草も靡け、心よいぞの鹿毛の駒、どこ〜〜どつこい〜 姉さまや
姉さまや杏で〜よござんす、山を通れば山桃ほしや、身をも投げかけ揺らば落ちよ、餘
りつれなの山桃や、山につれなの山伏や、なほ山深く分け入れれば、加賀にしら山信濃なる、
淺間更科いよ甲斐の國、アヒノテ都留か郡や小笠原、相摸の國に鶴が岡、鎌倉山を餘所にみ
て、沖の小島に友もなく、うきを駿河の田子の浦、砧の音のいと高く、宇津の山邊を三
保が崎、磯に寄來る浪の音、名乗つたる千鳥の響の響がちん〜〜鴨の脚アヒノテかは
るまじ〜、此世は扱置き後の世も、これ〜〜さつて〜〜浮いて來た、身は浮島の遠
江、名高き故事を三河なる、かの八橋やいつの間に、尾張の國には鳴海灣、いつまでこ
こに伊勢の國、鈴鹿宮川月讀や、阿漕にひくはなみたへに、山田が原や宇治橋や、はし
のいよこの下には、橋の下にはそつこでお檀那、ほんのぜに煙管の雁首鳩の目、おつ

うや松原一祭文
の極文句なるう
やまつてにかく

とよんだ猫の鈴でもそつともとまれかし、實にうは氣檀那、うつざはよねやま薬師、な
んなむ歸命長左衛門、あぶらうんけん宗右衛門、御祈念とぞうや松原通りへ

⑨ 失念

今度長崎でかはつた小歌をならうた、あとさきは覺えないが、中の唱歌を忘れた、さこ
そ有るべいとて書いてもらつたが、それさへ出口でおとした、これ面目ない、首尾もし
よわけも此通り、これ面目ない

⑩ 惡所八景

なんほ堰きやるとも逢はなけりやならぬ、やだといやらば出直してやりかけよ、及ばぬ
戀を瀬多に唐橋、ばつと立名が浮名のうきにさ、網ひく〜よね達は、やんれ可愛らし
やの、えい〜えいざんのお山は、くされだてしやぢやないか、やれ雲の帯、鹿の子斑
に雪のふり袖、實に〜江天のほつとり者、志賀の唐崎〜、代參り引つ〜つれたつて、
ついつれたつてまるる女は、男ほしさに宿願、かかか掛けたえ、利生を待つぞ一つ松

やだ〜やだ

ぼつとり者一美
人の意とぼた
ぼた降る暮雪と
にかく

ばんしゆー番衆

あききの月一氣
の盡きを秋の月
にかく

其木の下でさすぞ盃、やつこりやくく、飲めさやださ、ぞめき騒ぎし有様を、見たか
平沙のらく遊び、禿遣手に太鼓持、替女や座頭に按摩とり、扱も悪所の晴らいやと、ば
つというてばんしゆくばんくしゆ、雨も降らぬに高足駄、糞著て笠きて棒突いて、
行燈提けてどんがらり、どんどと鳴るは夜店仕廻の太鼓持、どんがらり何者ぢや、あれ
は遠寺の番太郎、さつては別れの涙こそ、さつさ濡れてしつほと、濡れたが瀟湘の夜
の雨にもまさるべし、明る日は二日ゑひの作り病で、おや兄弟の見る時は、眞らし氣に
洞庭の、あよきの月とも謂つんべし、いかい呆痴のなれの果、うかりひよんとぞ見えに
ける

⑤ 津島まつり

津島祭にうかれ出てえ、晝はくしん樂にちやんぎり、しつきり船遊び、まづ三番叟の
鈴の音は、おふさへくや、おんはくしやんしやんとよんく踏渡、囃せやはやせ
や役者衆、其次は供の衆數へ數へ見たれば、一つ人の忍ぶ新町の式部は、花舎なものぢ

とさんー盃

さかひやー塚屋
を榮えにかく

やとアヒノテどつと譽めたもことわりよ、一二つ二葉の松はたのみにわかれは浮舟な、あよ
んく、三つ三笠に、四つ吉田の兼好が流れとて、其敷島の道をたつる女郎は悪性らし
やの、びやくらい可愛らしの、五つアヒノテ五つ井筒は意氣地張合、強いが弱いか、六つ
武藏は辨慶せいひの兵ぢや、七つ長橋は欄干につよ立つて、口舌の男を今や遅しと待つ
たりけり、雪踏の音はざらく、ざざらりひしやり、すはしれもんのんよと、盃手に
持ち待ちかけるアヒノテ歸るさはとろさになつて門までおくれさ、さらばやはつと言うて
は、八つ八重桐は髪きり姿に様をかへ、とさん組重盃を、禿に持たせてさすいさ野暮
さ、てんとくくてんとくくてんとや、追つめほいかけ、もんのび物日をいちに禮拜、南無歸
命頂禮くぜつもなかれ、九つ小太夫はおしつけこぐらを建てそめて、家もさかひやの
女郎屋揚屋の大黒舞と、夜店の太鼓で囃した、十でとうから明日はとうからござんせ、
三番太鼓ですんでんどうから、文は遣手のかぶろやりくる

⑥ せうし

笑止々々が三笑止ござる、一に出ぬ首尾、二に舟の雨、土手の夕ぐれ、橋場の烟、明の
鳥のこゑくも氣のどく

おなじく

笑止々々が三笑止ござる、一にかす首尾、二に遅い首尾、軒の夕暮限りの太鼓、ならぬ
貰ひの約束も氣のどく

唐人歌

かんふらんはるたいてんよ、長崎さくらんじやばちりこていみんよでんれきえきいきい
はんはうろうふすをれえんらんす

おなじく

三浦の四郎左衛門、長崎平左衛門、菱屋の三郎左衛門、東屋の新七で、江戸町山形七郎
右衛門

永代橋

三浦の云々吉原遊女屋の名寄なり

陸奥一傍訓原本のまゝ
風―無常の風をいふ
せつく―督促すること

願もいとど掛まくも、露路惜しからぬ陸奥の、深き情を汲上げて、南無や大慈の觀世音、
枯れたる木にも花咲かせ、今の若いに浮氣もしやれ、風が誘はどなるまいに、また夜は
深いにさりとは、後朝せつく舟迎、箸をり焚し酒の爛、猫の荒らせし座禪豆、月は待
乳の木がくれに、告げて漂ふむら鴉、一二三夜を籠めて歸るつらさに又の御けん、神
かけてまだ見ゆる今戸橋、しよ向島崎なごり有り、押切灘もつよがなく、急ぐ心はなけ
れども、永代橋にぞ著きたまふ

玉やりをどり

振りやれおふりやれ、大鳥毛の振袖行列、ほつたて東入り、ちとくちと歩行をめされ
の、しつかとせ、槍はちよんくちよるちよん女ろさまに持たせろ、まつかせ持たせろ、
まつかせまかせまかせくちよるの、さてくちな任せて置けるの、さてくちよ
んくちよんくちよるしゆくちよんちよる様の槍の手、對の振袖御先で振れさく、
おさきでくさきくちよるあとくちよる跡先揃へた道中、國は花のお江戸に、とんく

とつ著いた、早品川を打過ぎて、東をさしてぞくだりける

⑥むまかた

千兩とるとも馬方いやよく、寒の師走も日の六月も、わつはしめ腰にや馬柄杓、やつとまかせのよいくく、とぶが如くにはねるが如くに中をも驅け、山をも谷をも越ゆる白月毛、ちん鳥足、わけえいさらありやとんな、起きあがつて馳せ上つて、ぴんと刎られて、て、て、いんひ、て、て、こよな馬奴は飴が過ぎたか、ほてつ腹奴、歩めやあゆめ、歩まにやならぬ、あつちらな、こつちらな、おちりこちり、すべりまはつて、はいはいく、春はござせのお葛籠馬よく、明け七歳の連銭芦毛に、さど波轡をとつつけて、押掛さんまい、はりりんしょ、日本一のやち馬、かたらば猶よかる、かへしてかへして轡とつてやち馬、かたらば猶よかる、駒を早めて

⑦ころく

小六ほつくりく、ついたる竹の杖ころく、もとは尺八、中はひうやりちやうやり笛こ

はてつ腹馬方の馬を語る語

ろく、末ぢや一筆啓上せしめ候、先度は御状を下されたれども、ついしか返事も仕ら

⑧高尾

いで、さてく無沙汰に思ひまるらせ候べく候とも書いてやれ、筆のぢく竹ころく

高尾内に居て、蛤喰やるよの、もはやふぐどき、やんや今年のふぐはへ、それくく

かいて一嘆いてか、此頃解しがたし

松の葉

松の葉 第四卷

吾妻淨瑠璃目録

- 一 浅黄帷子 半太夫節 おなじく
- 二 狂女 おなじく
- 三 はうか僧 おなじく
- 四 しらたま おなじく
- 五 通路 おなじく
- 六 蟬丸 おなじく
- 七 かみすき おなじく
- 八 待宵 おなじく
- 九 舟あそび おなじく
- 十 まりこ おなじく
- 十一 千鳥のまへ おなじく
- 十二 元服會我 おなじく
- 十三 五人會我 おなじく
- 十四 きてう おなじく
- 十五 かうきでん 永閑節 おなじく
- 十六 丹前せいけん おなじく
- 十七 寛濶一休 おなじく
- 十八 茶の湯 土佐ぶし

十九 花賣

おなじく

廿一 道成寺

しきぶ節

廿 草摺引

若山五郎兵衛ぶし

○浅黄帷子

ほのくくと夜明鳥もいほど聞け、氣の毒の山越えかねしに、順禮が情にて、鬼一口を免れて、まさきよ一人御供にて、たどりくくと道芝の、裾は露やら涙やら、時しも秋の夕間暮、千々の草葉も紅葉して、錦かと思ふ谷蔭に、樵夫は實に家土産の、花はなにく藤袴、桔梗刈萱地榆、門田の稲葉刈初めて、竹のまろやの賤の女が、月に向ひてうつ砧聲をかしくも拍子とる、名にのみ聞きし鶯の、關こえ過ぎてながむれば、すねて茂りしアヒノテ松山の、かのわけ法師がそこはかと、かき集めにし徒然に、給子鼻緒の足駄にて、作りし笛には鹿も寄る、肩なん過ぎにし黒髪の、緋れる綱には大象も、繋がるよ習ひかや、玉よの姫を戀ひそめて、いつし帝位を振捨て、草刈童の名に立ちし、色の御門の陵とや、打越え行けば譽田の里、甲斐の黒駒たけくとも、しこなして乗る武士や、花の臺や紫の、雲と詠ぜし藤井寺、順禮が情をも、偏に大慈の誓ぞと、思へばいと袖しほる、なほ行先は津の國や、難波の芦のふしの間も、まだ肌なれぬ妻ゆるるに、諸事

花の臺云々順禮歌「参るより頼みをかくる藤井寺花のうてなや紫の雲」

佐太、牧方、葛葉
一河内にあり

世話ながら迷ひゆく、いかにまさきよ、あれく満ち来る潮も戀すかや、女波男波のあるものを、佐太牧方を跡になし、葛葉の杜に色鳥の、峙もとむる優しさよ、男山には女郎花、萩の葉風のたよくくと、振らで靡くは野暮らしや、淀や伏見の舟よばひ、いとし殿ならく我も寝ん、あな不審しや松風の、吹かで調ふる琴の音かアヒノテ幽に三味線きこゆるは、此處はいつくぞ、時ならぬ郭公の、アヒノテ一聲聞かまほしやと仰せける、まさきよが申す様、されば過ぎにし梅咲く比、都づかひの折柄に、下部の者に聞きけらし、伏見の宿の色里なり、名に撞木町とかや、ついでをかきしことながら、憂きが中にも物とはんアヒノテ指きりアヒノテ髪切いれほくろ、よねの習ひかいやほんに、待つにかはらで心せば、誰か契りを餘所にせんとはと口ずさみ、今は早清水寺にぞ著きたまふ

○狂女

いつしか狂女と鳴神の、とどろくと中空に、立ち入る雲の跡もなく、浮きて漂ふばかりにて、其處ともいさやしら露の、置きまよふ身は浅茅が原、まだき色づく我袖に、誰

荒れての後は一
新古今、良經、人
すまぬ不破の關
屋の板庇荒れに
し後は只秋の
風

故月はやどるごと、餘所になしても訪へかきな、深き心は淺草の、葉末に結ぶ白玉か、
光さやかに隅田川、絶えず流るゝ水の泡、涿人は恙なく、有りやなしやと聲たてよ、
問へど答へぬ待乳山、夕越えくればゆふ崎の、庵傾く板庇、荒れての後は風あてよ、
ふはく不破の關ならば、鶏の空音やはかるらん、ゆるさぬものを逢坂の、人目の關の
忍ぶが岡、よし不忍が池の面、實に潔き清水村、弓張月の入佐の森、谷中の木立茂り
つよ、花の盛りは三吉野の、吉野よりなほ上野山、のほれば下る車坂、かなたこなたと
アヒノテ見渡せば、群集の貴賤とりくんに、だてを下谷の町とかや、面白小袖引きちがへ、
上著々々のアヒノテ色々に、模様もよしやよしなな染、燻る思ひの数々に、いはで只にや
山櫻、霞の間よりほのかにも、見てし人には逢ひたらで、淺黄縮緬茶ぢりめん、鬱金紅
樺薄鼠、色ある人に見せばやな、小島の海人のぬれ衣、藻鹽かくそで一つまへ、縞子や
唐綾白純子、縫摺箔の幅廣を、由縁の色や紫の、縮緬手ほそ結び下け、誰白營の加賀
笠を、眉深々と著なしつよ、なまめきあへる折柄に、花の木蔭は假りの宿、心止むなと

吹く嵐、蘭麝の薰さそひ来て、さりし夕べの頃までは、いとと思ひや出るなる、我も忘
れじ洩さじと、移り香深く重ねきて、つまの行方を白絲の、亂れ心や狂ふらん

③放下僧

まづ青陽の朝には、谷の戸出る鶯の、氷れる涙解けそめて、雪消の水の沫に、あひ
宿りする蛙の聲、聞けば心の有るものを、目に見ぬ秋を風に聞き、萩の葉戦ぐ舊里の、
田面に落つる雁鳴きて、稻葉の雲の夕時雨、妻戀ひかぬる小男鹿の、たどすむ月を山に
見て、指を忘るとおもひやり、浦の湊の釣船は、魚を得て笠を捨つ、是を見彼を聞く時
は、峯の嵐や谷の聲、夕べの烟朝霞、皆是三界唯心の、ことわりなりとおほしめし、
心を悟りませや、月の爲には浮雲の、種と心やなりぬらん

おなじく

面白の花の都や、筆に書くとも及ばじ、東には祇園清水、落ちくる瀧の音羽の嵐に、地主
の櫻は散りくぐに、西は法輪嵯峨の御寺、廻らば廻れ水車の輪のりせん、せきの川波川

月を山に見て云
云一月を見て指
を忘るといふ禪
家の語あり
魚を得て云々
莊子に「得魚而
忘筌とあり」

柳は水に揉まるよ 枝垂柳は風に揉まるよ、ふくら雀は竹に揉まるよ、都の牛は車に揉まるよ、茶臼は挽木に揉まるよ、けに誠忘れたりよ、こきりこは放下に揉まるよ、小切子の二つの竹の、よよを重ねて打治りたる御代かな

④ 白たま

さて白玉とまうせしは、いうに優しきだて姿、誰に見よとて咲く梅の、色の花笠深々と、著連れて連れてゆく時は、知る人ぞ知る白瀧の、音羽もこよか名取寺、群れつよ遊ぶ京童、あふさ来るさに茂りあふ、枝よりつたふ春風は、空に知られぬ雪なれや、友待ちがほの山櫻、今此娑婆に示現して、仰ぐもおろか清水の、たえぬながめは面白や

⑤ 通ひぢ

忍びくの通路に、待つはつれなや氣の毒や、便り求めてやる文に、必ず來んとの返り事、嬉しさどうも溜られず、宵より閨に引きこもり、待てどくらせど其人の、そよとばかりの音信も、早九つの鐘が鳴る、扱も思はぬ障りあり、今宵の逢瀬はかなはぬな、よ

今此娑婆に示現して仰ぐもあはかき一謡曲田村の文句

しよしかこつも野暮らしや、いつそ夢こそましならめ、枕一つを樂みに戀し床しき閨の裡

⑥ 蟬丸

暗き御目の悲しさは、月日の影も水鳥の、賀茂の川岸波越えて、つひの夕を松坂や、消えこそかへれ粟田口、いつを便にたはつけの、我黒髪のおさね葛、逢坂山にぞ著きたまふ

おなじく

第一第二の絃は索々として、秋の風松を拂つて素韻落つ、第三第四の宮はわれ蟬丸が調べは、四つのをりからなりける時、かな、流るよ水のあはれさよ、其理も目に見えず、月の入るさはいづくぞと、都の空も懐しさ、正木の葛青葛、くる人ありとも知り給はず、横や柏を押分けて、杖にすがりの岨傳ひ、たどり兼ねてぞ見え給ふ

⑦ かみすき

なにの勤に暇をなみ、黄楊の小櫛もさよとやと、取散したる玉櫛笥、漉きかへしぬる數

第一第二の絃云一白氏「第一第二絃索々、秋風拂松素韻落、第三第四絃冷、夜鶴榿子箱中鳴」

黄櫛の小櫛一新古今、葉平一昔の

屋のなだの霞や
き眼なみつけの
小櫛もささて来
にけりし

鳴神の云々—古
今「天の原ふみ
とどろかし鳴る
神も思ふ中をば
さくるものか
はし

數に、濱の眞砂や空の星、よむとも盡きぬ戯れに、ことの葉草の露ふかく、いつの頃よ
り陸奥の、關の下紐打つけに、解けて亂れて元結の、末長かれと結びてし、二人が中は
久堅の、とどろくと鳴神の、争でか分けん分くるとも、垢に馴れたる九十九髪、もつ
れ初めにし其夜半は、若し移氣の餘所にやと、立居につけて疑の、思に胸を焦せしに、
變らで影の積るにぞ、情の色も増鏡、松の二葉の千代かけて、たのむによ十郎どの、芦
の丸屋に獨り臥すとも、君が外通ふ心はなきものを、見放ちたまふなわがつまと、しば
しば髪をぞ梳きたまふ

⑧ 待宵

明日の夜を今宵になして月もがな、命も知らず曇りもやせん、目には定かに見えねでも、
風の音信何地とも、知らぬ妻戸をたよくなる、よしや迷と心から、若しや其れかと危み
て、走り出て見れば蟲の鳴音も、小夜更るほど可愛らし、汝もや物を思ふかと、いとど
床しさ増るらん、とすれば恨みかくすれば、またいと惜しさに絆さたて、縹の衣を打被

き、夢こそ頼めと打詫びて、なれし枕に咎ゆるす

⑨ 舟あそび

夏は涼しき浅草の、色をとどめし舟遊び、身を捨人の思ひ川、ばつとしたのよ譯姿、さ
りとは心現なり、なり行くまよに熟々と、憂きことをのみ案ずれば、戀風慕ふ三味の
音に、薫りよく、色と薫りのさりとては、氣の毒の山つもり来て、浮名いとはじ我思
ひ、いづれ譯あるつてもがな

⑩ まりこ

爰は何國と問うたれば、こよは駿河の鞠子の宿よ、扱は嬉しやまりこまで来たか、宇津
の山邊を歌でやる、手綱捨り掛け馬追ひ来れば、爰は下露くだり坂、宇津の山邊の夢現

⑪ 千鳥の前

ふじは磯千鳥のまへと申せしは、法眼の獨り姫、情さかりは十六の、年の始の初曆、婿
取りよしと記せしは、誰が爲にぞと筆染むる、消してかこちて打恨み、嫁入ごろなる姫

心、すいたく、殿御の噂のみ、うつらくと言暮し、せめてのこの思みに、朝日夕日
が言葉の末、頼みにするこそ優しけれ

⑤元服曾我

見みえ初めしも早三歳、すぐる月日の数よりも、君に逢ふ瀬は幾度か、内外の者に堰れ
ては、瀧津涙も流れ得ん、思ひの淵の底ひをば、よどむと人は白波の、消えぬ假言の勤と
て、外の客衆に逢ふ時は、さすが餘所には陸奥の、千賀の鹽竈近ければ、あらゆる神も
知ろし召せ、許さぬものは下紐の、關の扉かたきつれなさに、親しむ人は疎くなる、疎
きはいとど遠ざかり、まだきに秋の風荒れて、千草の蟲のかれがれに、誰に頼らん道芝
の、露の此身の置所、方様ならでよすがなし、生れ生るゝ世々かけて、變り給ふな變ら
じと、結ぶ誓のしたひがみ、天津かざしの花よりも、分けてめかれずながめしに、しづ
心なく散らさんは、これぞ五衰の数ならぬ、とは言ひながら殿姿、今日ぞ定まる壽を、お
もへばく、目出たやと、島田にさしと櫛をとり、髪搔分けて月代を、鎌倉風の今様に、髪

したひがみ
たひがみ(額髪)
の亂
めかれず一目放
さず

はからはぬ
からはんの亂

薄からず厚からず、烏帽子したよくはからはぬ、妾にまかせ給へやと、櫛笥のまゆだれ
手合せし、いとも静にすき下す

⑥五人曾我

互ひ違ひの御手枕、透間の風も洩さじと、しめて寝さまも起き様も、昔の人も後の世も、
今の妾にかはらめや、此を見彼を聞く時は、戀と菩提を引分けて、道は二筋踏みもせぬ、
殿に心は風車、千里萬里も物かはと、虎がいさめば少將も、夜の雨露なんのその、しと
とに濡れは劣らじと、東雲まだき烏羽玉の、闇に掲ぐる燈火や、御法の花を家土産に、折
りこそ下れ峯の寺、裾野の浅茅分け迷ふ、早百合姫百合鹿子百合、小笹姫篠木瓜の花、
ほけくくくとしたこそよけれ、うたて嫁この繩襪、菅の小笠を傾けて、早苗とる手の
所作らしく、うしろじさりに張りあけて、我用にかよれの君が田の水、みづの流れは白
眞弓、矢矧の橋の果てしなさ、御手を引合うてとろくく、とろくくたらく折に休
んで、河原面を見渡せば、流れ枯木が捨てある、定めてくきん木理細かにござる程に、

命なりけり小夜
の中山西行の
歌、上句年たけ
て又こゆべしと
思ひきやし

唐木でござるべいよの、さんやれ柚山人も出て見やれ、見るになづまぬ身は吉田、よし
だ通ればあれく、禿が招く、なぜに禿は出てまたぬ、待たぬも道理、こよに泊ると白須
賀、汐見坂橋本の、瀧名の橋に打寄する、波の荒井の遠干瀧、梢の風はざさんざと、ば
ま松より舞坂三里、砂の数々我や思へども、命なりけり小夜の中山是かとよ、捨てぬ憂
身のならひとて、さすがねがひも大井川、變る淵瀬ぞ頼みある、やがて敵を宇津の谷と、
聞くに心も清見寺、三保の入海田子の浦、打出で見れば眞白なる、雪の富士の根美しく、
山の小額黛の、際おく空や黒々と、片割月の指櫛の、粧ひ深きたしなみは、扱も見事
のお葛籠馬よ、こよは箱根の山坂なれば、初音が原の御座松に、暫しとどまれ時鳥、誰
も小磯の宿つづき、鳴立澤は名のみして、家立ちつづく門々に、出入る人も大磯の、宿
にぞつかせ給ひける

④きてう

見附箱崎船の中、寝られぬまよにつくくと、宿の首尾のみ案ずれば、我黒髪も白髪

となる、きてうにはだまさるよ、二枚五兩の小脇指、純子三本紅絹五匹、綿の代まで相
添へて、霜月なかばに贈れども、つひにそれとて見せもせず、今は二人が中にある

⑤弘徽殿

夜半に紛れて出で給ふ、あら痛はしや主上は、十善帝位を振捨てよ、召しもならはぬ草
鞋に、御足を傷ましめ、義懐惟成御供にて、戀路に迷ふ泡沫の、歸らぬ水の泡とのみ、消
えにし人の、佛を、夢にだにも見えばこそ、馴れし昔の手枕に、語り盡せし睦言の、耳
に止まり懐しや、忘れもやらぬ戀草の、露も思の亂れつよ、我身は元の身なれども、戀
しき人の無き故に、月やあらぬとかこちしも、實に理と思召し、御心細き折柄に、寡
鴉の浮かれ聲、我を訪ふかと思はれて、終夜ともす螢火の、消えぬ思のあればさて、蟲
さへ胸をや焦がすらん、實に在原の業平がきちうのながめに飛ぶ螢、雲の上まで往ぬ
べくは、秋風吹くと歎きしも、涙くらべて哀なり、いとどさへく身を知る雨の、晴る
る間もなき中空に、小田の蛙の鳴きそひて、道も定かに見えばこそ、涙そ道のしるべに

月やあらぬ伊
勢物語「月やあ
らぬ春や昔の春
ならぬ我身一つ
はもとの身にし
て」
きちう一躰中か
飛ぶ螢一伊勢物
語「行く螢雲の
上までいぬべく
は秋風吹くと雁
に告げこそ」

て、漸々行けば横雲も、はると東雲の、今は散り行く花の山、御寺に著かせたまひける

⑤ 丹前清玄

斯て清玄は戀の敵のよしなかを、なき者となしてのち、櫻の前を奪ひとり、我俗體になりかはり、世を樂々と送らんこと、只とる山の猿の肝、さてく果報は寢て待てと、今こそ思ひ知られたり、いざや祈りて其驗、現はし見せんと其よりも、やがて用意を咒詛の壇と申すは、せつしやうの法とて北に向つて行はる、鈴錫杖を振りならし、小鬘から大汗流らかいて、數珠も切れよや碎けよと、揉み立てく祈らるよ、されども驗のあらざれば、不動に向つて大聲あけ、さりとてはく、聞きわけもおりにないこんだによほい、夜となく晝となく無食素腹で祈れども、すつきりばつたり驗もなし、こりや又あんたる事だによ、ほいくほよほいくほ、一つの奇特を見せ給へと、數珠さらくと押し揉んで、供物の様こそおそろしけれ、乳木には珍らしき木瓜や枳殼白膠木の葉、芋殼交りの煙草の骨、扱は茶萸の折枝折りくべく、婁まじや大團扇にて扇ぎつけ、燒香にはこ

せつしやう一殺生か

せつしやうたる事

乳木一護摩の燒木なり乳ある木を用ふるを法とす

れやこの、雁の骨々粉にこづき、闍伽には牛の涎を盛り、燈明には井守の油、其外集めし蟲の數、一にけじ殿毛蟲どのに、鬚蜈蚣どの、藪の内の蛇、殿蜥蜴どの、ほりくくほり堀端の井守の數、繩でからけて引かたけ、火焰の中へ投げくべく、銅鑼鉢を打ちたよいて大音上げ、せめつけく祈らると、まにくまよに儘にならぬは此の不動、此にも承引なきならば、阿修羅迦留羅緊那羅王摩睺羅王、我等が地主の堅牢地神に申付け、風來不動と爲すべしと、取つては投げまたは引寄せ、抱きあげ、くるりくくくるりくく、くるりくくとひん廻し、平に頼むに御不動よ、いやでもをうでも、をうでもいやでも頼むによ、よやくほんに誠に曲もなやく、これでも驗のあらざれば、清玄今は憫れ果て、坊主冥利是までと、お不動抱いて其よりも、うろく涙で立つたりける、かの清玄がありさま、哀ともなかく申すばかりはなかりけり

⑥ 寛濶一休

元より此身は本來の、一物もなき假の世に、抖擻行脚とおもひ立ち、はじめてこよに紀

抖擻一頭陀修行のこと

花にも痛し一宗
因「眺むとて花
にも痛し首の
骨」

とたらくさん一
じだらくの意を
普陀落山にかけ
ていふ
だじやく一儒初

道とるる一道通
るか

の路なる、高野山にぞ入りたまふ、堂塔門院古事古跡、をかみ巡りて其後は、花にも痛し首の骨、あら面白や小空腹や、實に本来のくうの字は、食はぬ先より見證の、悟りの眼ちらくくと、目星の花も散りかよる、とある朽木に腰をかけ、疲をはらさせたまひける、斯りける處にとたらくさんの大山伏、無性ほう髭無人相、國土の紅を塗散らして、じまばんかうのけ鬘、太布の衣の尻括け、胴金卷の大鍋蔓、かんがうてつきの八角棒、だじやく無法に突散らし、一休和尚に立塞り、頭甲挫ぎの似せ口上、これ御房、修行は法師の業と聞く、修行成就致いての利徳はいかにと尋ねける、一休聞召し、夫れ三界の大導師、釋迦如來の古への檀特山に籠り居て、阿羅々仙人を師と頼み、三十成道とけ給ふ、愚僧なども修行をとけ、さて成佛の道とる、各の如くなる山伏達は、いつが峯入五月六月盆のころ、腰に法螺貝引つけて、金剛杖を突連れて、力に任せて押せさ、さ酒く、六盃飲だら豆腐に蒟蒻、煮しめに初茸、こつこ許にえいさあえんやく、役の行者の後をつぎ、大峯葛城釋迦が嶽、霞を潛り霧を分け、雲に起臥す兜巾も外れて、

かんふらん云々
一唐人唄の文句

ころりくとこけの行、跛ひきく、金峯山、木の根にとり付ホ、手繰つき、よぢらすどつこいよぢらす、腰を繰らす檜笠、一の硯裏壁谷、暗り峠探り坂、さぐりさぐつて頂上へ、登り詰めたる行者なり、方々のごとくなる新發意小僧の晝念佛、欠伸がちなる春の日の、眠り覺しの生炎、物の數にはあらねども、いで行くらべいたすべし、一休は聞召し、祈りて行の其驗見せ給へとありければ、いら高數珠を押揉んで、一祈こそいのつたれ、えい〜〜神の御前にやれ井戸掘れば、水は涌いで金がわく〜、ぞつくり〜ぞくぞくと、かんふらんはるたんにてんによながさきさくらんだばかりこていみんよ、これにて驗のなきならば、七の夕の星祭、鹿島三島諏訪熱田、高き御山は愛宕山大権現、鞍馬山には僧正坊、讚岐に金毘羅、飯綱の三郎、山々の大天狗、只今不思議を見せ給へと、責付け〜祈らるよ、あら不思議や晴れたる空より大雪降つて、山々谷々押並べて、皆白妙となりにけり、山伏勢ひかよつて、いかに〜と申しける、一休は御覽じて、こればかりの小雪をしつてうともしつてうべい、そんびくともそびくべい、尻から挺さをさつ

るこ一六根か

ふどうけー不道
化を不動にかく
さばへーさらば
上
けいわんでん
がう一慶庵口の
ごまかしや手づ
まといふ意

ち入れ、しやくりびきに引いてくりよ、えんや〜とな扇を颯と開きつよ、はらり〜
と扇ぎたまへば、さしもの大雪朝日に霜とぞ消えにける、山伏大きに怒りをなし、こよ
がくさりのいつはい、いれ續きの奇特を見せ給へと、ざんけ〜ろこ罪障をしめにはつ
だいこごどうじ、うななせこごどうじたよきだされるな、猶も奇特を見せ給へと、赤手の
こつほう摺削き〜、責にへめてぞへめたりける、斯る處に不動の尊體、花火の仕掛で
現はれ給ふ、それ見たかヲ、えいとな、一休拂子振上げて、汝ふどうけ汝ふどけか、あ
つかかよらかの喝と唱へ給へば、無首尾じまひで不動は目黒へお歸りさばへ、扱山賣か
な山賣かな、けよらけいわんで〜んがう、今時其手を喰べいか、さあしやつともゆつて見
ろう、山伏ほつきと我を折つて、只平蜘蛛と見えければ、一休すこし人柄で、こは現金なる
御慇懃、斯やうに申すも拙僧本意にあらねども、今日の釋迦の御弟子と思召し、見す見
す某を佛菩薩の化身とて、諸の虚言の八百つき散らし、此後必ず沙汰なしと、各左
右へぞ別れける

茶の湯

めいえん一名園
か
初昔一茶の名
後昔一同前
いのしる、大鷹、
鷹の爪一同前
ごくむじやう一
極無上

床の景色を見たまへば、小倉色紙を掛けられたり、棚の飾は何々ぞ、今様體の香道具
心を附けて飾らるよ、臺子の掛りしほらしく、釜は難波や蘆屋釜、たぎる其音はりんく
と、時ならぬ松蟲とのみ疑はれ、蘭麝の匂ひ薫じつよ、心ことばも及ばれず、其時か
らさき立出る、さらば茶の湯の樂みは、聖賢悟道の翫び、斯る情の色、道、分きて心
の引かるよは、君が名に寄るしがのてに、幾夜ぬれ〜後朝の、ここの葉草の露しほり、
扱又茶入は瀬戸の振袖、めいえんさま〜多けれど、七種のえんとぞ傳へしは、ちり
いは井うもじかはしたおくのやま、籠のあたひ琵琶や弾く、引手からなる宇治の茶の、
君が逢瀬の睦言を、いつの頃かや初昔、今日の日もはや暮れはてよ、明日又誰に譲り葉
の、移りかはるや後昔、古里慕ふ雁金の、いつか越路に歸らん、いのしる大鷹鷹の爪
年は経れども若森の、姿は猶もそよりの茶、外は別儀も嵐山、紅葉の錦色々に、えんが
すぐるよごくむじやう、君が手に寄る初鷹の、身寄の羽風にさそはれて、亂れそめにし

仇し身を、誰にか見せん君ならで、色をも香をも知る人と、讀みし心はおもしろや

⑨ 花 賣

面白の賤が仕業や、さんろならねど吹く笛も、ねよけに見ゆる若草の花、紫の藤袴、紫苑
龍膽地榆、おもひの色は岩躑躅、いはで焦れて山吹や、忍び來るくる風車、姿妙なる姫
百合に、いつか添寝の常夏や、名も床しきは美人草、顔よ花こそ一入に、色も匂ひも深
み草、おく白露の玉椿、身をせばめつと影宿す、月見草こそ優しけれ、實にやまことに
有明の、つれなく見えし別れより、二人寝る夜に悲しきは、己が翼は交せども、思ひ知
らずや心せで、まだき鳴音の鶏頭花、茅花まじりの葦草、君がすすみの手鞠の花、一二
三四とんとおちても名は立たじ、深き心の底意をば、人に洩すな水葵、池に澤瀉眞菰草、
我こそ野に咲く仇花よ、折らば疾く折れ散らぬ間に、怪しの賤の身ながらも、稀の御幸
にいざさらば、御酒を勧めてとりぐくに、叡慮を清しめたてまつる

⑩ 草 摺 引

せうしー笑止
白癩でんー雷電
にかく

どうでんすー兆
殿司にかく
ゆつてー言つて

和田の一門九十三騎を引具して、長者の許に打寄りて、國土の魚をいぢり食ひ、後腹やま
ずの大遊山、酔三日の酒盛は、ことにせうしで面白や、かよる處に障子の彼方に、金物
の音がかりとした、白癩でんの雲外れ、無間奈落の底ぬけて、鍋の鑄かけはおりにない
かと、間の障子をさらりと明れば、びんほあふれの荒五郎、大腹巻を著流し、五尺八寸
の大太刀、片岡風に指しこなし、なんにも喰はねど高楊枝、そらつ吹いたる有様は、さ
て持扱うたる客來なり、朝比奈が申すやう、兄祐成もましませば、些と座敷へお通りあ
れ、序に力を引見んと、つかくくと立寄り、草摺三枚引握んで、こりやどうでんすの掛
物よ、時致にんがりともせず、いやだ白衣で候御免あれ、朝比奈聞て、ゆつても彼奴は
若輩なり、下手にかよつてそよりをくれ、小歌節で遣つてくりよ、なんほ隠しても曾我
の五郎は知れる、心こん短うて脇差刀は長うて、色は眞赤らかいで聲高に、どつこい
どこい何處の田舎あお若衆ぞ、平に一座をたのむによ、此うへは是非に座敷へ出さんと、
えいやつと引いた、些つとも更に働かず、日本無雙の朝比奈が、二王に勝る力瘤、左右

ぼどり兒一「ぼ
とり」は「ぼつと
りもの」などい
ふに同じく愛ら
しき意

の腕首節だつて、胸に生ふるいかり毛は、碁盤の面に銅の、針摺ならべたる如くなり、時致莞爾と打笑ひ、宇佐美久須美河津にて、大ぢからと呼ばれたる、河津親父が懐子、箱根別當のほとり兒、上げたる手本が百六つ、小謠合して十六番、されども御房の御恩にきず、すつぺりかへしてなんにもなし、跡に残る物としては、みづこくに千人力、小粒に砕いて財布に入れ、舊した帯の物蔭に、がんぢ搦みからけつけ、そつとたしなみ候ぞや、三枚の草摺の早緒が切れて、水呑むか、茶の水まるれ水まるれ、有馬殿より貰つたる蠟燭箱を踏んぬいで、三里せつこつ摺剝くか、二つに一つは定のもの、びつくともせず居たりけり、朝比奈其時身をかへ、ぎよとうがとうのふて狂ひ、力紙をがんぢと噛めば、胴の筋が額にあがり、任脈筋が拳に下り、荒れたる骨は巖のごとし、きうてうの藤葛、松を搦んで木枯に揉まれて立てるが如くなり、朝比奈象の怒りをなせば、五郎は虎の氣をはつて、互ひにえいやと引く力に、三枚の草摺きれて、左右へばつとぞ退いたりける、いやえいぢよきく、さるに依て今の世に、靈佛靈社のゑん馬にか

け、扇うちのは抜折羅繪にも、腕押首引草摺引、腕の骨くびの骨、どれこれこれく書いてお見しやれ、びりこくたいしばかたわう、鬼を茶の子の金平だんべい、ほよをつかない勇力やと、今に残りし力瘤

⑩ 道成寺

作りし罪も消えぬべし、鐘の供養に参らん、みづからと申すは、そも泊り定めぬ忍び妻、紀の路の奥に住馴れし、人の心を慰むる、白拍子の鼓草、なる瀧川の流の身、道成寺の御てらには、鐘の供養のあるよしを、皆人毎にゆふまぐれ、月は程なく入汐の、さして我身の罪科も、報はんことの嵐ふく、三室の山の紅葉ばの、色に染めにしあだ衣の、薄からざりしさんしうの、罪恐ろしくことに又、罪業深き川竹の、一夜ばかりの手枕に、人の罪をも身に受けて、永き闇路や黒髪、の、亂心や結ほれて、煙り満ち來る小松原、急ぐ心はまだ暮れぬ、日高の寺にぞ著きたまふ

暮れぬ云々一暮
れずして日高き
中にと續けたり

松の葉 第五卷

古今百首なげぶし

附作者付

○さるおんかた 七首

松の葉ごしの磯邊の月は千歳經るともかはるまい
 さしも知らじな斯くとは君につよむ思ひの燃ゆれども
 思ひ亂れて蘆屋のさとに海人の焼く火か飛ぶほたる
 立つる錦木かひなく朽ちて添はで年ふる身ぞつらき
 我は菖蒲のねにこそ泣かめ引くな袂のつゆけきに
 海人の焼くなる藻しほのけぶり人の立居のしほとなる
 霰ふるらし外山のかつら色に見ゆるをいかにせん

○そ う 十首

ねー根、音
しはー鹽、機會

餘所になしても訪へかし人の月は誰ゆる袖にすむ

月を見ばやとちぎりし人も今宵そでをやしほるらん

訪はど訪へかしこの夕暮を明日の命も知らぬ間に

更けてきぬたのおとより聞けば月に落ちくるわがなみだ

せめてやどれよ小簾洩る月も日ごろもとめし憂き涙

わたりくらべて世の中見れば阿波の鳴戸に波もなし

こゝろふゝの世の中なれや花の臺のつゆのいろ

紅葉こがるゝ色とは聞けど末の落葉をたれか知る

松のしぐれに夢うちさめて餘所のおはれが思はるよ

涙くらべんやまほとよぎす我もうき世のつらければ

○けいせい 十四首

廓はなれてつみなき月をいつか都のそらに見ん

廓云々「罪な
くて配所の月を
見る」の古語に
據る

わたりくらべ云
云「古歌、世の
中を渡りくらべ
て今ぞ知る阿波
の鳴門は波風も
なし」

憂しやこの身は親はらからの爲にしづみし戀の淵
 なみだならでは哀を訪はじ深き思ひの袖のいろ
 宵の口ぜつの白けたあとを鳴いて通るやほとよぎす
 君はつらくと恨みはせまじこころからなる身の憂さを
 消えぬこころの半は雲にかよふ嵐をよすがにて
 もはや命も絶えなば絶えよ住めば恨めしおなじ世に
 人目忍べばその名もいはで思ふあたりのことぞ聞く
 程は雲井にへだつるとてもこころ變るないつまでも
 のこる形見のかどみに移る月のさそひしおもかけは
 恨みながらもまた打向ふ月は由縁か憂き人の
 いつの夕に袖ふりわかれもはや浅茅も背にあまる
 かよふ心は雲井のよその中にすぎゆく月日かな

程は云々一拾遺
 「忘るなよ程は
 雲井になりぬと
 も空行く月のめ
 ぐりあふまで」

一つ枕にしづみしなかも憂きはわかれの袖の露
 ○をとこ 二十六首

花のあけほの夕の秋もくらべくるしきわが心
 いかにか隔てし覺束なさぞしめて寝る夜も飽かぬ身の
 蛙なくさへ恨のあるにまして寢覺のほとよぎす
 袖のみなどの寄る瀬を知らば嬉しかるべき涙川
 あはで寝る夜は袖ひぢ勝る夢は枕のいとまなや
 ゆくも歸るも忍ぶのみだれかぎり知られぬ我思ひ
 かよひ馴れにし朱雀の野邊の露はものかはわが涙
 うちや打たれし枕の淵も今は幾瀬の飛鳥川
 稀に逢ふ夜は人目をしのび語りつくさん我おもひ
 雨の降る夜はひとしほゆかしいつにおろかはなければども

袖ひぢー袖がぬ
 れ
 ゆくも云々一伊
 勢物語、「春日野
 の若紫のすり衣
 しのぶの亂れ限
 りしられず」

問はゞ問ふは
の術か

なまぜたまじ
の訛

ありとありと
の意

幾世ふるとも洩らさぬ水の下にかよふや岩根ぶみ
 別れぬる夜のつらさを問はゞ後のあしたの文ばかり
 夕べくのその移り香は君が袂の由縁とも
 なまぜ生中馴れずばかほど物は思はじさりとては
 歸る野みちの浅茅にやどる露にそへたる我なみだ
 君に逢ふ夜は埴生のこやも玉の臺にまさるもの
 思ひ重ねてくるしや今はあはで命もたえなまし
 月のあけほのこの村雨に今は忘れぬほとよぎす
 露の玉の緒かぎりはありと移るおもかけ變るなよ
 野邊に蛙のなく聲きけばありし其夜がおもはるよ
 斯くと知らさで消え行くならばつらき報のありやせん
 磯の松が根波うちかけて立つ名わりなき戀のふち

今はみだれて憂き山鳥の長きつらさの思はるよ
 扱も寝られぬあかつきうしや過ぎし今宵のしかも今
 色にしづみて消え行く身なら引きは返さじすて小舟
 幾重かさなる山川なりとこころへだつな旅衣

○をんな 十九首

逢はぬつらさを焦れしよりは逢うて別るようき涙
 衛士のたく火は夜こそ燃ゆれ胸にたく火の絶えやらぬ
 こころ細くも燈火ふけて待つはいのちの消えもせず
 今はたよりの文さへ絶えつ何にいのちは掛けてまし
 いとど淋しき寢覺の床になみだなそへそ杜鵑
 幾夜ねざめの涙のふち瀬波のうねくうき枕
 残る移り香まくらに添ひていとどわすれぬ閨の中

身をば―「忘ら
るる身をば思は
ず誓ひてし人の
命のをしくもあ
るかた」以下三
首いづれも百人
一首に據れり

我^{われ}がおもひはあの浮雲^{うきぐも}よいつこ行方^{ゆくへ}ぞ定めなき
人目^{ひとめ}忍ぶの草葉^{くさば}にむすぶ露^{つゆ}の玉蟲^{たまむし}ねにぞ鳴く
ものや思ふと問ふ人^{ひと}あらばせめて語りや慰まん
身をば何せん誓ひし人の命^{いのち}のみこそ惜しまるれ
絶えてしなくばなかく人も身をも恨みじ我こよろ
忍ぶ心を色には出さじ物やおもふと問ふばかり
思ひあまりて見えしゆめよ覺めてなみだの外ぞなき
まだき我名の立ちたるとても思ひそめしを一筋に
聲にあらはれ鳴く蟲よりもいはで螢の身をこがす
幾夜しをれて貴船の川も袖のなみだに玉ぞ散る
人の満干のこよろも知らで底ひなけなる我涙
あだな契をむすびて今は我身ひとつの憂き思ひ

○はうし 二十四首

雪の外山の曙^{あけぼの}つらや萱^{かや}が軒端^{のきば}のとりの聲
今は身にしる愛別離^{あいべつり}苦の憂さを思へばなかくに
せめて閑洩^{ひやし}る月かけなりと暫しまくらにとまれかし
逢はで歸ればこよろの闇よ月は牙ゆれど路みえず
花に置く露小ささのあられこほれ易きは我なみだ
思ひつづけて涙の時雨定めなきこそ浮世なれ
月は人目の關路もなしや西にながるよ夜半の空
雲の旗手のそなたを戀ひて住めば住む身ぞあぢきなき
難波入江の身は捨小舟岸にはなれて便りなや
來ぬ夜あまたの山はとよぎす降るは村雨わかなみだ
うき身浮草しづみもはてぬ底のこよろを月や知る

思ひ餘りて折り焚く柴の煙さびしき夕まぐれ

これもさすがにあはれを添ふる小田の蛙のくれの聲

春よ垣根の雪にはあらで消えぬ限りの下おもひ

泣いて寝がほの半はくもに見えてこほるよ袖の月

忍ぶ袂のいろ見えそめてこころにも似ぬ我なみだ

過ぐる月日は我のみ知りてかひもなき身を打歎く

限りある身にさりとは人の遠き行方をおもへとや

海人のすて船よる邊もしらで獨りなみだに伏ししづむ

さらば面影はなれもやらで人のつらさにます鏡

あふささるさにみだれて今朝も尾花がくれに立ちとまる

宇治の橋守あはれと人はいはで年経る袖のいろ

扇ならでも身は舊るさるよ秋のながめよつゆばかり

逢ふも別もみないとによる涙つらぬけ形見にも

古今百首なげぶし終二和蘇歌式心掛

歌音聲竝三味線彈方心得

一歌の事音聲ゆたかにして始終たるまぬやうにうたふこと第一なり、當風といひて世上に弾きうたふをきけば、三味線を君として歌を臣とおほえしやうに聞えあしきとかや、歌をもつはらとし鳴らし物はまことのあひしらひ、本手組のうたひかたと長歌端歌などの弾きうたひ各別なり、まづ三味線の調子をたいせつにあはせてのうへ歌ひはじむる事肝要にして、序破急のくらゐうきしづみ乙かんげやけからぬやうに心をつくべし、また連弾のとき歌ひとつのうち二上り三下りなどの調子かはる事あるは、一しほ相手の調子取やうあひかたにならひある事也 口傳

一なけぶしの事元來江戸ろうさいの節をなほして歌ひきたるとかや、音聲しめやかに調子はひくきかたよし、その分際に應ぜざる調子にては意味うたひがたし、いにしへ大阪屋河内風といひてうたひしは、上下の句さらりと三味線あひしらひもみじかく、うたのとまりやんと歌ひしなり、今やうは節のたけゆるやかに、鳴らし物相の手撥かすもすく

なく、歌のとまりは節にていひすて、ゆうくときこえ侍る、歌はつれてうたふもよし三味線は一ちやうにかざるべきか、近比歌の下の句三字めの節をさけてうたふ事だてにてよろし、此歌の曲節急ならず序破にとどまりてしづかなるかたなり、よりてかみの句つぎの七もじのはじめ二字またはかへしのはじめ二字をよせてうたふべし、唱歌にはえありておもしろき事也、中比より二上りの調子をもちひて此ふしをうたへる事もあり、これには本調子とつれびきよし、ふしにはなはだ甲乙あり、このゆゑに口傳おほく言ひのべがたし、ある人なけぶしは女のもてあそびものなりといひたるも、優美なるさまをよくわきまへたればさる事ぞかし

往時藝にあそべる人おのくこのむ所あり、おくれたるすぢをかくし、學び得たるかたか
どをのみさかしがり言ふめるなかに、これが音の歌に和し、あはれもやる方なきにぞ、何
事もこと盡ぬべきを、幼よりならばさざりし恨も今更なり、かのらんごやなどの遠きこ
そ至らざらめ、なけぶしの本末かいなでて心ゆくばかりになんといへるを、此書をあめる
人打笑ひて、それこそ難きわざなれ、朝鍛暮鍊のうへならで一曲は奏しがたし、なけぶし
は手のかぎりすくなきやうなれど、今古の興廢なくことにたやすからずと、さらば我如學
ぶべきにあらず、そもくくりうきうひんだの露のはじめより、なけぶしのみさをなるは松
樹になすらへ、そのほか松葉の風聲ちり盡さざること見つべし、花落雲閑なるゆふべ、雨
よきほどの窓のうち、あけほのけざやかなる雪をあつめて、少年常に習はざらめや

跋

往時藝にあそべる人おのくこのむ所あり、おくれたるすぢをかくし、學び得たるかたか
どをのみさかしがり言ふめるなかに、これが音の歌に和し、あはれもやる方なきにぞ、何
事もこと盡ぬべきを、幼よりならばさざりし恨も今更なり、かのらんごやなどの遠きこ
そ至らざらめ、なけぶしの本末かいなでて心ゆくばかりになんといへるを、此書をあめる
人打笑ひて、それこそ難きわざなれ、朝鍛暮鍊のうへならで一曲は奏しがたし、なけぶし
は手のかぎりすくなきやうなれど、今古の興廢なくことにたやすからずと、さらば我如學
ぶべきにあらず、そもくくりうきうひんだの露のはじめより、なけぶしのみさをなるは松
樹になすらへ、そのほか松葉の風聲ちり盡さざること見つべし、花落雲閑なるゆふべ、雨
よきほどの窓のうち、あけほのけざやかなる雪をあつめて、少年常に習はざらめや

元禄十六年

共聞風集

御入林の落葉

松の落葉 首卷 中興當流あづま淨留利

目録

一	秋の色	<small>作者京</small>	半大夫ふし	二	わかれの色	<small>同作者</small>	同	ふし
三	ひとりね	<small>同人</small>	同	四	十六夜	<small>同人</small>	同	ふし
五	助六後日	<small>同人</small>	同	六	京わらんべ	<small>同人</small>	同	ふし
七	かつらきつほねおり	<small>同人</small>	同	八	放下僧	<small>同人</small>	同	ふし
九	露のまへ舟路	<small>同人</small>	同	十	たるゐおせん	<small>同人</small>	同	ふし
十一	おせん物ぐるひ	<small>同人</small>	同	十二	上るり御前やりをどり	<small>同人</small>	同	ふし
十三	會和會我	<small>同人</small>	同	十四	としま八けい	<small>同人</small>	同	ふし
十五	興作二代目	<small>同人</small>	同	十六	會我掛物揃	<small>同人</small>	同	ふし
十七	櫻姫ごばん人形	<small>同人</small>	同	十八	平安城草花つくし	<small>同人</small>	同	ふし

十九 みさをの前忍の段 同 ふ し 二十 櫻づくしごはん藝 同 ふ し

十五 小うたの部

十六 會井御前 同 ふ し

十三 松風

作者京くらはし 二四 わかれのかね 同 ふ し 作

三 一 うば玉

同 ふ し 作 四 忍ぶ戀 同 ふ し 作

其 酒のまへ供儀

同 ふ し 十 なるまき入 同 ふ し

十 地へまの封はまり

同 ふ し 八 対す能 同 ふ し

五 世六新日

同 ふ し 六 京はよふへ 同 ふ し

三 ひとりば

同 ふ し 四 十六弁 同 ふ し

一 舟の舟

同 ふ し 二 けせ共の舟 同 ふ し

目録

分の落葉 首登 中興常楽

① 秋の色

あづま半太夫ぶし

いつもきく籠の里とおもへども、昨日にかはる風のおと、身にしむことのおぢきなく野末の蟲のすだくなる、千草の花とあだくらべ、涙の露はしぐれつよ、空行く月のかげうとく、いとど思ひに浮き沈む、かりねの夢もむすばれず、砧の音にさよふくる、時しとて秋を告げくるかりがねの、よすがなきこそかこたれて、あやなく残る袖の香に、しばし忘るようさつらさ、萱が軒端もやよさむく、籬の菊もみだれ亂れておく露霜の、猶ものさびし秋の色

② わかれの色

武江半太夫ぶし

けにわりなきは色の道、迷ふは人の習ひかや、君が仰せのつらからば、只一筋につらからで、情のまじるいつはりと思へば猶もます色の、切るに切られぬ愛執の、戀慕の暗のくらがりに、火宅を出てやうくに、誰まつばらの橋過ぎて、河原おもてを見わたせば、けふは嵐もはけしくて、いとど身にしむ戀風や、君がおもかけ身にしみて、そなたの空

せいがんじー清
閑寺なり、瀧點
は原本のまゝ
名にふれし一
高く知れ渡りし
の意
ねもりーねむり
に同じ

も打過ぎぬ、名も清水にさし懸り、歌の中山せいがんじ、爰はいつくぞ小野の宿、きけば昔の名にふれし、かの深草の少將の、身をしる雨もよそならず、わが身のうへと怨めしく、けふの名残のきぬぐは、なかくつらき別路に、月待ちがほのなつかしく、只あこがるよ思ひねに、うたよねもりの夢さめて、とあるみ寺につき給ふ

③ひとりね

あづま半太夫ぶし

咲きそめしより千本の花のおもかけを、見そめにしより我心、空行く雲のきえぐと、消ゆるばかりの思ひねに、床の山かぜ夢たえて、枕にかよる月見れば、千々に物こそかなしきに、身はかけろふと衰へて、あるか無きかに世の中の、身をしる雨に朽ちはつる、かわくまもなき袖の露、いはぬばかりぞ浪速なる、あしの篠屋の下にたぐ、けぶり物かは胸の火の、つよむとすれど色に出て、ひとりこちたき寝屋の内

④十六夜

同 半太夫ぶし

雲もなき秋の今宵のいざよひに、見しよの人の噂せん、まづもよしきの細殿に、さやけ

したしーしなし
の術か

き月のうづだかく、歌の題とや是ならし、扱我戀を祈るてふ、思ひかけすばみ社の、月にわが身をかへり見て、憂きを問ふやと人里の、萱が軒端の竹垣よ、すましきりたる心から、曇れ浮世も月も見はてし墨の衣の袖わびし、やよはしにもあまりぬる琴の一曲玉だれの、ほのかに見えし月かけや、十二や三の袖つめて、粹なしたしの目に立て、舞子なりふり束の間と、月を便りにかよふ島原、しのぶれど松のくらるや梅の庵、もつた揚屋のそのけしき、下戸ならぬこそよねはよき、月に疎まれお迎ひと、かぶろかやしのあとなりに、おろせくの小提灯、お歸りといふ聲たかく、野邊にすだくる蟲のねと、わが身もともに泣きあかす、身揚くらきまぶぐるひ、あだめにかくる月かけや、しばしは憂さをぞ語りける

⑤助六後日

江戸半太夫ぶし

とかく佛の教には、いかなるやほも嫌ひなく、一つはちすの約束も、せめて力にたまほこの涙かすそふ道芝の、露と此身をあだくらべ、あだに思ひしあだし野の、煙かくま

になく烏からす、今のうき身のすて所、あすは巷ちまたにさらす名の、ほんにわたしもこなさんも、千代を八千代と契りしに、今は引きかへさきの世を、せめてふたりがあてどころ、定めなき世やいにしへは、人の心の中ながら、それと推して書く文に、あるひは髪切血をしほり、涙に物をいはすれば、あまりかはらぬ人心、又こなさんもその通り、ことば咎めぬさきぐりに、逢へば是非なくわびことの、身はふし沈む涙川、大方粹おほかたするなわれぐが、今かくなるはさりとては、粹が身をもつためしかや、此年月の間には、あらゆる夢の數あれど、かくなる事は夢にさへ、せめて此世に身を二つ、おきどころなきわれぐが、まして冥途を見ずしらず、どうしたわけな里ぢややら、どうやらかうやら知らねども、是非にたふとい所ぢやと、きけば此身もたのもしや、あよさりとては今までは、ふたりが中に此娑婆を、わがまよなりと思ふ事、誠一夜もありもせず、かうした切なきあひだから、命がけなる戀草を、根引になるとはや枯るよ、跡にのこりし母様の、いとど歎きは老の身の、不孝のうへの不孝とは、知りつと沈む戀のふち、浮めてたべやみ佛と、地

こなひーこなたの設か

にふし歎くも道理なり、けにわれとても二人なき、こなひの親のあはれみと冥加に付て、このごとくたよすむ方もあらばこそ、罪をゆるさせ給ふべし、あれぐあれぐ、夜明のかねの聲、里を行きかふ人の音、あの鐘までもわれぐが、今は別れと手をとりにて、道のほとりの地藏堂、露のうき身の置きどころ

⑥京わらんべ

あづま半太夫し

まつ正月は門に立つとよ松竹の、かけに羽根つく手鞠とる、ぶりぐぎつちよを手にふれて、玉を打出の破魔弓や、七草なづなよとんどやおほん骨牌寶引如月や、初午まるりのみやけとて、鈴やつほく風車、彌生になれば雞合とりぐで、ひよなの殿のいもせごと、二八あまりは大人びて、色にいづるや櫻いろ、梅や椿の花よりも、卯月のけふのみ祭に、なごりをしきはせんだん團子え、たんご、たんごぐ、エゑ端午の節句會、よもぎあやめに胃を軒端にかざらせ、うちあひうちつれ竹馬の、隙ゆく駒の足はやみ、はや祇園會の夕すゞみ、螢こいとて水あそび、袂すゞしき夏衣、ひと夜あくれば初秋の、

きそん一年若く
快活なるをいふ

おほたけ一御火
焚

盆のをどりは伊勢踊、きそん十七とらの歳、まるる薬師は寅薬師、さつさとふりやれ、さ
つさふれく、振袖の、そめし模様もやうの月見草、小袿こづまにぬひの菊きくがさね、さて初冬はつふゆやかみな
月、つくや亥みのこの餅花もちばなも、小春こはるの名にやにほふらん、霜月しもづきはうぶ神のおほたけ、たけ
たけ師走しはすには乙子おとこの餅、ついたちや雪ゆきころばかし雪ゆきまるめ、四季きせきをりく、のたはぶれは、
鬼おにのこぬまと歌うたひしも、思へばく、此かみの、昔むかしなりけり今の世に、千團子せんだんごの大明神、
つきすかはらすわらんべの、福徳ふくとく祈いのるまもり神とて、おしなめ歩あゆみをはこびけり

⑦ かつらぎつばねおり

あづま半太夫あづまはんたふぶし

さてもかつらぎは元もとより勤つとめの浅あさましき、うちよりもみはし近ちかき局つぼねにおり、あるがなき
かの憂うれきすまひ、涙なみだや袖そでをしほらん、とは思へども君きみゆると、思おもひさだめし心こころには、
うきもつらきも忘れわすれぐさ、つばねの中なかもすみよしの、岸しの姫松ひめまついく代よまで、かく怨うらめし
き川竹かかわたけの、ふしては夢ゆめに其人そのひとを、見みまくほしさようつよにも、忘わすればこそとひたすら
に、かわく間まもなき袂たもとかな、さるによつて浮世うきよの人ひとかつらぎこそは道みちしゆんが、はからひ

あるが―あるか
の行か

しとう―したふ
(墓)か

あらがねの―土
の枕詞
つげの櫛―黄
楊、告げ

きつれ川―喜連
川に來速きたすみをかく
うぢへ―氏家、
下野しもにあ

故ゆゑに思おもはずも、局つぼねにおりしと夕ゆふぐれの、くるやらく、大じんどののは、馬うまもいなよくつわ
も鳴なるに、門立かどたちしけきをささ原、戀風こいかぜしとうにかつらぎは、つやく、膝ひざくけしきなし、と
にもかくにもかつらぎは、情なさけの深ふかき女むすめらうと、慕したはぬ者ものこそなかりけれ

⑧ 放下僧道行

武江半太夫ぶかうはんたふぶし

よしやつよまじ袖そでの露つゆ、かゝる浮世うきよにながらへて、なになか／＼にみつ瀬川、おなじ
わたりにともなはど、今の恨うらみもあらがねの、土つちの車の我われながら、思おもひをいつかつけの櫛、
とりも見みなくに黒髪くろかみの、みだれ心こころもとけやらぬ、姿すがたは人目ひとめはつかしの、もり田のりの里さとを夜
にまぎれ、忍しのび出いればほのぐらき、月のくまだら影かげうつる、川井かわいの宿しゆくは是これかとよ、その
かみ川かみがわはいさぎよく、すめども下したは濁にごる瀬せに、何なにをたよりの根ねなし草、浮ういつ沈しづんづし
づんづ浮ういつ、波なみのうねく、ゆられく、てきつれ川、水みづのうたかたあはれけに、消きえぬ
命いのちぞうちへの里、おちき歎なげきにかろき身みは、娑婆しあはにあく津つの舟ふね出して、願ねがひのまよに彼か
の岸しへ、いつか到いたらん白澤しらばはや、角つのぐむ蘆あしのほどもなく、枯葉かれはに風かぜのそよく、そよと、秋

きねがならはし
神ごころ―神
はきねがならは
し―といふ語を
用ふ、きねは福
宜に同じ
もろこしの云々
―正徹―なか
くに見ぬ唐土
の鳥もなし桐の
葉もとせ林の夜
の月

を知らずおとづれの、誰が玉章をかけてくる初雁聲におどろきて、解きわけ衣洗ひほ
す 賤がつづれの竿づくみ 夜半に砧をうつ宮、きねがならはし神ごころ、やはらく
光あきらかに、まことを照らしたまへやと、祝詞をあぐるさつくの、音も雀の宮とか
や 誓もかたき石橋と、かけてぞ頼むまつり事、すなほなりせばもろこしの、見ぬ世の鳥
も羽をとめん、桐の花さくこがね井や、玉のつるべの水けぶり、室の八島もよそならず、
くもとのほるや西のそら、夕日小山のはに入れば、けふも限りの鐘のねに、あすは元よ
り白玉の、やどらん末はまよ田の里、荒れてやさしき八重むぐら、小菅蓬生かるかやも、
亂れあひたる能毛の宮、此子が祈誓菅の根の、長くもがなと玉の緒を、かなたこなたへ
よりかくる、二つのわくをくり橋や、くりかへし返しても、昔は今にならばこそ、去つ
てかへらぬ我つまの、日数は早く杉戸の宿の、軒をならぶる家々に、たれかは宿をかす
かべと、いや跡に見なして越谷や、只何事もふりすてと、君にさうかたたのもしく、中
島根の井櫻田を、たどりく行くほどに千住の川にぞつき給ふ

かすかべ―柏壁
さうか―草加、
添ふか

⑩露の前舟路

同 半太夫ぶし

言の葉を云々―
戀の字を分折し
てしへり

蘇迷盧―須彌山

ないそなういそ
―鳴くなく―

言の葉を糸で結びてした心、戀といふ字によみならひ、うらみ妬みもつれなさも、あだ
も情もいつはりも、このむすび目のとけてより、いとしくしと見もわかぬ、夢もうつと
ももと一つ、二つとはなき道すぢも、行くを忍路かへるをば、わかれちと又よびかへて、
あふさきるさに物思ふ、思ひのけぶり横折れて、蘇迷盧よりもなほ高き、わがたらちを
の身にかより、行きてかへらぬ四方つ國、よすがもいざや五十皿子の、住みこし里をう
かれ出で、涙の瀧も高輪の、おちて碎けてちりぐに、消えも失せなでうたかたの、あは
れつたなやいやはかな、ないそなういそ磯邊の千鳥、こよひはじめて立つ波の、波のた
ちるも何故ぞ、かりなる宿に心とめずは浮世もあらじ、人をもしたはじ、松風にきりの
絶間の安房上總、船は千艘入らうと萬艘入らうとまよよさ、あらくあすの命もしらぬ
身に、三日さき見つ富士の雪、鹿子斑のよそほひも、誰にか見せんあまさがり、鄙にみ
ゆきもあらばこそ、とはいひながらみ車を、かけて頼むやうし町の、うさにはあらぬ宮

雨に上る田箬一
古今、實に雨に
より田箬の島を
今日ゆけば名に
はかくれぬもの
にぞありける

所 つまの行末安穩に、かたきを易く打ちおふせ。再び三田のみづがきと、又の歩みを
祈誓して、ふりあふのけば入船の、目あてに立つるみあかしの、上のお寺のさいかいし、
しやぎりくづでんどよ、打つや太鼓のねのよさよ、かはす枕のさはりとて、ふたりぬ
る夜はいとひしに、つらさかへつて有難や、よしあし同じ草なれば、なにはも爰ぞ雨に
よる田箬の島をうつされて、あづまながらも名はつく田、萱が軒端も住吉の、藤のたれ
葉をつたふ水、流れの末は深川の、潮のよどみはくるくと、巴にめぐるみつ股や、のう
のうあれく、あれこそは月の入るさをまつち山、神は大聖歡喜天、いだき合うたる尊
體は、妹背むすびの御方便、けに頼もしやたのもしや、かほど濁れる浮世にも、すめばす
まるとすみだ川、早瀬にあかぬ都鳥、いざこと問はん言の葉を、結びなほせば心の糸、戀
の港につき給ふ

①たるるのおせん

あづま半太夫ぶし

おせん親子の人々は、人にそれとは見えじがため、ともをもつれず只二人、ひそかに旅

きたかた一北
方、美濃にあり
ぐぜい川一株瀬
川を弘誓にかけ
たり

あはて一阿波
手、逢はて

なるみ一成る
身、鳴海
ちりう一池鯉
鮒、散り
しらす一知ら
ず、白須賀
かいがん一涯岸

の用意ある、心の内こそあはれなれ、雞籠の山に響く鐘はや、曉をもよほせば、涙たる
るの宿を出で、東にむかへばほのくくと、夜はあか坂の朝日影、青野が原にかよやけば、
露はさながら瑠璃の玉、光をますに異ならず、たれもみつやにきたかたや、老を養ふ瀧
水の、あるとは聞けどはかなくも、さらぬ別れは怨めしや、名もたのもしきぐぜい川、我
我よりもなき人を、渡してたばせ給へやと、深く祈誓をすのまた川、梢の花に鶯の、春
雨厭ふか笠縫の、里につとくやつよじがさき、色にぞ出づる袖のつゆ、きよし人には寐覺
にも、夢にも更にあはでの森、一つはらすの蓮臺へ、えにし朽ちずば稻葉山、思ひのけ
ぶり晴れてこそ、心清須の川風は、さもひやよかに身にしめど、その名ばかりは熱田の
宮、あつさを凌ぐ笠寺や、何となるみの捨小舟、よるべいつくにあり松の、花もちりう
のみたらしに、波の鼓やうたう坂、弓はなけれど矢矧とは、妹背ぞ只にをかざきや、御油
赤坂のながれの君、よしや吉田の人心、おもてうらあるふた川と、皆しらすかの峠より、
おきをはるかに眺むれば、渺々として際もなし、かいがんそことも不知火の、筑紫の海に

見つけのがう
見附の國府か

みほが崎—三
保、見よ
み島—見、三島
ふたご—巖、二
干
色、いつしき—一

やつどくらん、どうど打つてはさつと引く、潮の満干の烈しくて、さしでの岩をあら井
の里、瀧松がえのわかみどり、いつも常磐の色ふかく、池田の宿をみかの原、わきて流
ると泉川、いつかかたきを見つけのがう、風もをさまる袋井の、長き繩手をたどくと、
たどりかねたる世の中に、何かたのみを掛川や、夢も結ばぬ假枕、さよの中山なかく
に、かく越ゆべしと思ひきや、名にのみかねてきく川の、色香にめでて立ちとまる、ゆ
きよの人は大井川、かく消えわびし露の身は、はやく草葉に岡部の宿、とは思へど
も、ましてしばし怨みの一太刀うつの山、よもとのかけはあらねども、鞠子の宿にさしか
かり、手越安部川打ちわたり、はるくこよに見潟、そらにも關の有るならば、月
をとどめてみほが崎、袖師が瀧の沖つ波、薩埵山より見わたせば、由井蒲原に打ちつ
づき、雲にそびゆる富士の山、雪の内より立つけぶり、うへなき思ひにこがるよは、けに
うき島が原なれや、そよくそよと吹く風に、重ねの衣をきせ川の宿打過ぎて程もなく、
あけてみ島や箱根山、そのふたご山是かとよ、畑小田原も跡に見て、いつしき佐川こえ

しほみ—鹽海

まつち山夕越え
くれば—萬葉三
「まつち山夕こ
えゆきて庵崎の
隅田川原にひと
りかもねん」
荒れにし後は—
良經「軒は荒れ
て月もる不破の
板びさし荒れに
し後は只秋の
風」
谷中—矢にかけ
ていふ

行けば、梅澤しほみ、相摸の國府、小磯大磯平塚や、引地藤澤戸塚の宿、日敷かさねて
行く程が谷、願ひもやがてかな川の宿にぞつかせ給ひける、とにもかくにもかの親子の
人の心のうち、あはれとも中々申すばかりはなかりけり

⑤おせんものぐるひ

江戸半太夫ふし

これは扱おきおせんは、いつしか狂女となる神の、とどろくと中空に、立ちゐる雲の跡
もなく、浮きて漂ふばかりにて、そこともいさや白露の、おきまどふ身はあちが原、ま
だき色づくわが袖に、たれゆる月は宿るぞと、よそになしても問はれなば、深きなけき
も淺草の、葉末にむすぶ白玉の、光さやかにすみだ川、たえず流るゝ水の泡、うたかた
人はつよがなく、ありやなしやと聲たてよ、問へどいはねのまつち山、夕越えくれば庵
崎の、いほりかたぶく板びさし、荒れにし後は風あてよ、ふわふわの關ならば、鳥
の空音もはかるべし、許さぬものは逢坂の、人目の關を忍ぶが岡、よし不忍の池の面、け
にいさぎよき清水村、弓張月やいるさの山、谷中の木立しけりあひ、花のさかりはみ吉

うはき—上着、
淨氣

假の宿心とめそ
—新古今、遊女
妙「世を厭ふ人
とし聞けば假の
宿に心とむなと
思ふばかりぞ」

野の、吉野よりなほ上野山、のほれば下る車坂、かなたこなたを見渡せば、群集の貴賤
とりぐに、だてを下谷の里とかや、おも白無垢を引きちがへ、うはきくは色々の、
模様もよしやよしな染くゆる思ひの數々を、いはで只にや山がすみの間よりほのかに
も、見てし人には逢ひ足らぬ、淺黄縮緬茶縮緬、うこん紅樺薄鼠、色ある人に見せばやな、
雄島の蟹のぬれ衣、藻鹽かく袖一つまへ、縹子や唐綾白緞子、縫摺箔の幅廣を、ゆかりの
色や、紫の、ちりめんでほそ結びさけ、たれ白菅の加賀笠を、まへふかぐときなしつ
つ、なまめききつる折からに、花のこかけも假の宿、心とめそと吹く嵐、蘭麝のかをり
さそひ来て、さりし夕べの手枕を、いとぞ思ひぞ出さるよ、我も洩らすな洩らさじと、
移香ふかくかさねたる、つまの行くへも白糸の、みだれ心や狂ふらん

⑤ 上るり御せんやりをどり

さみにいさんて
ひとをどり
ふりやれおふりやれ大鳥毛の振袖、ちとくちとちを召されさ、
しつかとせ、槍はちよんくちよろ、ちよんちよろさんまに持たせろ、まっかせ持たせろま

つかせまつかせくまかせておけるの、さてくまかせておけるの、さてくく有て
ちよんくくちよんちよろ衆有て、ちよんくくちよん女郎衆、ちよんちよろさん
まの槍の手、對の塗笠お先で振れさく、おさきでくさきくくあとくく、あ
とさき揃へた道中、國は花のお江戸にとんとつついた、はや品川を越えてあづまをさし
て下りしを、皆感せぬ者こそなかりけれ

⑥ 參會和曾我道行

江戸半太夫ぶし

戀は曲者皆人の、戀はくせもの皆人の、迷ひの淵や氣の毒の、山より落つるながれの身、
うきねの琴のしらべかや、引手あまたに繁けれど、思ひいだすはかのひとり、かたみの
駒の口を取り、つま故沈むありさまは、しちだ太子に仕へにし車匠童子が其昔、檀特山
の岨づたひ、隄泥駒の諸手綱、もろき涙にくれけるも、それは生きての別れぞや、わが
身のうさに比ぶれば、たちも及ばぬ富士の山、裾野の原は草がくれ、露の下にや兄弟の、
いつなきがらと聞きなさん、鳴立澤にとぶ鳥も、ややあはれを知るならば、傳へてく

戀は曲者云々—
此文句近松の世
繼曾我にもあり
しちだ—悉陀の
訛

大いそ一逢ふにかく

ほくに一はかにの衍か

あり、一蹴鞠の掛壁にかく

歌かじ一原本(なげし)とあり今改む

れの鐘のこゑ、寂滅爲樂とひとげども、輪廻の花は散りもせず、ともに火宅の門をいざ
 いづの三島の鹽木とる、浦のけぶりの一むすび、又ふた結びよれてもつれて解けて亂れ
 て靡き大いそ、君をこいその道すがら、さりし夕べの比までも、こよを通ひて來にけら
 し、此駒よく鞭をうたれし怨みをも、今はかたみと思はずやと、くどき給へばさすが
 けに聞き入れたりし風情にて、かうべをうなだれ耳を伏せ、主の別れを歎きしは、人間
 物をしらぬなり、たが玉章の箱根山、涙にそみて赤澤山、鎌倉山のやつくも、かけけ
 おさるよか足高山、刈藻かくなるふするの床に、石の枕や苦むしろ、ふたりかはさばつ
 らからじ、待つ人もたぬかち路の旅、すどの篠原まくすが原、小菅蓬生玉かづら、おし
 わけかき分けしどろもどろに行きなやむ、主なき駒の馬方いやよ、ほくに出てあふ夜も
 あり、一鞠子川、ながれて早きこしかたや、御身とても我とても、花ならば初櫻月なら
 ば十三夜、さかりに足らぬ身もちて、思ふ人には添ひもせず、かよる憂きめを見る事
 よ、これもたれのゑ、紫の、一もとゆひのゆかりぞや、なげき給ふな歎かじと、諫められ

てはいさめつよ、水もらさじと誓ひてし、その移香も残るや袖、手に手を取りて行くほ
 どに、曾我の里にぞつき給ふ、此人々の心のうち、知るも知らぬもおしなべて、皆感ぜ
 ぬ者こそなかりけれ

㊦としま八けい

あつま半太夫ぶし

たち出て峯の雲、花やあらん春霞、霞の空もうらよかに、匂ひも深き梅若の、柳のみど
 り一しほに、見ます鏡が池の面、木の葉うつもる冬がれの、氷もとけて漣や、みなぎ
 る水の瀬はたえて、今はあさぢのせよらぎと、名も岸陰の山吹は、覺束なくも咲きわた
 る、上野の峯の花ざかり、遙にながめ谷中寺、森の木末も茂りあふ、五月あやめに早苗
 とる、田中の村の夕すぢみ、蚊遣ふすほる夜もすがら、水雞のたよく柴の戸は、たがす
 み田川すみ濁る、世をうし島といふしきや、烏鶺の橋も今こよに、うつせる御世は永代の、
 島々うらくのこりなく、はるか東に見えにける、又名にあふ多田の森、牛の御前のみ
 社も、程ふる軒に月もれて、さびしき夜半の寐覺にも、驛路の鈴の駒形や、かの白川の

うし島一牛島
壺し

霞の關かの寺あ
る一脱あるに
や

まつた一文

膺あけほの膺
染、晴染

大恭一観音

もりあげんと
りあげんの誤か

御製にも、霞の關かの寺ある、石の枕ぞ姥が池、秋の景色はかなしくも、無常が原の草
のつゆ、消ゆるまもなく立ちさらん、橋場のけぶりあはれにも、なからんものは世の人
の、定めなきこそいみじけれ、まつたかしの一村は、うかれ女つどふ里なれば、浮世
の人のたち迷ふ、心の花のいろいろに、おのが姿をしのぶ笠、笠のしづくもこほれ梅、
こりやどうぢや、けさの嵐や夕しぐれ、ぬれてほすまも渚こぐ、あまの小舟のつながら
ぬ、身は浮草の根をたえて、さそはれ渡るあすか川、ながれの身とてさまぐに、品をつ
くせる色小袖、膺あけほの加賀染や、墨繪の源氏色紙おり、をりくかはる風俗は、ま
た面白きところなる、さてまた大悲の御寺は、大同元年彌生のころ、かの川夜なく光
りつよ、波もいさごも金色に、只天竺の無熱池も、かくやとばかり疑はし、されば所の
漁夫どもの、はじめの程は恐れしが、しだいぐに近づきて、見ればまさしく水中に、
佛像あらはれましたせば、いさもりあけんとゆふしほの、波間をわけて千尋の網、引く
や誓の手にもれず、あがらせ給ふ尊像の、利生あらたにましますせば、梢の雪もさながら

えんりー蘭葉か

水所「水」は
「の」の衍か

に、えんりの花とうたがはれ、二六時中の鐘のねは、煩惱戀慕の目をさまし、慈悲哀憐
のともしびは、貪欲瞋恚の根をたちて、發心菩提の身にきする、かゝるそんるん水所を
も知らせ給はぬさうざうしや、はやく御出候へと、詞にみゆる玉かづら、花やかなり
し辯舌の、よに面白くぞかたりける

⑤ 興作二代目 とこよおまん

半太夫ぶし

頼みをかけて住みなれし五智の如來を立ち出て、是や浮世の中やしき、五濁の水と名に
たてど、月も宿かる直江の里、いつも行ききは大下の橋、駒もとどろと踏みならず、音
は高田の宿とかや、いざや火宅を今いつみ、えにしおはどと願はしく、おもはん人はわ
れとわが、心の垢をあら井の里、わこくの本か二ほんぎの宿をも早く板まふく、風の便
もとむるか、思へばつらきせき山や、尙せき餘る泪川、たぎりておつる水上を、なに
尋ねけん物思ふ、わが身とすれば中々に、恨はあらじ返すとも、雲の衣はひとへにて、頓
て跡なく晴れゆけど、心の霧のふかければ、妙光山も見えわかず、おまんなんだにかき

えにし一名にし
の誤なるべし
わこく一和國
二ほんぎ一二本
木を日本にかく

ひろはせー徒歩
すること

こもろー小室、
蕨
きえとーきえて
の誤か

坂坂本ー坂の字
一字冗か

くまがへー熊谷
ころの巢ー鴻巣
に來うをかく

くれて、荒い風にもあてまい君を、ふどきはけしき道すがら、ひろはせ申すうたてやと、
見あけ見おろしかこちけり、とこよの前は御覽じて、こはおるか也、わびぬれば虎ふす
野邊をわけきても身をば惜しまじ、只うきは糸ならなくに別路の、そなたこなたへつれ
ぞ布引山、田中の宿のかり枕、敷くやこもろのおき別れ、只ぬぎすてし沓掛や、淺間の
山の淺からぬ、思ひのけぶり追分の、風に亂れて消えくきえとむくい罪もかる井澤、
日の夕暮の旅衣うする峠のさがしきに、足をつまだて身をちどめ、岩間づたひに肝を消
し、歩みかねたる坂坂本に、いかでかわれを松井田と、しばしも更にやすらはす、安中
すぐれば板ばなの、咲かぬ梢は高崎や、織姫ならぬ身なれども、からす川をばこえぬれ
ど、逢瀬はたえて渚こく、蟹の小舟のいざり火も、たきすさめつと倉賀野の、夢路は
かなき契ぞと、影さへ見ゆる山の井の、淺くは人の思ふとも、わが本性は深谷の水、
ながれの箸のさかづきを、汲みくまがへに馴れそめて、忘れもやらすこの巢や、あは
れ由なきたはぶれば、只をけ川と打ちすてよ、いそぐ心に引かれては、肥馬にも鞭をあ

浦和ー墓にかく

えんり江戸ー厭
離城土にかく

第二代ー第十二
代の誤なるべし

けうの里、又ならびなき大宮と、おもて浦和の瑞籬を、はるかそなたに伏し拜み、むか
ふをみれば家ごとに、旅人をとむるつとめとて、思ひそまぬも洩らさじと、人手を握る
蕨の宿、かくうらめしき世の中も、渡る物から板橋と、えんり江戸をもあとに見て、や
うく行けば程もなく、五つのさはり淺草の、み寺にこそは著き給ふ、此人々の心のうち
あはれなりとも、中々申すばかりはなかりけり

⊕曾我かけ物揃

江戸半太夫ふし

まづ一番に見えたるは人王第二代景行の第二の御子やまただけ尊也、端正美妙の御相好、
御身の長一丈、御力は無量にましくて、十六歳の御時、八十梟をさし殺し、又東夷征
伐に、駿河の國まで御下向、えびす逆意を企てよ、枯草に火をはなつ、ほのほ御身にせ
まりし時、みこと御劍をぬき持て、拂ひ給へば、劍のいきほひ嵐となつて、猛火を忽ち
跡へ吹きもどせば、賊徒残らず亡びけり、今のやいづは爰とかや、尾張熱田の明神とを
がまれさせ給ふなり、扱其次は平城の御宇につかへし田村丸、勇力智謀かねそなへ、念

彼観音の力にて悪魔をしづめ東夷をうち、今は近江の大山に、正一位明神とあらはれ給ふは有難けれ、其次は田原藤太秀郷、將門をほろほし、又龍王に頼まれて、三上の蜈蚣を射とめたる、古今無雙の勇士なり、第四番は余吾將軍、戸隠山の下もみぢ、色ある女性にひかれつゝ、無明の酒にゑひふして、鬼一口もしらざりしを、正八幡の擁護にて、夢さめ鬼神を従へたり、さて其次は御先祖源満仲住吉の御示現にて、多田の大蛇を退治あり、萬民の苦を除き、いま権現とあがめられ、弓矢の神となり給ふ、次に頼光頼信頼義義家悪源太其中に取ても鎮西八郎爲朝は、弓勢は並びなく、鬼が島までせめしたがへ、數百人とりのりたる大船をくつがへす、高麗唐土もおそれをなし、其姿を繪にうつし、門のまもりになすとかや、其次は九郎御曹子聞かす學ばでおのづから、劍術の妙をえて、七尺の屏風高からず、五丈の堀も廣からず、はかりごととは吳子孫子張子房にもこえつらん、同じくつゞいて武藏坊佐藤次信忠信や、坂田渡邊保昌や、定光季武仲光、かれらは何れも忠ふかく、力早業たぐひなき、めいたい無雙の者共なり、若君をはじめ奉り若殿

原の鑑として、其身を照らさば、末代に武略のほまれを得たまはんと、四辯八音よどみなく語り給へば、老若一度にあつとぞ感じける

⑤ 櫻姫ごばん人形

同 半太夫ふし

まづ東は春に似て、大庾嶺の梅の花、むかしながらの山櫻、伏見さへだの花までも、木の梢に咲きみだれ、鶯こがら鶯の、軒端の梅に羽をやすめ、音を出しかねたる所には、けい／＼ほろ／＼の雉の聲、けいならばけいとなくして、何ぞやのちのほろ／＼の聲、いつも春かと思えにけり、南は夏に似て洲濱に池をほらせ、池の其中には蓬萊方丈瀛洲とて、三つの島をぞつかれける、島より陸地へは反橋をかけさせ、橋の其下には浦島太郎が釣のふね、童男くわじよがうつほ舟、五色の糸にてつながれたり、常樂我淨の風ふけば、獅子のあそびはおもしろや、かゝるめてたきをりなればいさみゆしき御馬の初五十三次にかくれない男よをこめたる竹馬をさて／＼見事に飾りたて、手綱かいくりしつしつどう／＼とどんとどつ／＼い／＼とつ／＼い／＼朝の出がけに小室、そんなはぶし出がけにや朝の／＼出がけにや小

四辯一法無碍
辯義無碍辯辭
無碍辨樂說無
碍辨極好音
八音極好音
柔順音和適音
尊嚴音不女音
不誤音深遠音
不竭音
さ一だ一たけだ
の韻か

くわじよ一冠者
か

むろもんれはぶし一こふし三蔵やふたりつんくつれだち、さあく行くべいく、くつ
わの鈴がりんくからく、りんからくりんくからく、りんからく、はいどう
くはいはいはいく、はいどうし、あつばれ御馬か上手とくがのつたか乗つたぞ、さて
く見事え、しやみに引かる駒のいさみや

⑨平あんじやう草花づくし

同 半太夫ぶし

あらいつくしの草のかすく、色は山吹藤の花、黄菊紅菊櫻草、紫苑のんだう女郎花、思
ひの色は岩つよじ、かものお山にさく花は、だんのつよじとしろつよじ、たが手にふれ
てもちつよじ、桔梗芍薬われもかう、忍びくにくるく風車、姿妙なるそのふせい、
早百合にゆりかけくさつとゆりかけ姫百合に、いつか添寝の床夏や、名もゆかしき
は美人草、かほよ花こそひとしほに、色も匂ひも深見草、おく白露の玉椿、身をせばめ
つと影やどす、月見草こそやさしけれ、けにやまことに有明の、つれなく見えし別れよ
り、ふたりぬる夜の悲しきは、おのが翼はかはせども、思ひしらすや心せで、まだき鳴

かほよ花―杜若

く音の雞頭花、つばなまじりの葶草、君がすさみの手鞠の花よ、ひいふうみいよこよの
への、とんと落ちて名はたよじ、深き心の底意をば、人にもらすな水あふひ、池に澤
瀉真孤ぐさ、我は野にさくあだ花よ、折らばとく折れ散らぬまに、まれのみゆきにいざ
さらば、御酒をそなへてとりくくに、叡慮をすどしめたてまつる

⑩みさをのまへ忍の段

同 半太夫ぶし

給ひけり、わびしき中にも世の中の、戀路の色にてとどめたり、うつよなくも天皇は、み
さをの前が姿をば、御覽せしよりあけくれに、心をつくさせ給ひつよ、御母後の御前を
ば忍び出させたまひつよ、姫のねやに忍び入り、こなたにたよすみおはせしが、障子に
うつる灯火の、かけのうちより見給へば、空柱のしめやかにけぶり消え行く折ふしに、
みさをの前は障子をあけて見給ふに、雪にきらめく春の月、しくものもなきけしきやと、
につこと笑ひしそのふせい、巫山の神女が雲となり、契りのこせし面影や、李夫人がい
しへ反魂香にうつろひしも、物のかずにはあるまじと、叡慮ひとしほなやましく、千々

いもとーいものが
の誤か

いなせー百應

神のいがき云々
ー伊勢物語ーち
はやふる神のい
がきもねえぬべ
し大宮人の見ま
くはしさにー

に碎くるばかりにて、思ひにばうしてまします、雪をまろめてひとつかね、投げつけ
給へばみさをの前、あよしなやたれなるらんと、袂にかよる雪うちはらひく、さは
りさはらぬ返答に、天皇いよく、あこがれさせ給ひつゝ、いやよそくしきみさをの前、
はづかしながら朕すでにいと姿をかいま見て、たち迷ひぬる雲の足、うかれてこれまで
きたりたり、せめてはそれかと白妙の、雪にはあらで消えはてん、我玉の緒もなよ竹の、
ひとよばかりは名もたよじ、とけて語らんわが思ひ、はらさせよかしのたまへば、み
さをの前はうけ給はり、しばらくいなせなかりしが、やよあつて申すやう、あら勿體な
の御事や、けにや戀路の習ひにて、高きいやしき限らねど、さしてそれともあやめ草、あ
やめも知らぬわれゆるゑに、君の御名をたてんこと、さりとはおそろしと、許させ給へ
と申しつゝ、さしうつぶいて音もせず、君はいよく、堪へかねさせ給ひ、神のいがきを
こえぬるも、戀路のならひ咎めなし、うら若き初草の、ねよけに見ゆる身もちて、た
が手枕のむつごとぞ、語り給へと有りければ、姫は此由聞き給ひ、まことに君の宣旨に

ていとー帝都か

よはの月ー夜半
を弱にかく、

は、靡かぬ草木はなけれども、此道一つは稻舟の、とても靡かぬ我心、引き見させたま
はんとや、あらはづかしの御ことや、はやく歸らせ給ふべし、君はあきれて立ち給ふ
が、よし、此身はていとよりおち人の身となれば、女にも見おとされ、かよるつれな
き有様ぞや、我もり國が手となつて、かよる不義をいひ出し、おもてを見られんはづか
しさよ、さりとはあやにくにおほし切られぬ戀路のほど、歸らんとするに引かるよは
うしろがみの、行きてはかへり歸りては、又ゆきに冷えゆく玉體の、いたはしかりける
次第也、みさをの前はさしのぞき、御いとほしくや思ひけん、覺えず障子をさつとあけ、
のういかに我君様春の夜風はお毒ぞや、御惱となれば物憂きに、こなたへ入らせ給へと
て、御手を取つて内に入る、御手もさすがよはの月、雲にかくると風情にて、しとねの
内に入り給ひ、末は女御后にも立て給はんと御誓、わりなく通はせ給ふにぞ、後字多
の女御と申せしは、みさをの前の御事なり、比翼連理の御契、心のうちも下ひももしつ
ほと解けたる御なかく、貴賤上下おしなべて、皆感ぜぬものこそなかりけれ

㊥櫻づくし

同 半太夫ぶし

年のよはひは十三四五なるちご櫻、みめは楊貴妃桐ヶ谷、目元にこぼるよ鹽竈や、召した小袖はなにくぞ、淺黄櫻に樺櫻、もみ紅梅の緋櫻を、めしかへくなさると時は、しづが心はさみせん、ほそりて三の糸櫻、まつ夜は君がおそざくら、忍ぶに吠ゆな犬櫻、後世は少しも願ひはせねど、墨染櫻普賢象、かの敦盛にうき世をすてし熊谷櫻、奈良の都の八重一重、京九重はひろしといへど、又と有るまいあの君を、花のしんに立ておいて、我下草とぞ成りにける

小うた

㊦松風

かたみこそ今はあだなれ是なくば、忘るよ隙もありなんと、あらなつかしのゆきさまや、馴れし其夜のいひかはし、ふたりを召して立ちわかれ、今はあだしばし別るととも、松と

ゆきさま一行平
松としらかは

松としきかばの
観なるべし

しらかは今かへり、またばこんとの言の葉をいひがひなし、いや世を去りて松風も村雨も袖のみぬれて由なやな、身にも及ばぬ戀ゆゑに、かたりの衣や立烏帽子、空炷の香は残れども、おもかけは見えもせず、夢ともなしやうつとも、松の木蔭にたよすみて、袖は涙にひたしけれ

㊧わかれのかね

忘るなよ程は雲井になりぬとも空行く月ともろともに、めぐり逢瀬の松島や、雄島の蟹のぬれ衣、いかにほすとも蟹小舟、こがれこがるよ思ひねに、床はづかしきけさの夢、さめては元の涙、争ふ雲間より、それとしもなきほとよぎす、只一聲を聞くよりも、憂きを問ふかと疑はれ、夏もはやなかば過ぎ行く、いよ初秋の蟲の聲々、おさびし、あはれ催す小田守の、庵さびしきねやの内、住むかひもなき世の中に、わかれの鐘を清水の、あぐれば大悲観世音、誓をたのみ今一度、たがひに見えつみえられつ、かはす詞もなかりせば、とても此身はむもれ木の、くちき櫻がさね、さりとてはいつくる春に、我花のひ

おさびし四字
無用なるべし

忘るなよ伊勢
物語の歌、下旬
「空行く月のめ
ぐり逢ふまで」

らくる事のありはらや、昔を今になぞらへて、思ひの床にふし沈む

③うば玉

あふ事ことのたえてし無なくはなかくに、戀こふる心こころのなになれや、知らてだにこそ年としをへて、逢あひ見みしのちこそ戀こはまさりけり、猶なほあやにくの秋あきの夜よや、それとは知らでうば玉たまの、夜よ半はんのけしきも明あけそめて、わかれし床とこのうき枕まくら、わが身み一つの思おもひしに、涙なみださへこそとどまらで、淵ふちは瀬せとなるに飛あ鳥か川がは、ふかき情なさけの袖そでふれし、身みをしる雨あめは降ふらねども、心のそらに行いきかよふ、人ひとしれず猶なほあふ事ことの、はるかなる身みの物もの思おもひ、うき身みをたれか慰なぐさめん、思おもひしらすもとはぬ身みの、戀こは盡つきせぬ物ものおもひ、心こころつくしの關せきにこそあれ

④しのぶ戀

忍しのぶ心こころは思おもひにまけて、浮う名な忽たちち立たつともよしや大だい事じかさ、流ながれ絶たえせぬ涙なみだの川がはの、なみだ立た騒さわぐ我心こころ、いな物ものくになる鐘かねの音ね、逢あふに別わかると命いのちにて、不ふ首しゅ尾びにかへるあやにくや

松の落葉首卷 終

なみだ立ち騒ぐ
なみだ立ち騒ぐ
の涙なるべし

松の落葉 卷第二 中興當流淨瑠璃

目録

- 一 うつほぶね 武江半太夫ぶし 竹林寺 同人作
- 三 文ことば 同人作 昆布道成寺 同人作
- 五 灸あすゑそが 同人作 樽屋おせん 同人作
- 七 晴明神おろし 虎屋喜元 八 染色づくし 土佐少椽
- 九 現在熊坂 さつま外記 十 藤壺弘徽殿 虎屋榮閑
- 十一 石山寺道行 宇治加賀掾 十二 四條河原涼八景 同人作
- 十三 萬屋助六道行 都太夫一中 十四 子の日の松 同人作

①うつばぶね

あづま 半太夫ぶし

松帆の浦のうつほ舟、身をなきものに思ひさへ、命もがなと慕ふまことに大ぬさの、ち
 ぢの社のゆふだすき、かけてもつれしさよめにも、どうで女房にや持ちやさんすまい、わ
 しが勤めのまよならぬ、よひくごとの亂髪、空おそろしや氣にそまぬ、殿に添ひねの
 枕にも、鳥も鳴けかし鐘もなれ、嬉ししのよめ、あさけに憂きを忘るよその風情、こ
 はい夢みし心なり、かうしたつらい勤めにも、指折りをりつよかたさまに、逢ふがうれ
 しゆてうかくと、どうした事の縁ぢややら、忘るよひまも無いわいな、深き思ひは
 床の海、波はこすとも末の松、かはらぬ色をたのむ身、君とむすびし下紐を、ひとり
 解かじ玉の緒の、たえぬ契はありとも、沈みはてにし敷妙に、ふたりが袖をやしほ
 らん

②竹林寺

同人作

白無垢にひとへ帯した夜の雪、いつそのく氣か聞きたいの、とすればかくすそのうちに、

油はこれと一油
はあれどの誤か

ほんに一穂にか
く

みづから一昆布
にて製したる食
物の名

下寺町になく鳥、竹林寺の鐘のこゑ、油はこれととうしんなし、何の葉ぢややら秋風の、
 雨戸々々におとすなり、心細さようらめしさ、それほど急ひはあるまいに、申し／＼とお
 こすれど、只くちなしと物いはず、にくい事ぢやと思へども、氣に入りたいが因果なり

③文ことば

同人作

まことに文はねやの友、いよし御見と書いたるは、ほだしの種か花すよき、ほんに誓文
 いとしさに、いくよの夢を結び文、かたさままるる梅よりと、おもひらくそるべくと、わ
 けの盃、いろめいて、わきていづみのおもはくは、只あひましてく、またのえにしを
 まつかしく

④昆布道成寺

同人作

みづからと申すはそもたれぢや、そなたのためにも姉が小路のこぶぢや、何故にござん
 した、何故とはきよくもなや、うらみたらしく鱈汁の、つまの心のあだしさに、わらは
 はだしに使はれて、きも移香のこせうの粉、はつとなつみと聞くからに、朝夕胸をやき

松前―待つまい
にかく

昆布や、いふかいはぬかかもじこぶ、心にこめて結び昆布、しのぶむちつけみちのくの、
つらき人をば松前昆布とは思へども、又わかかへる心の水、酔に入りしほにおほるよも、
前世定まる宿縁なり、嗔恚の海を泳ぎこし、いづくまでもつきまとひ、くるりくるり
卷昆布や、くひさきひささき刻昆布、思ひを晴らさで置くべきかと、いふ聲ばかりは火
鉢の底にひどき渡つて、ほむら思ひは猛火ともえ、五徳てつきう金火箸、思へばこのか
ね怨めしやと、又あぶりこにぞ入りにけり

⑤ 灸するそが

同人作

さく―酒
なる日―成就日
卯腹云々―灸を
する日と所と
をいへる詠

いつよりかさよばかりにて朝夕の、かれひもうすき面やせに、身のいたづらやあだ人の、
折しも頃は如月や、二日は灸によき日ぞと、暦ひらけばなる日とや、なるとならずと思
ひ立つ、卯腹辰腿寅背中といひて笑み顔の、千代もかはらぬかはらけに、さもいつくし
きさしも草、みよなら袖をかざしのうちかたと、ひねりくく玉づさを、二つの星と點
おろし、ゆくへ知らずに立つけぶり、あつうやおほしめすらんと、わけていたはるよそ

つま―親、妻

わかい―わらひ
の誤か
せうしかくれば
―障子あくれば
の誤か

かぞい―父母

ほひは、あはれにも又ぬれぎぬの、つましならずはかくせじと、一火するてはたはむれ
の、よそめの有らばいかにせん、今火をとりて前三や、うしろ七つはとかじ下ひもと、た
がひにわかいこなさんとわしが思ひの塵つもる、山を見さんせこなたへと、せうしかく
れば富士の雪

⑥ 樽屋おせん狂女跡

同人作

狂ふらんあと年のよはひは二八ばかりの若き人、世にはたぐひも夏山の、しけみが陰に
こがくれし、君のゆくへはいづくぞや、しろしめされてさふらはど、教へてたべや人々
と、聲をあけてぞ泣き給ふ、手ををりて悲しきことをかぞいろに、過ぎおくれつと数な
らぬ、うき身のよるべなみだ川、袖のしがらみひまなきに、思ひかさなる年月の、千代
に八千代の玉つばき、變らぬ色を頼みつと、かけし情も在原の、昔男か光る君、かを
る中將夕ぎりより、猶まさとしの戀しやと、聲を上げてぞなけかるよ、雨をしのぐやみ
のと國、笠のしづくも垂井の宿、泪ながらに立ち出て、はじめて旅をしな川に、しばし

つかれ—わかれ
の誤なるべし

なじみの君とわが、つかれの袖をぬれてほす、山路の菊の露のまも、忘らればこそ中々に、思ひ出さんやうもなし、あら怨めしの我身やと、倒れふしてぞ泣き給ふ

⑦ 晴明神おろし

虎屋喜元

うちそれ—恐れ

其時晴明するくと罷り出でおうそれおほきことにて候へども、それがしが神變にて弘徽殿を再びよみがへらせ奉らば、御修行おほしめしとどまらせ給はれと、憚りなうこそ申しける、謹上再拜くうやまつて申し奉る、上は梵天帝釋四大天王閻魔法王五道の冥官、下界の地には伊勢は神明天照皇大神宮、雨の宮風の宮月よみ日よみ天の岩戸は大日如來、淺熊嶽にはふく一まん虚空藏、王城の鎮守には、稻荷祇園に加茂春日、貴舟は五社の大明神、鞍馬山には多聞天、高きお山は愛宕山、大權現男山正八幡大菩薩、松の尾平野梅の宮、伏見に一こん五香の宮、大和に葛城金峯山、塔の峯には大織冠、龍田は木花開耶姬、熊野は三つの御山なり、神功皇后、那智は千手、觀音なり、津の國にいたつては天王寺に聖德太子、住吉四社の大明神、四國の地には讚岐に金毘羅同じく志度

はつこ—八講

寺の觀世音、筑紫に彦山、出雲の國に大社、杵築の明神伯耆に大山、丹後に成相切戸の文珠、近江の國に聞えたる日吉山王二十一社、お多賀白髭比良のはつこ、湖水にあらはれ給ひしは、竹生島の辨天なり、美濃國には南宮高山劍の權現、越中にくりから不動明王なり、伊豆に三島箱根は二社の大權現、本地は文珠師利菩薩、富士は淺間大菩薩、遠江の國には秋葉駒形濱名の明神、三河に入つては寶來寺、峯の藥師は十二神、尾張の國には一の宮二の宮、第三にあたつては八劍熱田の大明神、惣じて日本六十餘州三千七百餘社なり、天にあつては日月星辰二十八宿、大地の底におはします堅牢地神にいたるまで、ことごとく勸請おろし奉る、たとひ定業かぎりの命なりとも、今一どよみがへらせてたび給へはて、せめかけく、「いのりけり、佛神感應したまひけん、天下俄に震動して、御廟二つにさつとわれ、女御忽ちよみがへらせ、君はいづくにましますぞ、君はくととの給へば、御門夢ともわきまへず、のうこは誠かと思はず知らず抱きつき、是はくとばかりにて、三大臣晴明にとりつき、およつかまつたりくと、御よろこび限なし、晴

給へはて—給へ
とての衍か

